

埼玉県戸田市遺跡調査会報告書 第6集

かみ と だ ほん むら
上戸田本村遺跡II

1996

戸田市遺跡調査会

は じ め に

戸田市遺跡調査会

会 長 奥 墨 修 一

本市の最初の考古学的発掘調査は、昭和42年から本格的に始まり、それ以来、弥生、古墳両期にわたる遺跡を中心に発掘調査を実施してまいりました。

最近では、埼京線の開通に伴い、マンションの建設等が急速に進み、街の様相も一変してまいりました。このような中で、文化財の保護を目的とした緊急発掘を実施しております。

この上戸田本村遺跡は、荒川の氾濫によって形成された自然堤防上にあり、鍛冶谷・新田口遺跡とともに市を代表する遺跡です。昭和53年に調査を実施し、古墳時代の集落跡を発掘しました。

今回の第2次調査は、上戸田本村遺跡の一部ではありますが、古墳時代の住居跡13軒や溝、堀などが検出されました。そして沢山の貴重な出土品、土器、石器が出土し、多くの成果を上げることができ、また学術的にも貴重な記録です。

本書が埋蔵文化財の保護と普及活用の資料として、また学術研究の基礎資料としてご利用いただければ幸いです。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、多大な御理解と御協力を賜りました熊木惣次郎様、そして直接発掘調査に携わっていただきました皆様方に深く感謝を申し上げあいさついたします。

例 言

- 1 本書は、埼玉県戸田市本町3丁目1829-1, -2番地(6番4号)の共同住宅建設工事に伴って発掘調査された上戸田本村遺跡第2次調査の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査事業及び整理事業は、共同住宅建設の事業者である熊木惣次郎氏(戸田市南町8番32号)から、戸田市遺跡調査会が委託を受けて実施したものである。
- 3 発掘調査は、平成5年9月20日から11月20日にわたって行った。
- 4 発掘調査は別表に掲げた調査組織により実施した。
発掘担当者 小島清一(戸田市教育委員会 生涯学習課)
- 5 出土品の整理及び図版の作成は、発掘担当者の指導により、整理参加者全員で行った。
- 6 本書の作成にあたり、執筆、写真撮影、編集は小島が行い、渡辺豊子、尾形美枝子の協力を得た。
遺構図版及び基本土層図は渡辺、尾形が作成した。
- 7 発掘調査から報告書を作成するまでの過程で、下記の方々から御教示、御協力を賜った記して謝意を表します。(敬称略)

浅野晴樹 伊藤和彦 小畑守二 野沢均 戸田市立戸田中学校

戸田市立郷土博物館 戸田市消防本部 戸田市遺跡調査協力会

- 8 発掘調査及び整理参加者は、下記のとおりである。

浅井まり子 上原 勇 榎本 昇 榎本 真由美 大井 公代
岡崎 久子 尾形 美枝子 嘉規 小夜子 桑原 裕子 小林 恵美子
駒崎 文江 五味 藤子 早乙女 孝子 信濃 節子 荘 由香
鈴木 カエ 関 徳太郎 高橋 富美子 高松 国光 寺内 愛
根本 真 広瀬 幸子 松田 香代子 森田 正雄 若林 正巳
渡辺 豊子

目 次

はじめに

戸田市遺跡調査会会長

奥 墨 修 一

例 言

凡 例

1	発掘調査に至るまでの経過	1
2	発掘調査の経過	1
3	上戸田本村遺跡の立地と環境	3
4	上戸田本村遺跡の概観	5
5	遺構と出土遺物	8
	(1) 住居跡と出土遺物	8
	(2) 溝と出土遺物	30
	(3) 堀と出土遺物	50
	(4) その他の遺構と出土遺物	57
	(5) グリッド出土の遺物	58
6	まとめ	59

挿 図 目 次

第1図	上戸田本村遺跡Ⅱ及び周辺の遺跡位置図	3
第2図	大正期の上戸田本村遺跡周辺の地形図	4
第3図	上戸田本村遺跡調査地位置図	5
第4図	基本土層図	6
第5図	上戸田本村遺跡Ⅱ遺構配置図	7
第6図	第1号住居跡実測図及び遺物出土位置図	8
第7図	第1号住居跡出土遺物実測図	9
第8図	第2号住居跡実測図及び遺物出土位置図	10
第9図	第2号住居跡出土遺物実測図	10
第10図	第3号住居跡遺物出土位置図	11
第11図	第3号住居跡滑石製小玉実測図	12
第12図	第3号住居跡出土遺物実測図	12
第13図	第3号住居跡実測図	13
第14図	第4号住居跡実測図及び遺物出土位置図	14
第15図	第5号住居跡実測図及び遺物出土位置図	15
第16図	第5号住居跡出土遺物実測図	16
第17図	第6・7号住居跡実測図及び遺物出土位置図	17
第18図	第6号住居跡出土遺物実測図	17
第19図	第8号住居跡実測図及び遺物出土位置図	19
第20図	第8号住居跡出土遺物実測図	20
第21図	第9号住居跡実測図及び遺物出土位置図	21
第22図	第10号住居跡実測図及び遺物出土位置図	22
第23図	第10号住居跡出土遺物実測図	23
第24図	第11号住居跡実測図	24
第25図	第11号住居跡遺物出土位置図	25
第26図	第11号住居跡出土遺物実測図	25

第27図	第12号住居跡実測図及び遺物出土位置図	27
第28図	第12号住居跡出土遺物実測図	27
第29図	第13号住居跡実測図及び遺物出土位置図	29
第30図	第13号住居跡出土遺物実測図	29
第31図	第1号溝実測図及び遺物出土位置図	31
第32図	第1号溝出土遺物実測図 (1)	33
第33図	第1号溝出土遺物実測図 (2)	34
第34図	第1号溝出土遺物実測図 (3)	35
第35図	第1号溝出土遺物実測図 (4)	36
第36図	第1号溝出土遺物実測図 (5)	37
第37図	第1号溝出土遺物実測図 (6)	38
第38図	第1号溝出土遺物実測図 (7)	39
第39図	第1号溝出土遺物実測図 (8)	40
第40図	第1・2・3号堀実測図	48
第41図	第1号堀出土遺物実測図	52
第42図	第2号堀出土遺物実測図 (1)	53
第43図	第2号堀出土遺物実測図 (2)	54
第44図	第3号堀出土遺物実測図	56
第45図	ピット実測図	57
第46図	グリッド出土の遺物実測図	58

表 目 次

第1表	第1号住居跡出土遺物	9
第2表	第2号住居跡出土遺物	10
第3表	第3号住居跡出土滑石製小玉	11
第4表	第3号住居跡出土遺物	13
第5表	第5号住居跡出土遺物	16
第6表	第6号住居跡出土遺物	17
第7表	第8号住居跡出土遺物	20
第8表	第10号住居跡出土遺物	23
第9表	第11号住居跡出土遺物	26
第10表	第12号住居跡出土遺物	27
第11表	第13号住居跡出土遺物	29
第12表	第1号溝出土遺物 (1)	33
第13表	第1号溝出土遺物 (2)	40
第14表	第1号溝出土遺物 (3)	41
第15表	第1号溝出土遺物 (4)	42
第16表	第1号溝出土遺物 (5)	43
第17表	第1号溝出土遺物 (6)	44
第18表	第1号溝出土遺物 (7)	45
第19表	第1号溝出土遺物 (8)	46
第20表	第1号溝出土遺物 (9)	47
第21表	第1号堀出土遺物	52
第22表	第2号堀出土遺物 (1)	54
第23表	第2号堀出土遺物 (2)	55
第24表	第3号堀出土遺物	56
第25表	ピット一覧表	57
第26表	グリッド出土の遺物	58

図版目次

- 図版1 (1)上戸田本村遺跡Ⅱの位置
(2)調査区域全景
- 図版2 (1)第1号住居跡(南から)
(2)第2号住居跡(南から)
- 図版3 (1)第3号住居跡(南から)
(2)第3号住居跡調査風景
- 図版4 (1)第4号住居跡(南から)
(2)第6・7号住居跡(東から)
- 図版5 (1)第1～5号住居跡切り合い状態
(2)第8号住居跡(西から)
- 図版6 (1)第9号住居跡(東から)
(2)第10号住居跡(北から)
- 図版7 (1)第11号住居跡(東から)
(2)第13号住居跡(南から)
- 図版8 (1)第1号溝(斜方向の溝)
(2)土器集中地点(北から)
(3)土器集中地点(上から)
(4)土器集中地点(東から)
(5)第1号溝調査風景
- 図版9 (1)第1号溝(南から)
(2)遺構断面(SPA-A[^])
(3)遺構断面(SPB-B[^])
(4)土器出土状態(第32図-1)
(5)土器出土状態(第33図-4)
- 図版10 (1)第1号堀(南から)
(2)第1号堀の第1号井戸状遺構
(3)第1号堀の第2号井戸状遺構
(4)第1号堀断面(SPB-B[^])
(5)第1号堀断面(SPC-C[^])
- 図版11 (1)第2・3号堀(西から)
(2)第2号堀の第3号井戸状遺構
(3)第3号堀の第5号井戸状遺構
(4)第2号堀断面(SPD-D[^])
(5)第1～3号堀・第1号溝断面(SPE-E[^])
- 図版12 (1)第1号住居跡出土遺物(第7図-1・2)
(2)第3号住居跡出土滑石製小玉(第10図-1)
(3)第3号住居跡出土遺物(第13図-7)
(4)第5号住居跡出土遺物(第16図-2)
(5)第5・6・10号住居跡出土遺物
(第16図-1・第18図-1・第23図-1・3)
- 図版13 (1)第8号住居跡・第1号溝出土遺物
(第20図-3・第35図-39)
(2)第10号住居跡出土遺物(第23図-2)
(3)第10号住居跡出土遺物(第23図-4・5)
(4)第11号住居跡出土遺物(第26図-2)
(5)第12号住居跡出土遺物(第28図-1)
(6)グリッド出土の遺物(第45図-2)
- 図版14 (1)第1号溝出土遺物(第32図-1)
(2)第1号溝出土遺物(第33図-4)
(3)第1号溝出土遺物(第34図-18)
(4)第1号溝出土遺物(第34図-19)
(5)第1号溝出土遺物(第34図-21)
(6)第1号溝出土遺物(第34図-20)
- 図版15 (1)第1号溝出土遺物(壺形土器の口縁部)
(第33図)
(2)第1号溝出土遺物(壺形土器の底部)
(第36図)
- 図版16 (1)第1号溝出土遺物(第35図-29)
(2)第1号溝出土遺物(第35図-36)
(3)第1号溝出土遺物(第35図-37)
(4)第1号溝出土遺物(第35図-38)
(5)第1号溝出土遺物(第38図-64)
(6)第1号溝出土遺物(第38図-65)
- 図版17 (1)第1号溝出土遺物(第37図-49)
(2)第1号溝出土遺物(第37図-51)
(3)第1号溝出土遺物(第37図-53)
(4)第1号溝出土遺物(第37図-54)
(5)第1号溝出土遺物(第38図-56)
(6)第1号溝出土遺物(第38図-57)
- 図版18 (1)第1号溝出土遺物
(台付甕形土器の脚台部)(第38図)
(2)第1号溝出土遺物(第39図-66~68)
- 図版19 (1)第1号堀出土遺物(第41図)
(2)第2号堀出土遺物(第42・43図)
- 図版20 (1)第2号堀出土遺物(第42・43図)
(2)第3号堀出土遺物(第44図)

発掘調査の組織

会 長	戸田市教育委員会教育長	奥 墨 修 一
理 事	戸田市教育委員会教育次長	石 山 勝 成
(会長代理)		
理 事	戸田市文化財保護委員	金 子 弘
”	”	萩 原 勝 明
”	戸田市開発部都市計画課課長	熊 谷 清 志
”	戸田市開発部まちづくり推進課課長	家 崎 匡
”	戸田市建設部建築課課長	杉 浦 剛 男
”	戸田市教育委員会生涯学習課課長	石 井 勝 則
監 事	戸田市社会教育委員会委員長	春 山 嘉 臣
”	戸田市郷土博物館館長	伊 藤 和 彦
事務局長	戸田市教育委員会生涯学習課課長	石 井 勝 則
”	” 専 門 員	和 田 卓
”	” 主 任	宮 崎 敏志子
調 査 員	” 学 芸 員	小 島 清 一

凡 例

- 本書に掲載した挿図の縮尺は、原則として遺構図版 1/80・1/40、遺物実測図 1/4 である。
それ以外は、図に添えたスケールを参照されたい。
- 遺構・遺物図中の焼土、炭化物等の標示は次のとおりである。



焼土



炭化物



黄褐色粘土塊



土器の赤彩部分

- 土器観察表における胎土の記号は、下記のとおりである。
A：石英 B：金雲母 C：斜長石 D：黒く光る石 E：赤色粒子
F：白色粒子 G：褐色粒子 H：砂粒子
- 土層中の水系レベルは、すべて標高3.1mである。

1 発掘調査に至るまでの経過

平成5年5月、戸田市南町8番32号の熊木惣次郎氏から、戸田市本町3丁目1829-1番地他(6番4号)に共同住宅建設の開発行為に伴う事前協議がなされた。

戸田市では、昭和60年の埼京線の開通により、共同住宅をはじめ事務所建設等の開発が進み、文化財の保護が急務となっている。このような状況において、戸田市教育委員会では開発担当所管課と各種の協議を重ね、文化財保護と開発事業との調整を図っている。

上戸田本村遺跡は、古くから「くまん塚」と称する古墳跡が存在することが知られており、また市史編纂事業として昭和53年に発掘調査が行われて以来、古墳時代の集落跡が存在することが明らかになっている。

教育委員会では当該地が上戸田本村遺跡の包蔵地に位置するため、開発を行う際には遺跡の現状を確認するため、試掘調査を実施する旨の回答をした。

その後、数度にわたる協議を重ね、平成5年7月22日に試掘調査を実施した。結果、古墳時代の住居跡や、溝跡等を確認。教育委員会では調査結果をふまえ、その取り扱いについて事業者と協議を行った。現地における遺跡の保存については計画を変更することが困難であることから、事前に記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

これをもって、事業者からは平成5年9月8日付で、文化財保護法第57条の2第1項の規定による埋蔵文化財発掘届が文化庁長官あてに提出された。発掘調査に際し、教育委員会と事業者で協議し、事業が緊急を要することを考慮し、戸田市遺跡調査会会長と事業者は平成5年9月14日に事業委託契約を締結した。発掘調査は、平成5年9月20日から開始することとなった。

戸田市遺跡調査会からは、文化財保護法第57条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査届が文化庁長官あてに提出された。

なお、文化庁長官からは、平成5年11月30日付、委保第5の1620号をもって発掘届を受理した旨通知があった。

2 発掘調査の経過 一日誌抄

上戸田本村遺跡第2次調査は、平成5年9月20日から11月20日までの2カ月間で実施した。初秋から調査がはじまり過ごしやすい季節であったが、雨天の日が多く、低い立地条件の当地にあっては幾度か水没を免れず、水対策が欠かせない調査であった。

以下、調査経過が5期に区分できるので整理しながら経過を見ていきたい。

(9月20日～9月24日)

20日の早朝より関係者が集まり、調査が速やかに運ぶよう調査方法を再確認、重機により表土の掘削作業を開始する。掘削にあたっては、試掘調査の結果をもとに遺構確認面である黄褐色土層まで慎重に行った。初日から住居跡等の遺構と思われる黒褐色土が大きく

広がり、遺構が濃密に重複している状況が把握された。22日からは人力により表土の掘削を行っている。実質5日間を要している。なお、基準点測量及びグリッドの設定を9月24日に行った。

(9月27日～10月5日)

表土が除去され、27日から遺構確認作業に移行する。南側から北に向かって遺構確認面である黄褐色粘土層の精査を丹念に行った。とくに住居跡については、複雑に切り合っており困難を極めたが、慎重に遺構の新旧関係を確認しながら行った。この段階で明らかになった主な遺構は住居跡13軒、溝1本で、中央部分において「T」字形に堀が確認された。住居跡は、火を受けたものがあり、表面から焼土や炭化物が露出しているような状況であった。

(10月6日～11月12日)

6日から確認された各遺構の調査を開始する。第1号住居跡から取りかかり、並行して堀の調査を進めた。遺物の取り上げについては、分布図を作成し、火を受けた第3号住居跡については焼土や炭化物の広がりを実測図に記録した。

(11月15日～11月16日)

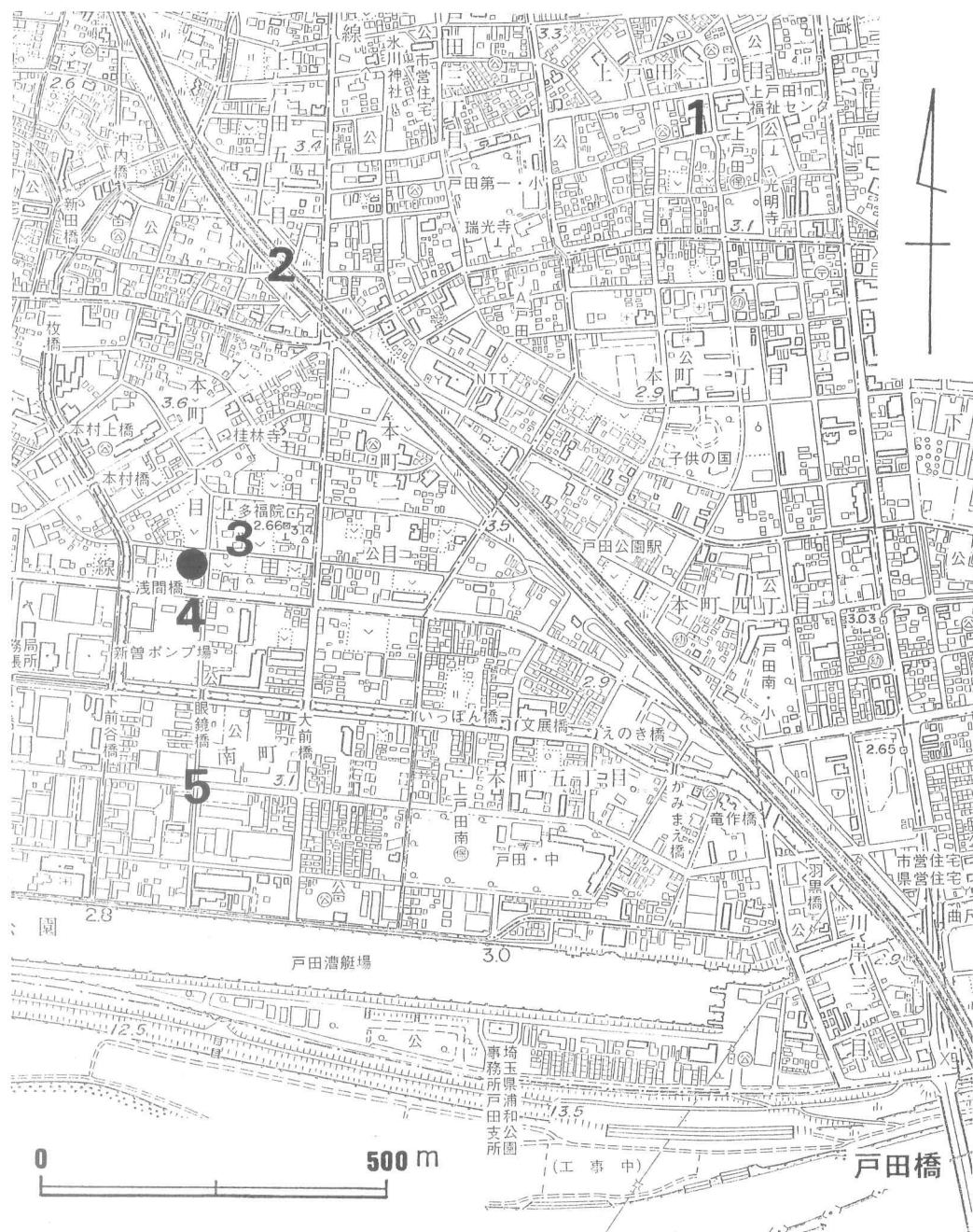
調査区域内における遺構の全容を写真に記録するため、15日から全員で清掃作業を行い、16日に全体の写真撮影を行った。なお、写真撮影については、戸田市消防本部の協力を得て「散水車」「はしご車」を導入していただき、調査区の上空30mから撮影を行った。

(11月17日～11月20日)

17日から検出された遺構の全体測量を行う。19日に予定された現地における全作業を終了し、20日に約2カ月を過ごしたプレハブ内の資材を撤収した。

調査日数38日、参加延べ人数409名であった。

3 上戸田本村遺跡の立地と環境



- 1. 前谷遺跡 2. 鍛冶谷・新田口遺跡 3. 上戸田本村遺跡
- 4. 南町遺跡 5. 南原遺跡 ● 上戸田本村遺跡II

第1図 上戸田本村遺跡II及び周辺の遺跡位置図

上戸田本村遺跡Ⅱ（第2次調査）の調査地は、戸田市本町3丁目1829-1番地他（6番4号）に位置している。JR埼京線の「戸田公園駅」より約500mのところである。交通の利便性から共同住宅等の開発が盛んな地域となっている。

戸田市は埼玉県の南端に位置し、東は川口市、北は浦和・蕨両市、西から南は荒川を境とし朝霞・和光両市、そして東京都板橋区・北区と接している。面積は、18.17km²を測る。東には中山道が、西には国道17号バイパスが、中央には東北・上越新幹線及び埼京線が縦断し東京へと通じている。かつて荒川には「戸田の渡し」や「早瀬の渡し」があって江戸への玄関口として交通の要衝となっていたところである。現在、荒川は西部では北西から南東へ流れ、笹目付近で東へと方向を変え南部ではほぼ東西に流路をとっている。

こうした周辺地域の状況の下で、埼玉県選定重要遺跡である鍛冶谷・新田口遺跡をはじめとする市内の遺跡群が分布する低平な微高地は、荒川（旧入間川）の溢流によって形成された火山灰質の黄褐色粘土層を基盤としている。標高は4～5mを測る。

戸田市内における主な遺跡は、中央部に位置しており、第1図にも記したとおり前谷遺跡、鍛冶谷・新田口遺跡、南原遺跡等が連なり、上戸田川に添うように遺跡群を形成している。いずれも弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡や方形周溝墓等を検出する集落跡である。

上戸田本村遺跡はNo.3で、鍛冶谷・新田口遺跡の南側で自然堤防の中ほどに位置するものである。

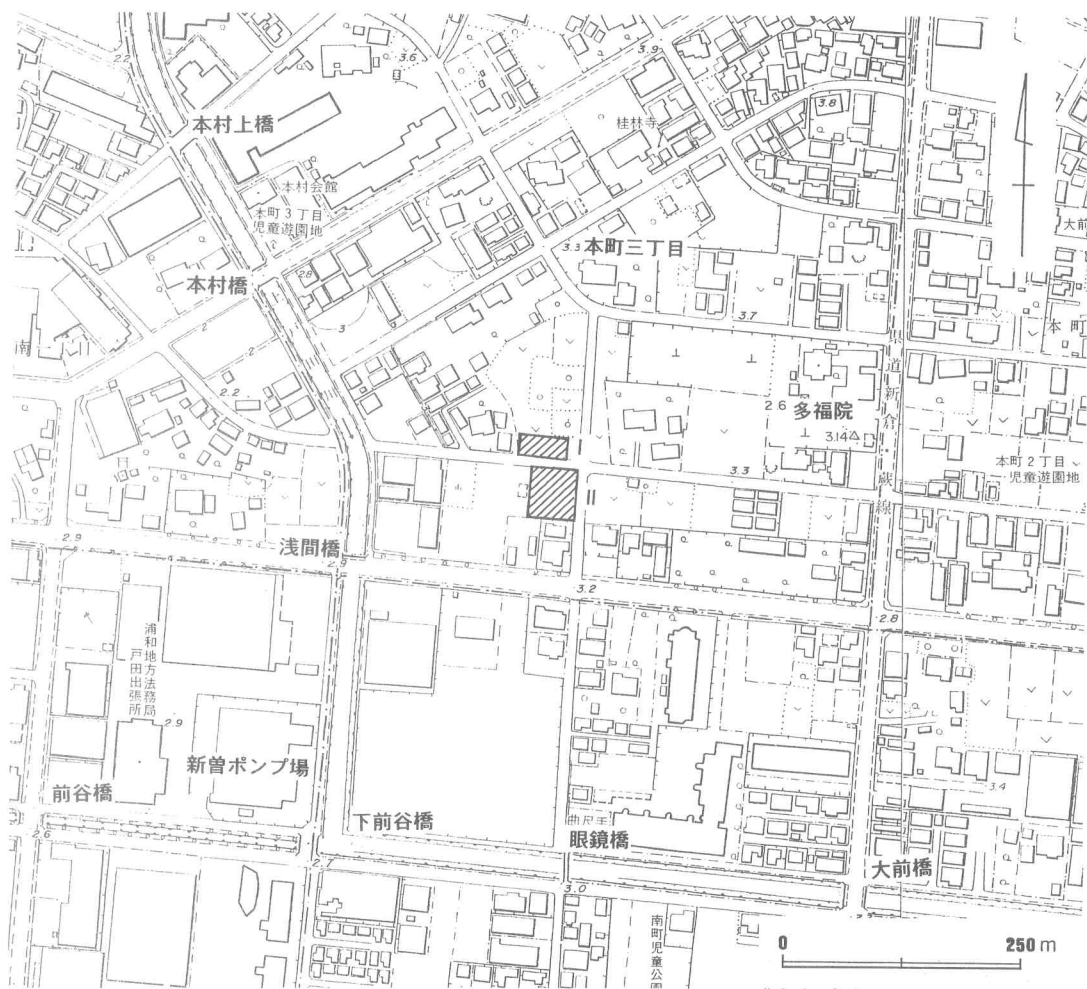


第2図 大正期の上戸田本村遺跡周辺の地形図

4 上戸田本村遺跡の概観

上戸田本村遺跡は、荒川（旧入間川）の溢流によって形成された自然堤防の中ほどで鍛冶谷・新田口遺跡と同じ自然堤防上に立地している。古くから「くまん塚」と称する古墳跡や昭和53年に市史編纂事業による第1次調査が行われ、古墳時代前期や後期の集落跡の存在が明らかになっている。

遺跡の位置するところは現在の戸田市本町にあたるが、もとは上戸田村に属している。江戸時代の末期に編纂された『新編武蔵風土記稿』の上戸田村の項を見ると、「上戸田村ハ郡境荒川ノ岸ニアリ、江戸ヨリノ行程三里、戸田領十一カ村ノ本郷ナリ、古上下戸田及ヒ蕨、塚越ノ四村ヲ合セ戸田村ト唱ヘシト云、サレド正保ノ改ニ載タレバ分村セシハ近世ノ事ニアラス……」と記されている（注1）。戸田領とは上戸田村、下戸田村、新曽村、横曽根村、上青木村、下青木村、里村、西新宿村、前川村、蕨宿、塚越村の十一カ村から成っており、現在の戸田市、蕨市、川口市、鳩ヶ谷市、東京都北区



第3図 上戸田本村遺跡調査地位置図

にわたる範囲とされている。そして、同書の小名に項には上戸田村として「鍛冶屋 新田 本村 前新田 後谷 東村」の地名が載せられている。また、第2図に上げた大正期の地形図にもあるが、当調査地は上戸田村の本村に位置である(注2)。遺跡名称の「上戸田本村」は、この「上戸田」と「本村」を合わせたものである。

古代における上戸田本村遺跡は、「くまん塚」と称する古墳跡や土師器の散布地として知られており、約3,000㎡が遺跡の範囲となる。「くまん塚」からは、横穴式石室の石材の一部と直刀が二振りが残されている。二振りとも平造りの直刀で、茎部を欠失しているため刀身長は計測できない状態であるが、現存の刀身長は二振りとも約60cm前後のものである。また、第1次調査においては住居跡4軒、方形周

溝墓2基、溝状遺構3本、ピット群が検出されている。住居跡は完全な形で検出されたものはないが、古墳時代前期前半(五領II期)ものが2軒、古墳時代後期前半(鬼高I期)の住居跡が2軒である。方形周溝墓は2基とも古墳時代前期前半(五領II期)のものであると報告されている(注3)。今回の第2次調査では、弥生時代後期の溝1本や弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡13軒が検出されている。

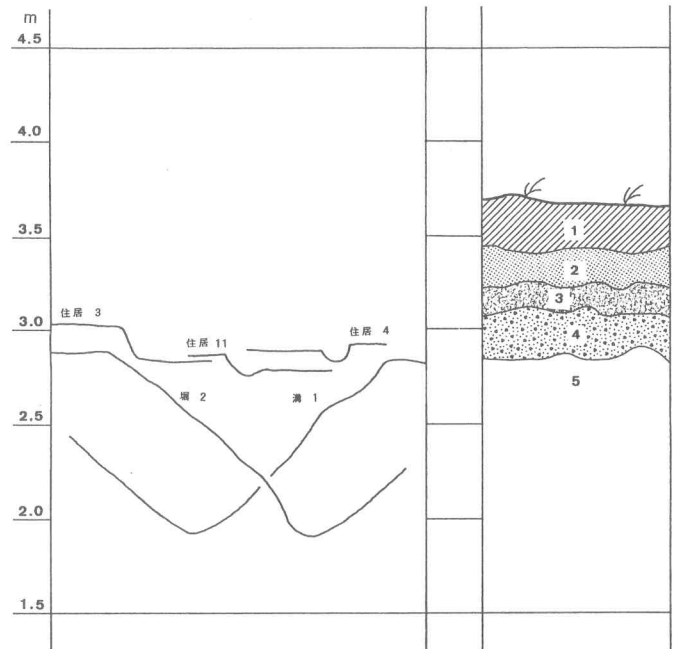
中世においては、第1次調査地から遺構は検出されおらず不明な点が多いが、南側に隣接する南町遺跡の第7号溝や第3号土壙からは、宝篋印塔の相輪や板石塔婆の一部が出土しており、墳墓あるいは寺院跡の所在を漂わしている(注4)。今回の第2次調査地からは中世の陶器を出土する堀跡が検出されており、寺院跡としてすぐに特定できるものではないが、その存在を関連づける成果であるものと考えられる。

注1 『新編武蔵風土記稿』巻之一百四十一 足立郡之七 戸田領

注2 調査地については、現在の地図と照合して推定したもの

注3 『戸田市史 資料編I』戸田市1981

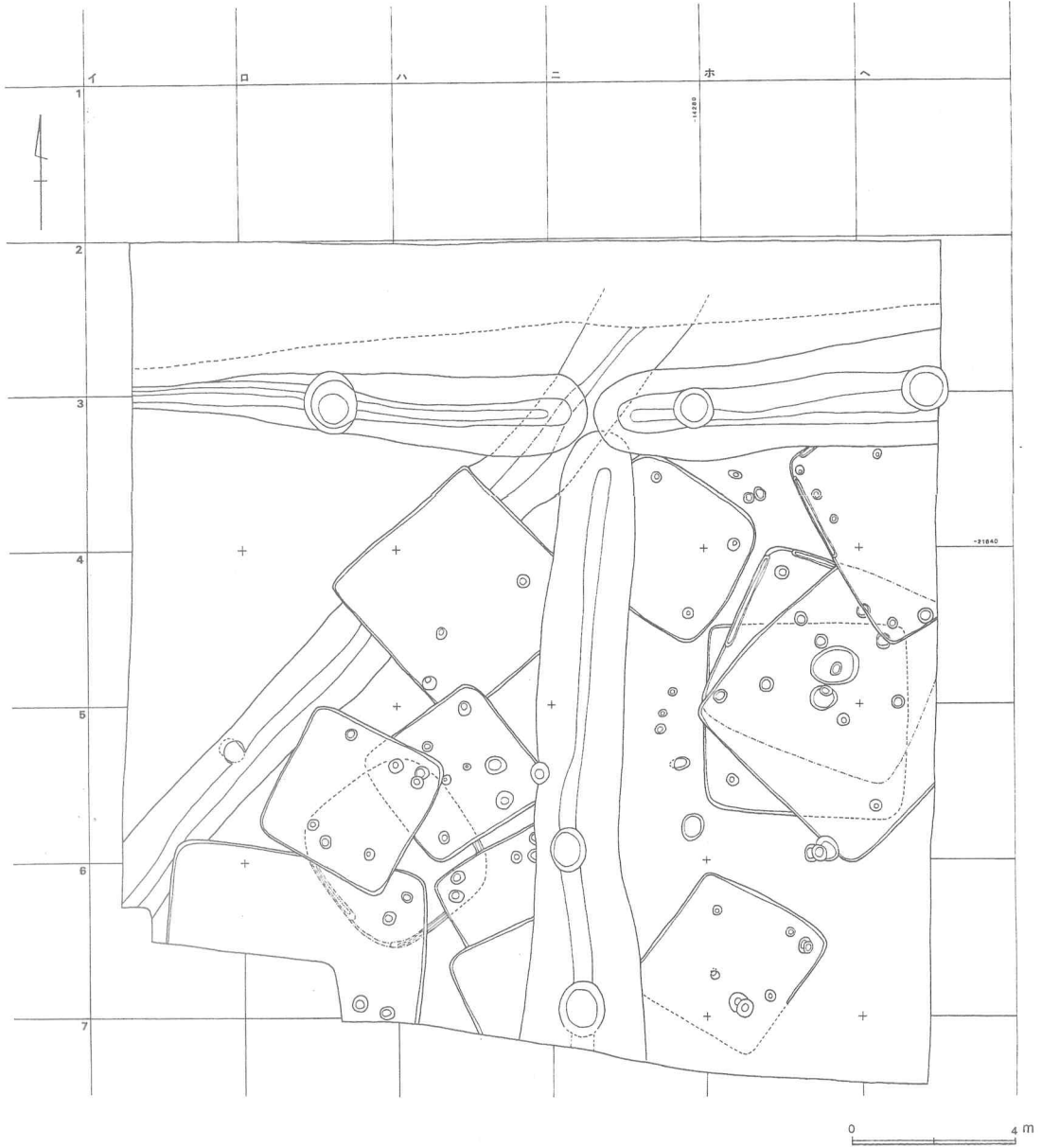
注4 塩野博『南町遺跡I』戸田市遺跡調査会報告書第1集 戸田市遺跡調査会 1987



土層注

1. 盛土 ロームブロック、黒色土、砂等を多量に含む盛土。
粘性、弱。しまり、弱(ぼろぼろ)。
2. 暗褐色土 黄褐色土粒子や黒色土ブロック(φ20~30mm)、白色微粒子を一様に多量含む。
粘性、弱。しまり、弱(さらさら)。
3. 灰褐色土 黒色土ブロック(φ30~50mm)を多量、黄褐色土粒子を一様に多量含む。
粘性、良。しまり、弱(さらさら)。
4. 黒褐色土 黄褐色土ブロックを微量、黄褐色土粒子を多量含む。
粘性、良。しまり、良。
5. 黄褐色土 粘土質土層。基盤の層。粘性、強。しまり、強。

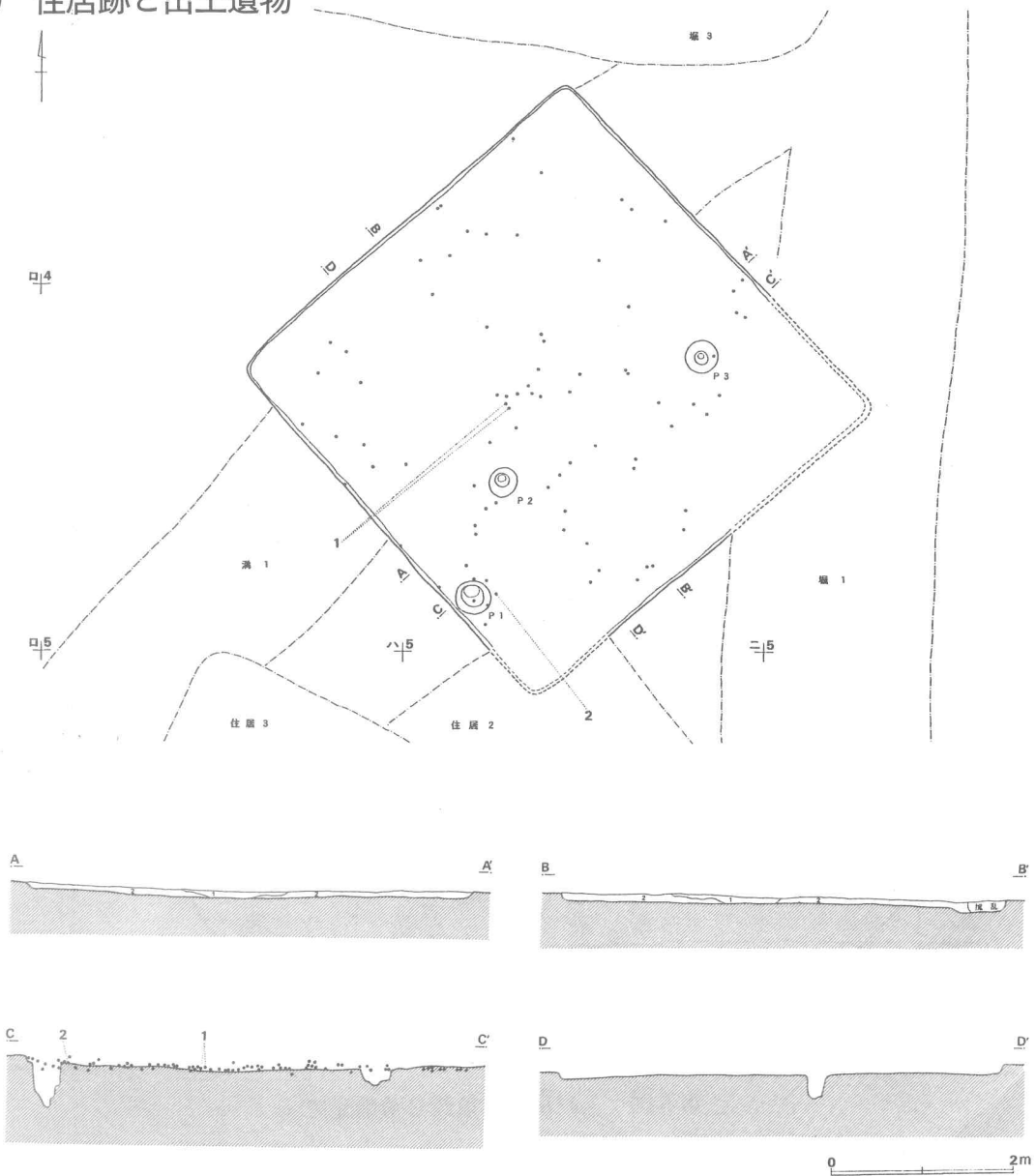
第4図 基本土層図



第5図 上戸田本村遺跡II遺構配置図

5 遺構と出土遺物

(1) 住居跡と出土遺物



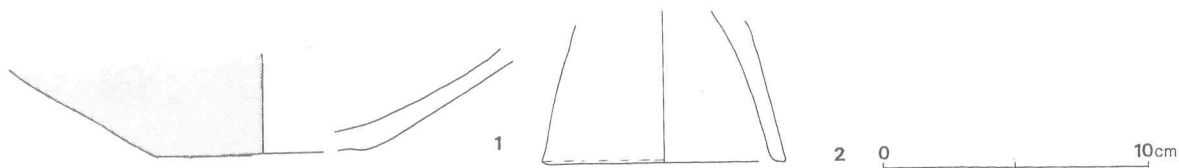
土層註

1. 明褐色土 黄褐色土粒子を微量、炭火物を微量含む。粘性、弱。しまり、良。
2. 暗褐色土 黄褐色土粒子やブロック（ $\phi 10\sim 20\text{mm}$ ）を多量、灰白色粘土粒子を少量含む。
粘性、良。しまり、良。

第6図 第1号住居跡実測図及び遺物出土位置図

第1号住居跡 (第6図)

調査区の西北側ロ～ハー3～4グリッドに位置する。第2号住居跡や第1号溝、第1号堀と切り合い構築されている。第1号堀よりも古く、他の遺構より本跡の方が新しい。規模は、長径4.92m、短径4.84m、面積を約23.81㎡を測り、整った方形プランを呈する。軸偏差は、南北軸がN-45°-Wをとる。床面は、遺構確認面から10.0cmほどの深さで、ほぼ平坦な掘り込みである。炉跡は、検出されていない。ピットは、3箇所、東側から検出している。西側については、第1号溝との切り合いがあり、不明瞭で検出できなかった。P1は、長径38cm、短径36cm、床面からの深さ47cmを測り、ほぼ円形である。P2は、長径34cm、短径28cm、深さ27cmを測り、円形である。P3は、長径36cm、短径34cm、深さ17cmを測り、円形である。なお、いずれのピットにおいても、底面がさらに一段深くなる掘り込みをもっていた。遺物は少なく、総数87点を数えるのみであるが、いずれも小破片であり、図示できたものは第7図の高環形土器 (No.1) と台付甕形土器 (No.2) の2点である。また、あまりにも小破片のため図化できなかったが、S字状結節文を施文する壺形土器も出土している。



第7図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1表 第1号住居跡出土遺物 (第7図)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	高環		接合部から坏部に向けて直線的に大きく開く。内外面ともに摩滅しており調整等不明瞭であるが、外面は縦方向のヘラミガキ調整を、内面は丁寧なナデ調整を施すようである。外面のみ赤彩痕あり。残存、坏部20%。	胎土 H少 E多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
2	台付甕	脚径 (9.4)	接合部から「ハ」の字状に開く脚台部。内外面ともに調整等不明瞭。脚台部としては、比較的薄い造りである。残存、脚台部30%。	胎土 GH少 E多 焼成 やや不良 色調 赤褐色	



第9図 第2号住居跡出土遺物実測図

土層註

1. 暗褐色土 黄褐色土粒子を多量、赤褐色粒子を微量、炭火物を少量含む。
粘性、弱。しまり、良。
2. 暗褐色土 黄褐色土粒子やブロック（φ10~30mm）を多量、炭火物を多量含む。
粘性、良。しまり、良。

第8図 第2号住居跡実測図及び遺物出土位置図

第2表 第2号住居跡出土遺物（第9図）

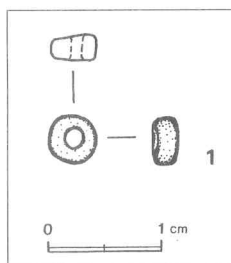
番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	台付甕		接合部のみである。内外面ともに摩滅が著しく調整等不明瞭。外面に辛うじて刷毛目を残す。残存、脚台部のみ90%。	胎土 F H少 E多 焼成 やや不良 色調 赤褐色	

第2号住居跡 (第8図)

調査区の中央ハ－5グリッドに位置する。第1・3・4号住居跡や第1号堀と切り合い構築されている。第1号堀跡や第3号住居跡よりも古く、第1・4号住居跡より本跡の方が新しい。規模は、長径3.73m、短径3.52m、面積を約13.13㎡を測り、隅が僅かに丸くなる隅丸方形プランを呈する。軸偏差は、南北軸がN-35°-Wをとる。床面は、遺構確認面から15.0cmほどの深さで、ほぼ平坦な掘り込みである。炉跡は、焼土が中央よりやや西側に検出されたものの、炉跡としての確かな検出状況ではなかった。ピットは、8箇所各コーナー付近と中央部から検出されている。P1は、直径38cm、床面からの深さ21cmを測り、円形である。P2は、長径28cm、短径26cm、深さ18cmを測り、ほぼ円形である。P3は、長径38cm、短径34cm、深さ12cmを測り、ほぼ円形である。P4は、長径28cm、短径24cm、深さ46cmを測り、楕円形である。P5は、直径20cm、深さ7cmを測り、ほぼ円形で浅い掘り込みである。P6は、長径56cm、短径50cm、深さ64cmを測り、ほぼ円形である。P7は、長径32cm、短径30cm、深さ94cmを測り、円形である。P8は、直径46cm、深さ28cmを測り、円形である。この内、支柱穴と判断できるものは、ピット1・3・7・8の4本とみて良さそうである。遺物は少なく、総数21点を数えるのみであるが、いずれも小破片であり、図示できたものは第9図の台付甕形土器 (No. 1) の1点である。

第3号住居跡 (第11・13図)

調査区の西側ロ－ハ－5～6グリッドに位置する。切り合う遺構が多く、西北側のコーナーでは第1号溝と、中央から東側では、第2・4・5号住居跡と切り合って構築されている。新旧関係は、いずれの溝や住居跡よりも本跡が新しいことが覆土の観察から判断できる。本跡は消失家屋で、覆土は第12図の実測図にもあるように、確認面から床面まで焼土や炭化物で満たされていた。図示したものは、比較的濃密に残っていた範囲を表しており、ほぼ全面から検出されている。なお、家屋の柱の部材となるであろう炭化材は検出されておらず、植物のようなものばかりであった。住居跡の規模は、長径・短径ともに3.8mで、面積を14.44㎡を測り、正方形プランを呈する。軸偏差は、南北軸がN-65°-Wをとる。床面は、遺構確認面から約15～20cmほどで、僅かに中央が深くなる掘り方である。炉跡は検出されていない。ピットは、4カ所各コーナーから僅かに離れて検出されている。P1は、長径36cm、短径32cm、床面からの深さ16cmを測り、ほぼ円形である。P2は、長径40cm、短径38cm、深さ17cmを測り、不整楕円形である。P3は、長径32cm、短径26cm、深さ20cmを測り、ほぼ円形である。P4は、長径34cm、短径26cm、楕円形である。なお、P3においては柱の跡と思われる2段の掘り方が観察された。遺物は、焼土や炭化物に混じって総数173点が出土している。主なものとしては、網目状の撚糸文を施文する壺形土器 (No. 4) や台付甕形土器 (No. 7・8)、高坏形土器 (No. 9) が出土している。

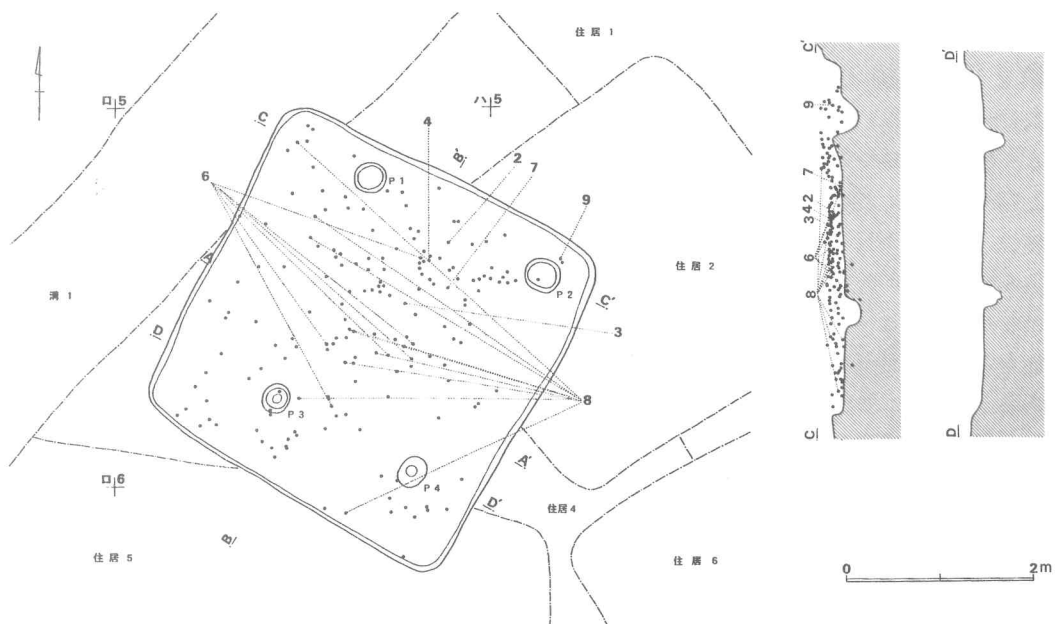


第10図 第3号住居跡出土滑石製小玉

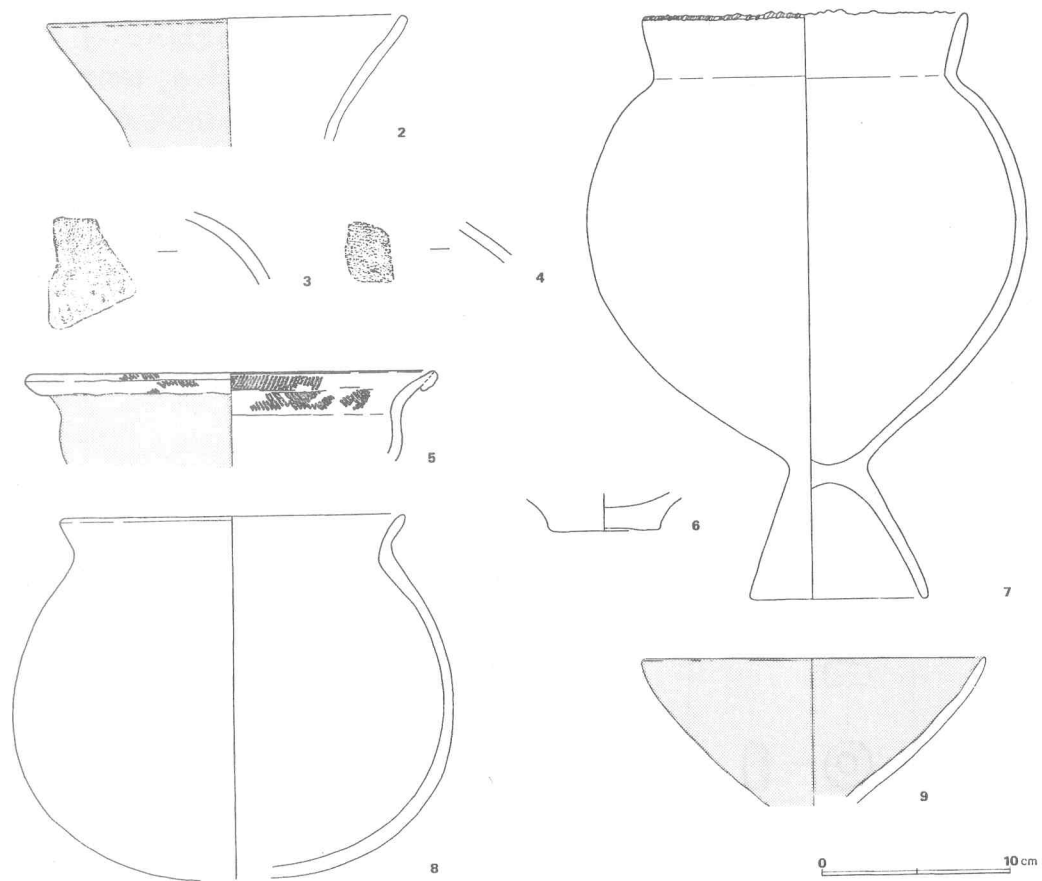
第3表 第3号住居跡滑石製小玉 (第10図)

(単位mm)

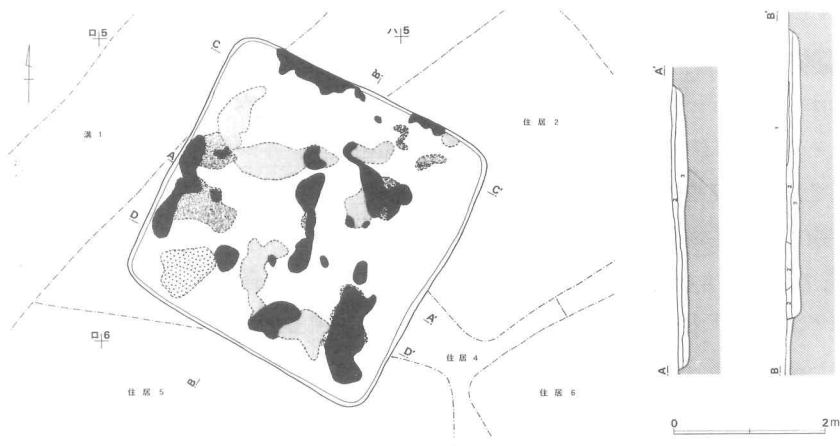
番号	縦×横	厚さ	穿孔	色調	備考
1	4.0×4.5	2.3	2.0	青灰色	



第11図 第3号住居跡遺物出土位置図



第12図 第3号住居跡出土遺物実測図



土層註

1. 明褐色土 黄褐色土粒子を一様に多量含む。粘性、弱。しまり、良。
2. 暗褐色土 黄褐色土粒子を一様に多量、焼土粒子を少量、炭火物を一面に多量含む。
粘性、良。しまり、良。
- 2'. 暗褐色土 第2層に同じであるが、多量の焼土・炭火物の塊。灰褐色粘土ブロックを多量に残す。
粘性、良。しまり、良。
3. 暗褐色土 黄褐色土粒子を一様に多量、焼土・炭火物を一面に多量含む。粘性、良。しまり、良。

第13図 第3号住居跡実測図

第4表 第3号住居跡出土遺物 (第12図)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
2	壺	口径 (19.4)	単純口縁部を呈する口縁部。器表面の剥落が著しく凶化できないが、外面は縦方向の、内面は横方向の刷毛整形後、ナデ調整を加える。内外ともに赤彩。残存、口縁部のみ20%。	胎土 E F H少 焼成 やや不良 色調 淡橙灰褐色	
3	壺		緩やかな曲線を描く肩部破片。上部に縄文を施文する。外面はヘラミガキ調整。内面はナデ調整。外面の文様帯を除き赤彩。残存、肩部5%。	胎土 H微 E F少 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
4	壺		ごく小さな肩部破片。外面には、網目状の捺糸文を施す。内面はナデ調整。	胎土 D微 H少 E多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
5	広口壺	口径 (22.0)	胴部よりも口縁部の方が大きくなる。口縁部は複合口縁を呈す。外面の複合部及び内面の口縁部に縄文を施す。内面の口縁部文様帯を除き、赤彩。残存、口縁部10%。	胎土 E F H少 G多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
6	壺	底径 (5.8)	小さな底部から大きく広がるようである。内外面ともに丁寧なナデ調整。残存、底部30%。	胎土 H少 F G多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
7	台付甕	口径 (17.4) 胴径 (23.8) 脚径 (9.5)	胴上半部に最大径をもつ。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は微妙に内湾する。口縁部には刻み目を施す。内外面ともにナデ調整痕あり。残存、60%。	胎土 F(微)H少 G多 焼成 不良 色調 淡橙褐色	
8	台付甕	口径 (18.4) 胴径 (23.6)	胴部最大径を中位から下半にもつ。頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は微妙に内湾するように短く立ち上がる。内外面ともにナデ調整痕あり。残存、60%。脚台部を欠損する。	胎土 E少 G H多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
9	高 杯	口径 (18.4)	緩やかに内湾するように立ち上がる杯部。口唇部は尖るように整形されている。外面には微妙にヘラミガキ痕が残る。残存、杯部90%。	胎土 F微 E G少 H多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	

第4号住居跡 (第14図)

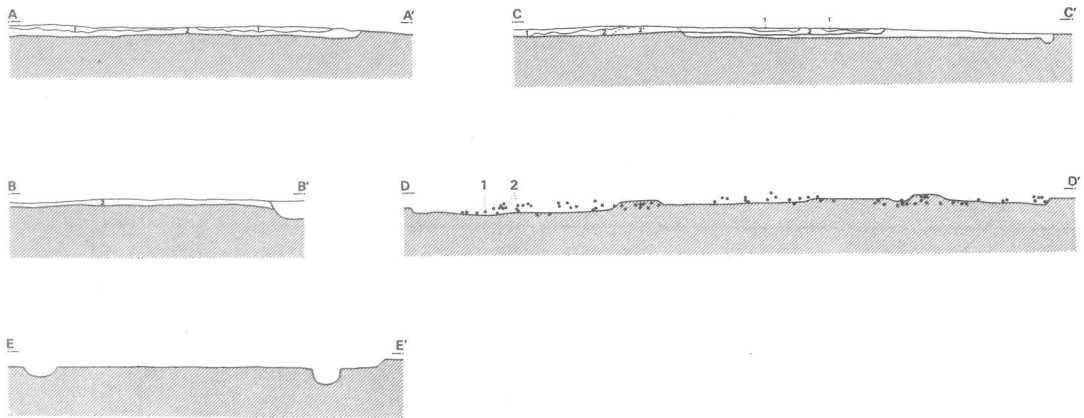
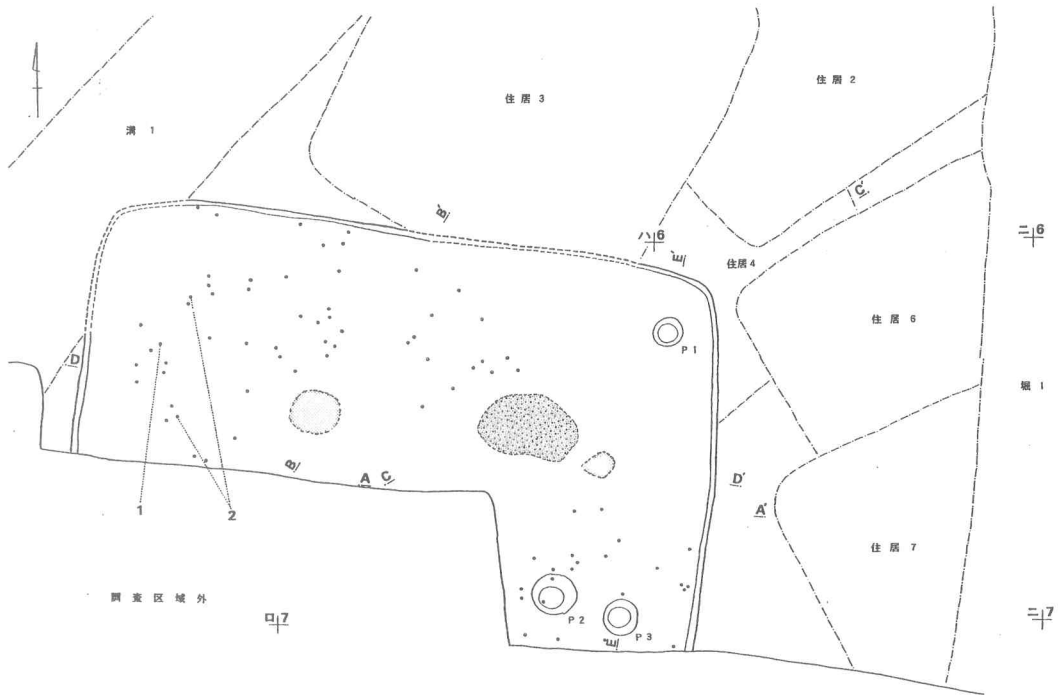
調査区の西側ローハ-5~6グリッドに位置する。本跡は調査区域内で最も遺構が重なる中央部にあり、第2・3・5・6号住居跡と切り合っている。新旧関係は、本跡が最も古く、第5号住居跡の床面下に辛うじて覆土が残されていた状況である。規模は、長径4.1m、短径4.0m、面積16.40㎡を測る。深さは、約15cmほどの掘り込みである。形態は、隅丸方形プランである。軸偏差は、南北軸がN-35°-Wをとる。ピットは、4カ所検出されている。P1は、直径32cm、床面からの深さ28cmを測り、不整形円形である。P2は、直径34cm、深さ32cmを測り、不整形円形である。P3は、長径36cm、短径34cm、深さ18cmを測り、ほぼ円形である。P4は、長径40cm、短径34cm、深さ12cmを測り、楕円形である。なお、P1とP2においては柱の跡と思われる掘り方が観察された。また、床面の残っている壁面においては、南西隅を除いて溝が掘られしっかりとした構築の仕方である。遺物は、総数23点を検出したものの図示し得るものはなかった。



土層註

1. 明褐色土 黄褐色土粒子を少量含む。粘性、良。しまり、良。
2. 暗褐色土 黄褐色土粒子を少量、黒色土粒子を微量、炭火物を少量含む。粘性、良。しまり、良。

第14図 第4号住居跡実測図及び遺物出土位置図



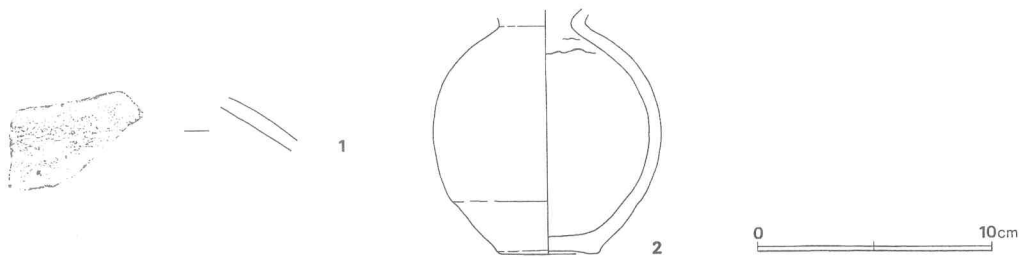
土層註

1. 暗褐色土 黄褐色土粒子を微量、赤褐色土粒子をごく微量含む。粘性、良。しまり、良。
2. 暗褐色土 黄褐色土粒子やブロック（ $\phi 10\sim 30\text{mm}$ ）を多量、炭火物を少量含む。
粘性、良。しまり、良。
- 2'. 暗褐色土 第2層に同じであるが、多量の黄褐色粘土塊。粘性、良。しまり、強（堅緻）。

第15図 第5号住居跡実測図及び遺物出土位置図

第5号住居跡（第15図）

調査区の南西隅イ～ロー6グリッドに位置する。南側が調査区域外となり、北西隅では第1号溝と、北東隅では第3・4号住居跡と切り合っている。新旧関係は、第1号溝や第4号住居跡よりも新しく、第3号跡よりも古い。検出された部分での規模は、長径6.7m、短径4.2m、検出部分の面積推定28.14㎡を測る。深さは、約6～15cmほどの掘り込みである。形態は、南側が調査区域外となるため定かではないが、方形プランと思われる。軸偏差は、南北軸がN-80°-Wをとる。床面は、全体的に平坦であるが、覆土中において、図示した中央やや東側の部分から長径1.0m、短径0.7mの大きさで不整楕円形の広がりをもって黄褐色粘土の塊が遺構確認面より見られた。また、中央やや西側と粘土塊の東側の2カ所に焼土の塊があった。炉跡としての掘り込みはなく不自然な状況である。ピットは、3カ所検出している。P1は、直径30cm、床面からの深さ12cmを測り、ほぼ円形である。P2は、長径48cm、短径44cm、深さ18cmを測り、不整円形である。P3は、直径36cm、深さ9cmを測り、不整円形である。遺物は、住居の大きさに比べて少なく総数は83点で、主なものとしてはS字状結節文が施された壺形土器（No.1）と西側から小型壺形土器（No.2）が出土している。



第16図 第5号住居跡出土遺物実測図

第5表 第5号住居跡出土遺物（第16図）

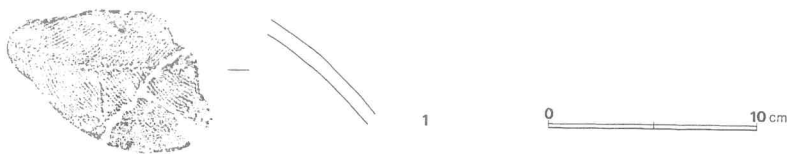
番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺		肩部の破片。縄文を施し、S字状結節文で区画する。外面は、横方向のヘラミガキ調整。内面は木口状工具によるナデ調整。外面を赤彩。残存、肩部のみ5%。	胎土 H少 FG多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
2	小型壺	頸部径 3.9 胴径 9.8 底径 4.4	微妙な上げ底状を呈する底部。胴部は球形となり、頸部で小さく収縮する。口縁部は欠損する。内外面の調整等は摩滅が著しく不明瞭である。内面には、僅かに輪稜を残す。残存、60%。	胎土 AF微 G多 焼成 不良 色調 淡橙褐色	



土層註

1. 明褐色土 黄褐色土粒子を少量、灰白色粘土ブロック（ $\phi 10\sim 30\text{mm}$ ）を多量。
粘性、弱。しまり、良。
2. 暗褐色土 黄褐色土粒子やブロック（ $\phi 10\sim 30\text{mm}$ ）を多量、炭化物を微量含む。
粘性、良。しまり、良。
3. 明褐色土 黄褐色土粒子やブロック（ $\phi 30\text{mm}$ ）を多量、黒色土ブロック（ $\phi 10\sim 30\text{mm}$ ）を多量
含む。粘性、弱。しまり、良。
4. 黒褐色土 黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子をごく微量含む。粘性、良。しまり、良。

第17図 第6・7号住居跡実測図及び遺物出土位置図



第18図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6表 第6号住居跡出土遺物（第18図）

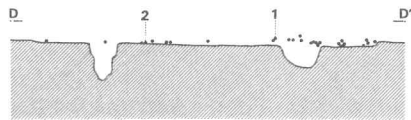
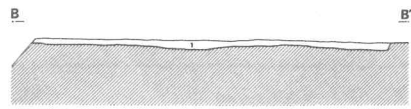
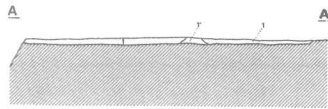
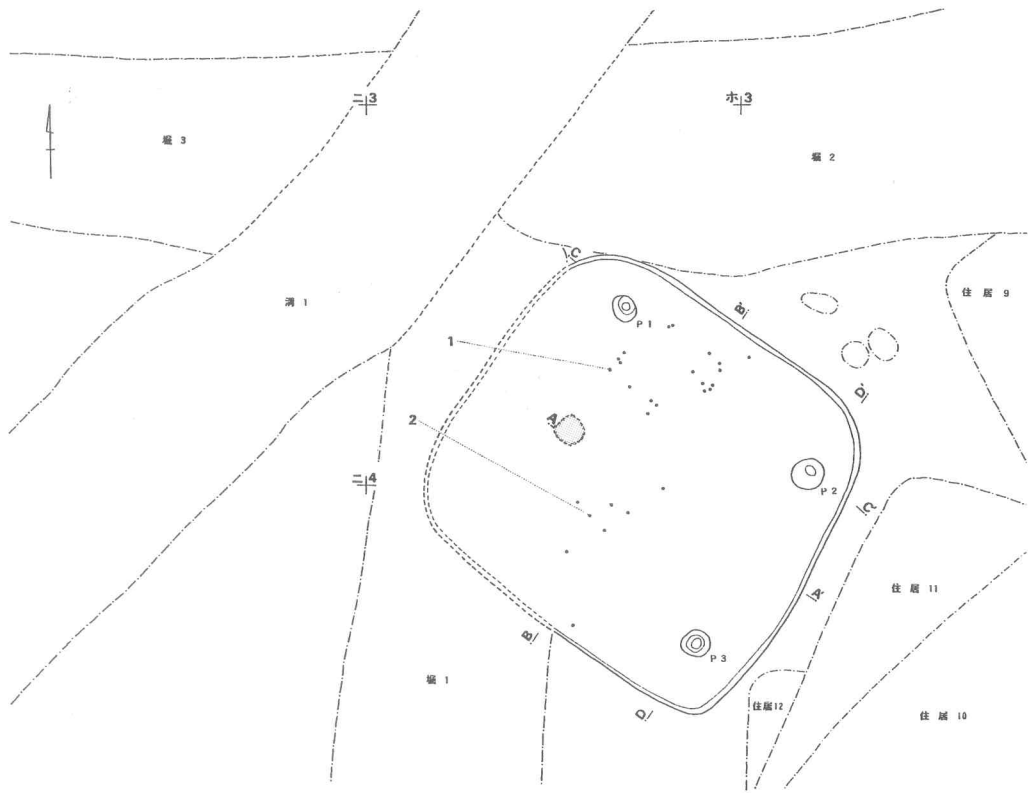
番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺		肩部の破片。縄文を羽状に施し、文様帯の上下をS字状結節文で区画する。外面の調整は不明瞭であるが、内面はナデ調整。外面の文様帯を除き赤彩。残存、肩部のみ5%。	胎土 EG少 F多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	

第6号住居跡 (第17図)

調査区の中央南側ハ-5～6グリッドに位置する。第4・7号住居跡や第1号堀と切り合う。新旧関係は、第4号住居跡よりも新しく、第7号住居跡や第1号堀よりも古い。とくに東側においては、住居範囲の約半分を第1号堀により掘削されている。検出された部分での規模は、長径3.7m、短径1.9mを測る。深さは、14cm～19cmで壁から中央部に向かうにしたがって緩やかに深くなるようである。形態は、残存部分が少なく定かではないが、方形プランになるものと思われる。軸偏差は、南北軸がN-30°-Wをとる。炉跡等の掘り込みはないが、北側部分の覆土第2層中から長径50cm、短径40cmほどの範囲で、焼土の塊が見られた。ピットは、4カ所検出している。P1は、直径40cm、床面からの深さ10cmを測り、不正楕円形である。P2は、長径34cm、短径30cm、深さ7cmを測り、不整円形である。P3は、長径30cm、短径26cm、深さ11cmを測り、不整円形である。P4は、長径40cm、短径30cm、深さ11cmを測り、楕円形である。遺物は少なく、北側の第4号住居跡付近で主に検出されており、総数は42点である。主なものとしてはS字状結節文が施された壺形土器 (No.1) が出土している。

第7号住居跡 (第17図)

調査区の中央南側ハ-6～7グリッドに位置する。北側で第6号住居跡と切り合っており、東側は第1号堀、南側は調査区域外となる。新旧関係は、第6号住居跡よりも本跡の方が新しく、第1号堀よりも古い。この住居跡においても、第6号住居跡と同じような残存状態で、第1号堀により東側はなくなってしまっている。検出された部分での規模は、長径3.8m、短径3.6mを測る。深さは、17cm～26cmで、中央部付近が僅かに高くなるが、ほぼ平坦であった。形態は、残存部分が少なく定かではないが、方形プランになるものと思われる。軸偏差は、南北軸がN-25°-Wをとる。炉跡やピット等の床面における掘り込みは見られなかった。覆土については、壁部分の床面に僅かな第4層の堆積があったが、ほとんどの部分については単一的な土層であった。遺物はごく僅かで、図示し得るものはなかった。総数は16点である。



0 ————— 2m

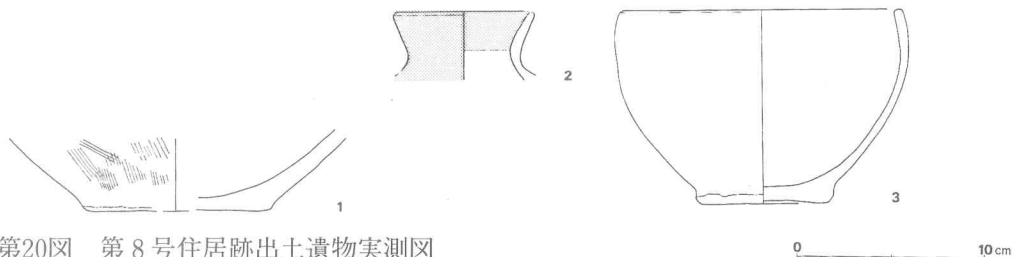
土層註

- 1. 暗褐色土 黄褐色土粒子をまばらに多量、赤褐色粒子を微量含む。粘性、良。しまり、良。
- 1'. 暗褐色土 第1層に同じであるが、多量の黄褐色粘土塊。粘性、良。しまり、良。

第19図 第8号住居跡実測図及び遺物出土位置図

第8号住居跡 (第19図)

調査区の中央やや北側ニ～ホー3～4グリッドに位置する。第1号堀と西側で切り合っているほかは、他の遺構と切り合うことがなく、この調査区域では珍しく単独的な検出状況であった。新旧関係は、本跡の方が古い。規模は、長径4.1m、短径3.8m、面積約15.58㎡を測る。深さは、約5～10cmほどで遺構確認面からは比較的浅い掘り込みである。形態は、隅丸方形プランである。軸偏差は、南北軸がN-55°-Wをとる。ピットは、3カ所検出されている。P1は、直径30cm、床面からの深さ27cmを測り、不整円形である。P2は、長径38cm、深さ36cmを測り、不整円形である。P3は、直径30cm、深さ38cmを測り、ほぼ円形である。なお、いずれのピットにおいても、底部に柱の跡と思われる掘り方が観察された。検出されたピットは3カ所であったが、第1号堀によって掘削された部分にも1カ所推測され、検出できなかったのが残念である。炉跡の掘り込みはないが、床面の中央やや西側から長径32cm、短径30cmの範囲で焼土が検出されている。遺物は少なく、総数26点を検出している。図化できたものは3点であるが、第19図の椀形土器 (No.3) は第1号溝から検出したものと接合できたものである (第35図-39)。



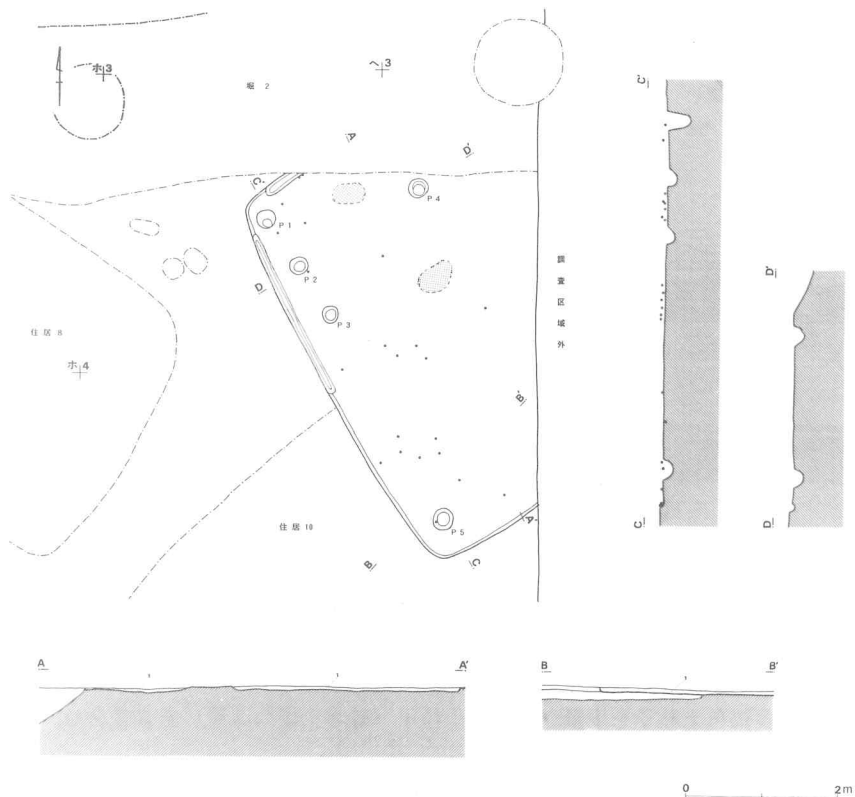
第20図 第8号住居跡出土遺物実測図

第7表 第8号住居跡出土遺物 (第20図)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺		平底の底部の破片。外面はナデ調整を施すが、僅かに刷毛目を残す。内面は、丁寧なナデ調整。残存、底部50%。	胎土 EGH少 焼成 不良 色調 赤褐色	
2	小型壺	口径 (7.4)	単純口縁を呈する。短く直線的に立ち上がる。内外面ともに丁寧なナデ調整を施した後、赤彩。残存、口縁部10%。	胎土 FGH少 焼成 良好 色調 赤褐色	
3	椀	口径 (15.2) 底径 7.2	小さな底部から大きく内湾しながら立ち上がる。口縁端部は平坦面を作り出す。深みのある形態である。外面はナデ調整が施されるが、底部付近には、軟らかい刷毛による整形痕が残る。内面は、丁寧なナデ調整が施される。残存、60%。	胎土 EH少 FG多 焼成 良好 色調 赤褐色	第1号溝と接合

第9号住居跡 (第21図)

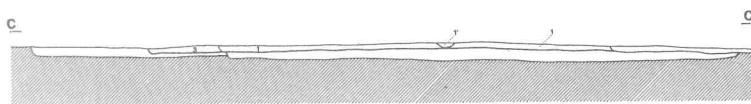
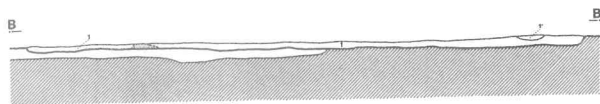
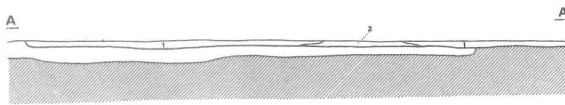
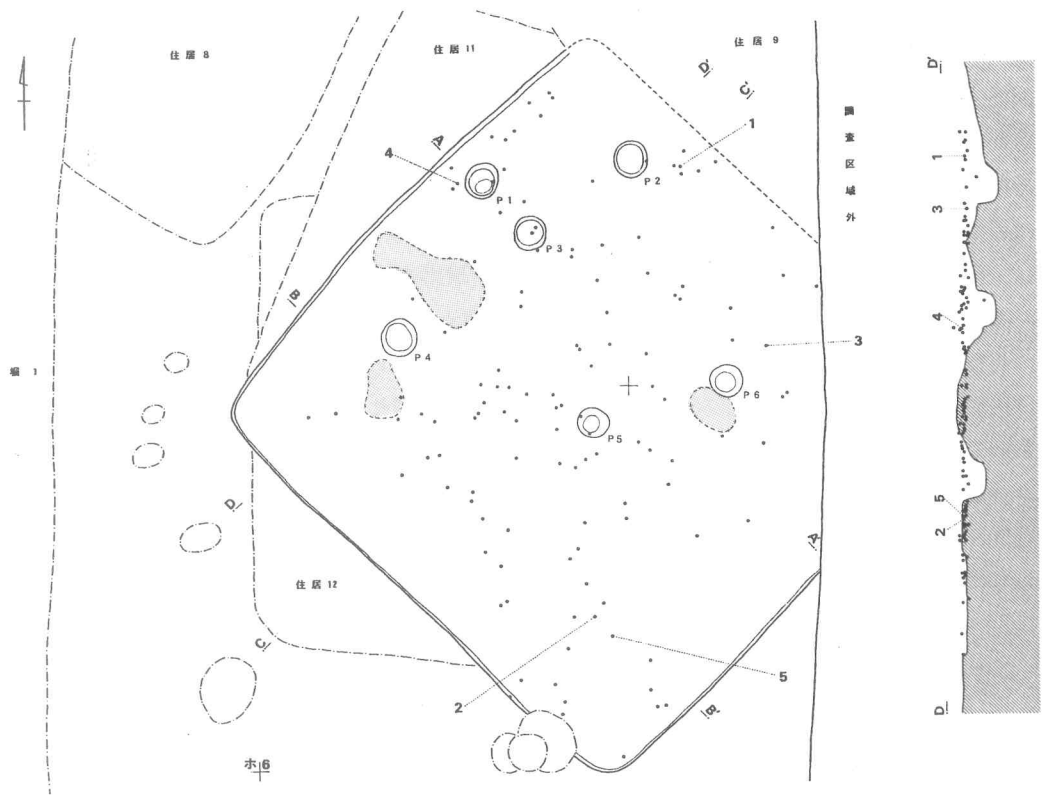
調査区の西北側ホ～へー3～4グリッドに位置する。南側は第10・11号住居跡と、北側は第2号堀と切り合い、東側では調査区域外となってしまう。新旧関係は、第10・11号住居跡よりも新しく、第1号堀よりも古い。検出された部分の規模は、長径5.50m、短径3.84mを測る。深さは、約4～12cmほどで遺構確認面からは比較的浅い掘り込みである。形態は、方形プランとなるようである。軸偏差は、南北軸がN-30°-Wをとる。ピットは、5カ所検出されている。P1は、直径26cm、床面からの深さ34cmを測り、不整形円形である。P2は、直径26cm、深さ13cmを測り、ほぼ円形である。P3は、長径26cm、短径22cm、深さ9cmを測り、ほぼ円形である。P4は、直径26cm、深さ15cmを測り、ほぼ円形である。P5は、長径28cm、短径26cm、深さ18cmを測り、不整形円形である。なお、ピット4においては、底部に柱の跡と思われる掘り方が観察された。北側と西側の一部の壁面においては、北西コーナーを除いて浅い溝が掘られている。炉跡としての掘り込みはないが、床面の中央と北側から長径50cm、短径30cmほどの範囲で焼土が検出されている。遺物は少なく、総数22点を検出しているが、図示し得るものはなかった。



土層註

1. 暗褐色土 黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を微量含む。粘性、良。しまり、良。

第21図 第9号住居跡実測図及び遺物出土位置図



0 2m

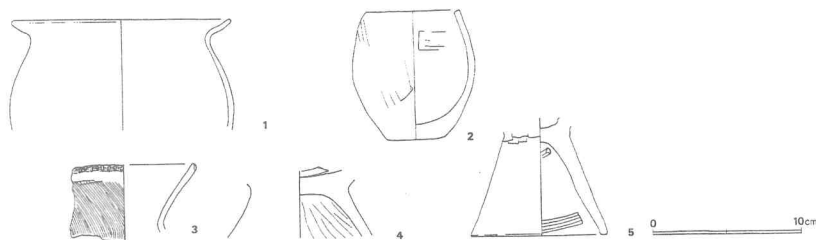
土層註

1. 暗褐色土 黄褐色土粒子を少量、灰褐色土粒子（基本土層の3層）を多量含む。
粘性、良。しまり、良。
- 1'. 暗褐色土 第1層と同じであるが、焼土粒子を多量含む。
2. 暗褐色土 黄褐色土粒子を多量、焼土粒子やブロック（φ100mmを1塊）、炭火物を微量含む
粘性、良。しまり、良。
3. 黒褐色土 黄褐色土粒子を多量、焼土粒子を微量含む。第1層よりも暗い色調。
粘性、強。しまり、良。

第22図 第10号住居跡実測図及び遺物出土位置図

第10号住居跡 (第22図)

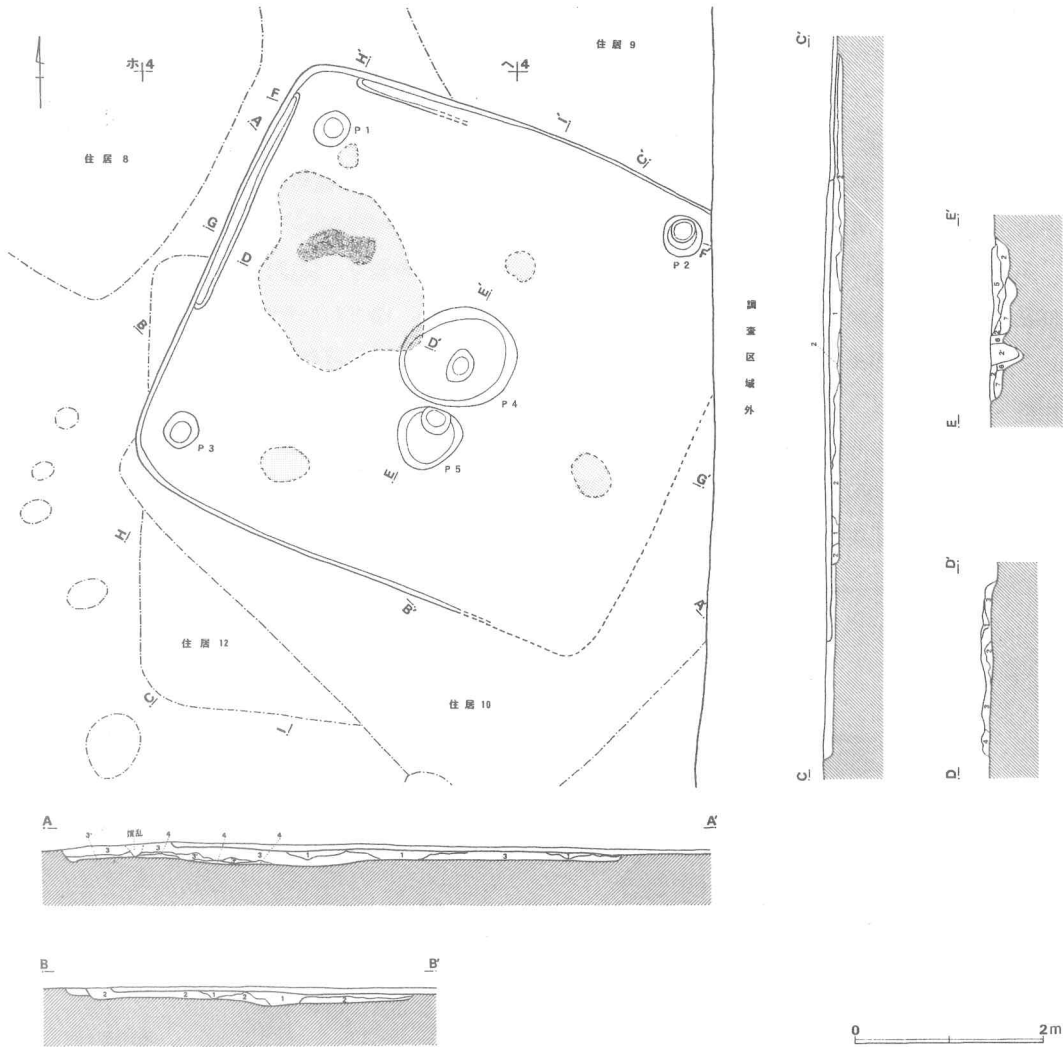
調査区の東側の中央ホーへー4～5グリッドに位置する。北側では第9号住居跡と切り合い、重複するように第11・12号住居跡と切り合う。新旧関係は、第11・12号住居跡よりも新しく、第9号住居跡よりも古い。規模は、長径6.0m、短径5.7mを測る。深さは、約8～10cmほどで、切り合う他の住居跡よりも最も浅い掘り込みである。形態は、方形プランである。軸偏差は、南北軸がN-45°-Wをとる。ピットは、6カ所検出されている。P1は、長径40cm、短径36cm、床面からの深さ18cmを測り、不整円形である。P2は、長径40cm、短径36cm、深さ23cmを測り、ほぼ円形である。P3は、直径36cm、深さ19cmを測り、ほぼ円形である。P4は、直径40cm、深さ11cmを測り、ほぼ不整円形である。P5は、直径36cm、深さ14cmを測り、不整円形である。P6は、直径36cm、深さ24cmを測り、不整円形である。なお、ピット1においては、底部に柱の跡と思われる掘り方が観察された。床面の西側と東側の付近からそれぞれで焼土が検出されている。遺物は住居の範囲から散在するように、総数127点を検出している。主なものとしては、南側コーナー付近から小型壺形土器 (No.2) と台付甕形土器 (No.5) が、北側では台付甕形土器 (No.4) が出土している。



第23図 第10号住居跡出土遺物実測図

第8表 第10号住居跡出土遺物 (第23図)

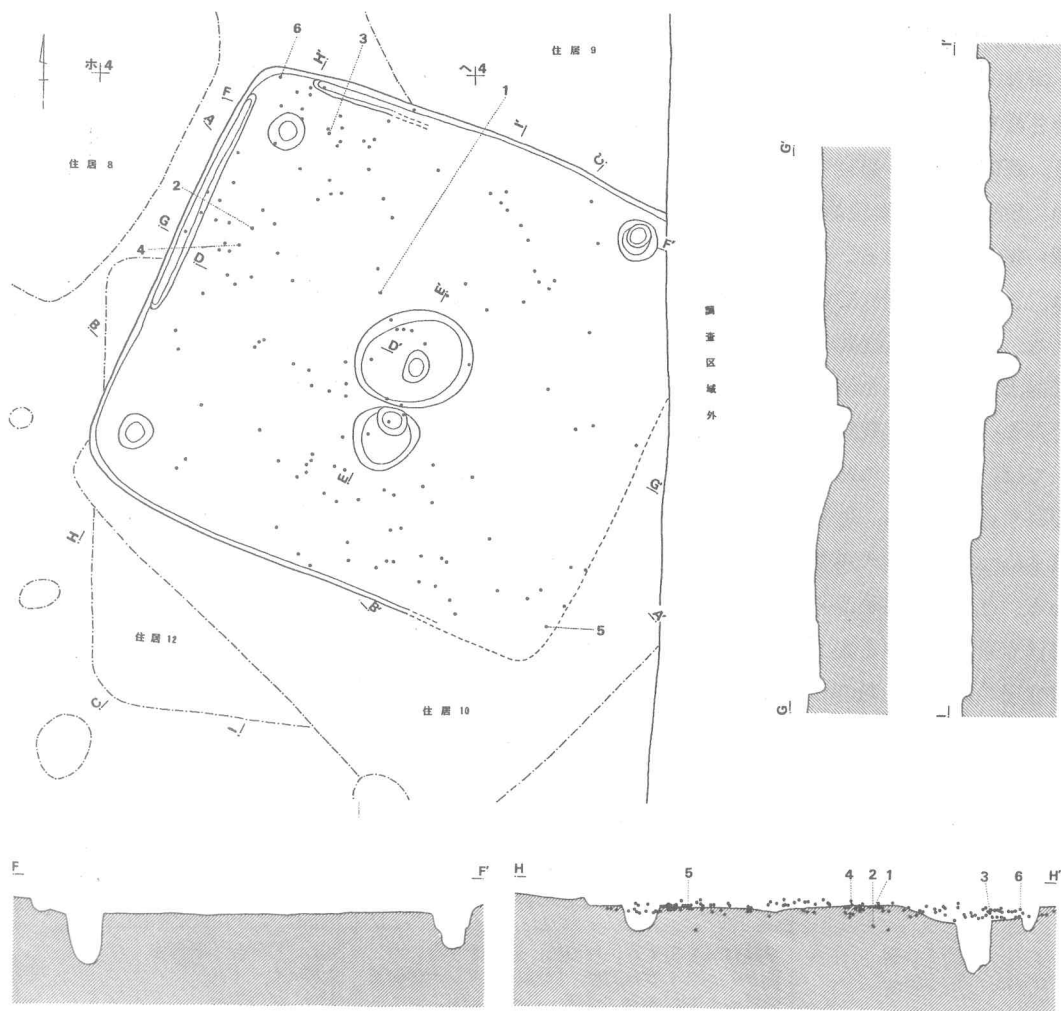
番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	広口壺	口径 (15.0) 胴径 (15.4)	球形の胴部から僅かに収縮し、頸部に向かう。口縁部は短く内湾ぎみに開く。内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。残存、胴上半部20%。残存、胴上半部20%。	胎土 AE微 DH少 F多 焼成 良好 色調 橙褐色	
2	小型壺	口径 6.4 胴径 8.4 底径 (3.8) 器高 8.6	胴部の膨らみは僅かで、コップのような形態である。口縁端部は、内側の向けて平坦に仕上げる。底部は平底となる。外面はナデ調整を施すが、部分的に砂粒の動きが残る。内面は丁寧なヘラナデを施す。残存、70%。	胎土 G少 EF多 焼成 やや不良 色調 淡赤褐色	
3	台付甕	口径 (37.6)	「く」の字状に屈曲する頸部。口縁部は直線的に開く。口唇端部の外面には、刺突による刻み目か加えられる。外面は刷毛整形を施し、上部にナデ調整を加える。内面は刷毛整形後、ナデ調整。残存、口縁部5%。	胎土 EFH少 G多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
4	台付甕		接合部の破片。外面は丁寧なナデ調整。内面は木口状工具によるナデ調整を施す。大型の脚台部となるようである。	胎土 GH少 F多 焼成 良好 色調 赤橙褐色	
5	台付甕	脚径 9.4	接合部から端部に向けて、直線的に開く。外面の接合部には木口状工具による整形痕が残り、他は丁寧なナデ調整。内面は端部に太めの刷毛整形痕が残るが、後ナデ調整を加える。残存、脚台部のみ90%。	胎土 H少 EGF多 焼成 良好 色調 橙褐色	



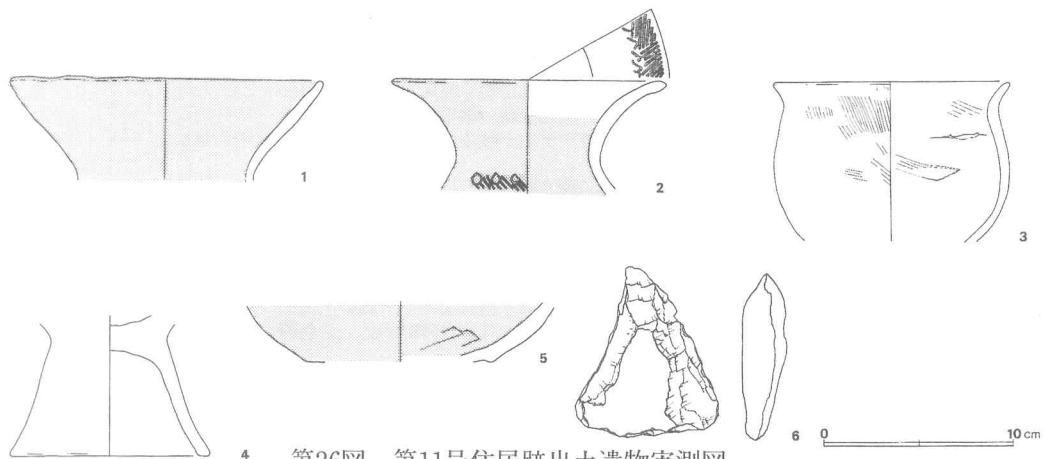
土層註

1. 暗褐色土 黄褐色土粒子を少量、焼土粒子を一様に微量、炭火物をまばらに含む。
粘性、良。しまり、良。
2. 暗褐色土 黄褐色土粒子を多量含む。粘性、良。しまり、良。
- 2' 暗褐色土 第2層と同じであるが、黄褐色土粒子は第2層よりも少ない。粘性、良。しまり、良。
3. 暗褐色土 焼土や焼土粒子を多量に含む。炭火物をまばらに含む。
粘性、弱（ガリガリ）。しまり、良。
- 3' 暗褐色土 第3層と同じであるが、炭火物を含む。粘性、良。しまり、良。
4. 黄褐色土 黄褐色土をブロック状に多量含む。第3層と同じようであるが、火を受けていない
ような状態である。粘土、強。閉まり、強。
5. 黒褐色土 黄褐色土粒子を少量、焼土粒子を多量、炭火物を少量含む。粘性、良。しまり、弱。
6. 暗褐色土 黄褐色土ブロック（ $\phi 30\sim 50\text{mm}$ ）を多量含む。粘性、良。しまり、強。
7. 暗褐色土 黄褐色土粒子を一様に多量、黄褐色土ブロック（ $\phi 30\text{mm}$ ）を少量含む。
粘性、良。しまり、強。

第24図 第11号住居跡実測図



第25图 第11号住居跡遺物出土位置图



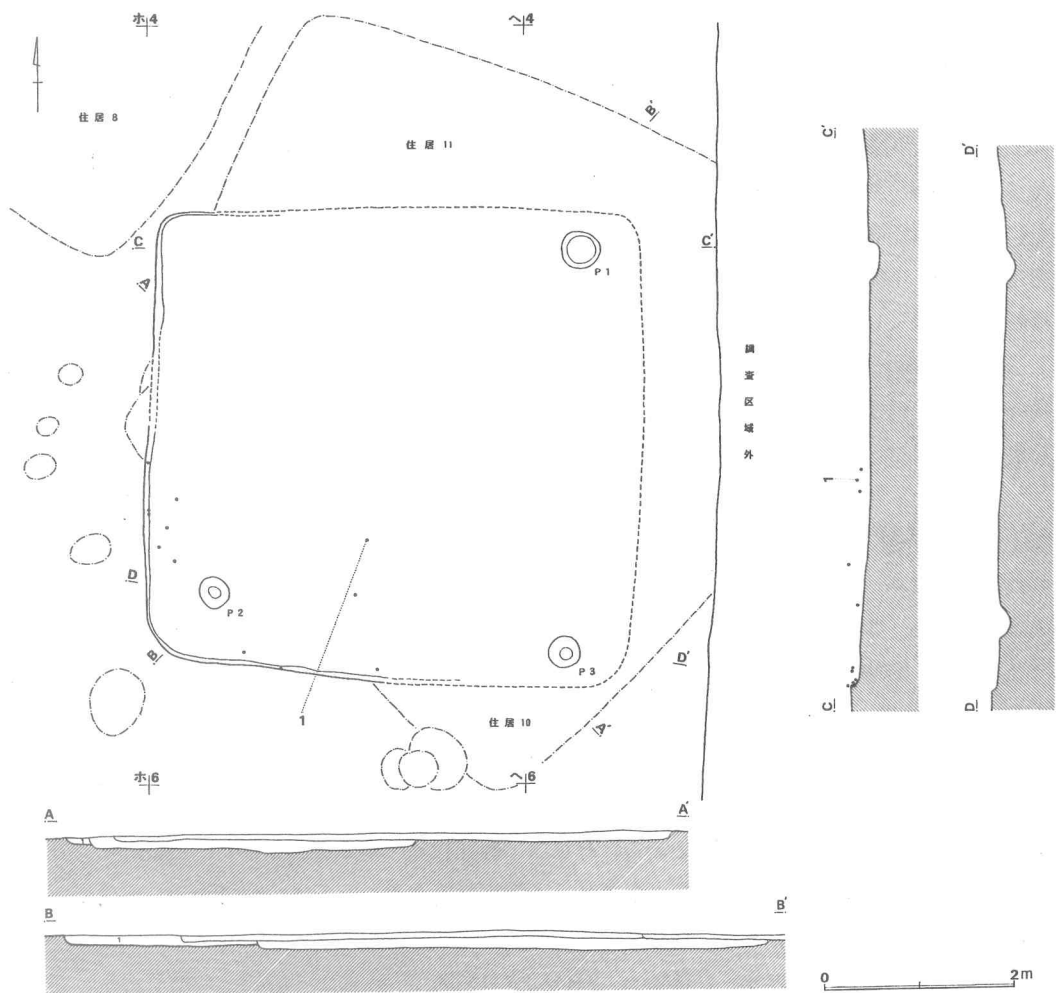
第26图 第11号住居跡出土遺物实测图

第11号住居跡 (第25図)

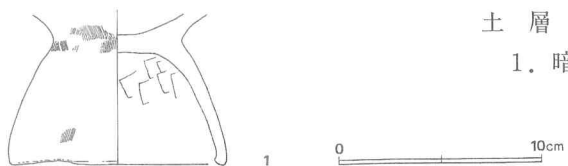
調査区の東側の中央ホーヘー4～5グリッドに位置する。第10・12号住居跡と傾きを僅かに変え構築されている。北側では第9号住居跡と切り合い、重複するように第10・12号住居跡と切り合っている。新旧関係は、第12号住居跡よりも新しく、第9・10号住居跡よりも古い。規模は、長径推定5.3m、短径5.1m、面積約27.03㎡を測る。深さは、約17～20cmほどで、切り合う他の住居跡よりも最も深い掘り込みである。形態は、方形プランである。軸偏差は、南北軸がN-70°-Wをとる。ピットは、5カ所検出されている。P1は、長径42cm、短径40cm、床面からの深さ52cmを測り、不整形円形である。P2は、長径46cm、短径41cm、深さ26cmを測り、ほぼ不整形円形である。P3は、長径40cm、短径34cm、深さ25cmを測り、不整形円形である。P4は、長径72cm、短径60cm、深さ10cmを測り、円形である。P5は、長径1m30cm、短径1m07cm、深さ13cmを測り、円形である。なお、ピット2においては、底部に柱の跡と思われる掘り方が観察された。また、P4とP5はピットと呼ぶのより大きな掘り込みである。北側と西側の壁面においては、床面からの深さ約23cmほどの溝が掘られている。覆土について床面の西側とその付近からそれぞれで焼土や炭化物、黄色褐色粘土が多量に検出されている。とくに、中央から西側の部分においては直径2mの範囲で大きく広がっており、覆土の第3層はガリガリとする焼土であった。ただし、覆土に焼土は若干含まれている程度のものである。遺物は住居の範囲から散在するように、総数154点を検出している。主なものとしては、西側の壁付近から壺形土器 (No.2) と台付甕形土器 (No.4) が出土している。

第9表 第11号住居跡出土遺物 (第26図)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺	口径 (16.6)	単純口縁を呈する。外面は、凶化できないが、細かいヘラミガキ調整。内面は丁寧なナデ調整。内外面ともに赤彩。残存、口縁部10%。	胎土 EH少 FG多 焼成 やや不良 色調 暗灰褐色	
2	壺	口径 14.8	単純口縁を呈する。口縁部は大きく外反する。外面頸部にボタン状に粘土を貼り付ける。調整等は不明瞭。内面の口縁部には縄文とS字状結節文を施文。内外面ともに赤彩。口縁部のみ完存。	胎土 H少 FG多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
3	椀	口径 (12.6)	胴部の張りは弱く。口縁部は短く外反する。器表面の調整は粗く、外面は粗い刷毛整形。内面僅かに刷毛目とヘラナデ痕が残る。残存、30%。	胎土 EGH少 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
4	台付甕	脚径 10.8	接合部から直線的に開く脚台部。内外面ともに摩滅が著しく調整等不明瞭。残存、脚台部90%。	胎土 GH多 焼成 やや不良 色調 橙褐色	
5	高 杯		接合部下半に段を持部。外面はヘラミガキ調整。内面は、ナデ調整。木口状工具によるナデ調整痕を残す。内外面ともに赤彩。残存、杯部10%。	胎土 H微 F少 E多 焼成 良好 色調 橙褐色	
6	石器	長さ 9.0 幅 7.7 厚さ 2.4 重さ 150g	バチ形を呈する。打製石斧カ。下端に敲打痕と思われる摩滅した部分がある。完存。	色調 暗灰褐色	



第27図 第12号住居跡実測図及び遺物出土位置図



土層註

1. 暗褐色土 黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を微量含む。粘性、良。しまり、良。

第28図 第12号住居跡出土遺物実測図

第10表 第12号住居跡出土遺物 (第28図)

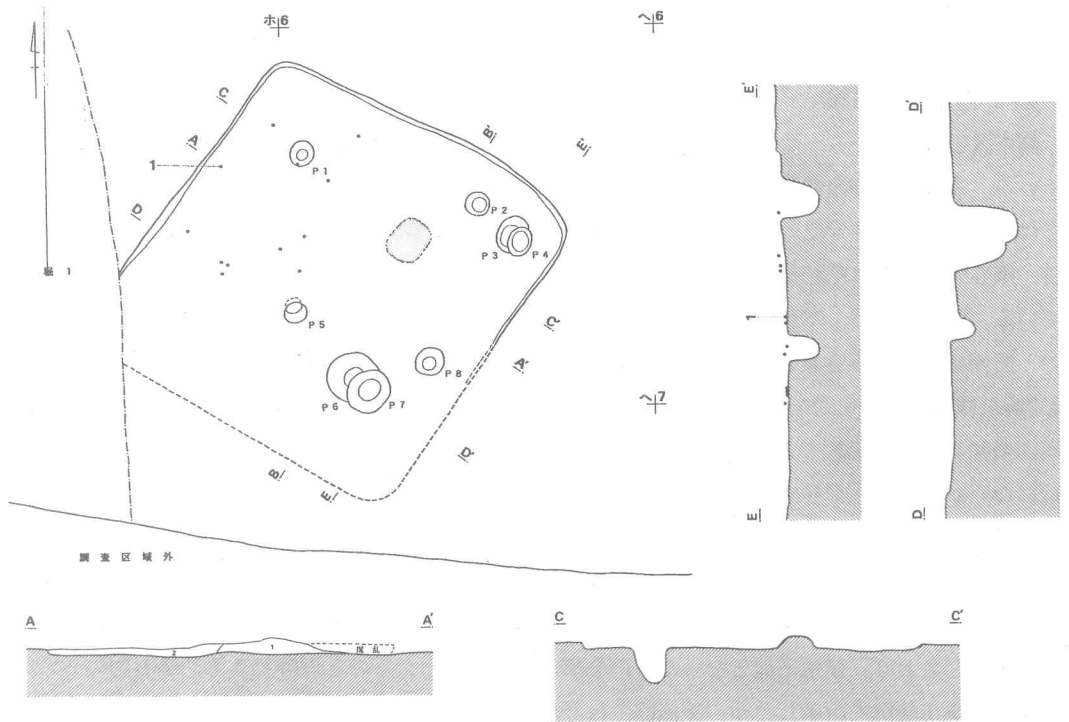
番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	台付甕	脚径 (10.8)	接合部から微妙に内湾しながら開く。外面の接合部に刷毛目を残す。後、丁寧なナデ調整。内面は木口状工具によるナデ調整。後ナデ調整。	胎土 D微 H少 EF多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	

第12号住居跡 (第27図)

調査区の東側の中央ホーヘー4～5グリッドに位置する。大部分が重なるように第11・12号住居跡と切り合う。新旧関係は、本跡が最も古い。規模は、長径推定5.2m、短径4.8m、推定面積24.96㎡を測る。深さは、約6～12cmほどで、切り合うの最も深い住居跡である第11号住居跡よりも浅く重複部分においては、覆土が残されていないような状況である。形態は、残された部分やピットの配置から想定すると、方形プランとなるようである。軸偏差は、南北軸がN-85°-Wをとる。ピットは、3カ所検出されている。P1は、長径44cm、短径40cm、床面からの深さ11cmを測り、ほぼ円形である。P2は、長径36cm、短径30cm、深さ10cmを測り、不整形円形である。P3は、長径34cm、短径32cm、深さ10cmを測り、ほぼ円形である。遺物は、覆土が残されている部分が少なく総数12点の検出である。主なものとしては、中央部付近から台付甕形土器 (No.1) が出土している。

第13号住居跡 (第29図)

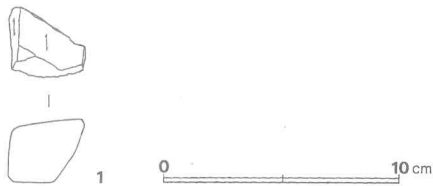
調査区の南東ニ〜ホー6～7グリッドに位置する。南西隅で第1号堀と切り合う。新旧関係は、本跡のほうが古い。規模は、長径推定3.8m、短径3.7m、推定面積14.06㎡を測る。深さは、約7～10cmほどである。形態は、南側の壁が推定部分となるが方形プランのようである。軸偏差は、南北軸がN-60°-Wをとる。ピットは、7カ所検出されている。P1は、長径26cm、短径24cm、床面からの深さ35cmを測り、ほぼ円形である。P2は、長径26cm、短径24cm、深さ25cmを測り、ほぼ円形である。P3は、長径44cm、短径36cm、深さ30cmを測り、不整形楕円形である。P4は、長径34cm、短径26cm、床面からの深さ36cmを測り、楕円形である。P5は、直径22cm、深さ26cmを測り、不整形円形である。P6は、長径60cm、短径54cm、深さ55cmを測り、不整形円形である。P7は、長径50cm、短径42cm、深さ67cmを測り、不整形楕円形である。P9は、直径30cm、深さ35cmを測り、円形である。炉跡は、中央やや北よりから検出されており、長径50cm、短径42cmの範囲で、床面から約12cmの掘り込みをもってガリガリとした焼土が残されていた。遺物は、ごく少なく総数12点を検出した。主なものとしては砥石 (No.1) 1点を図化できただけで、土器については小破片ばかりで図示し得るものはなかった。



土層註

- 1. 暗褐色土 黄褐色土粒子を多量、赤褐色粒子を少量含む。粘性、弱。しまり、良。
- 1'. 暗褐色土 第1層に同じであるが、焼土の塊。粘性やしまりは、ガリガリ、ぼろぼろとしている。
- 2. 明褐色土 黄褐色土粒子を一様に多量、赤褐色粒子をごく微量含む。粘性、強。しまり、良。

第29図 第13号住居跡実測図及び遺物出土位置図



第30図 第13号住居跡出土遺物実測図

第11表 第13号住居跡出土遺物 (第30図)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	砥石	幅 3.2 厚さ 2.5 重さ 30g	砥石の一部。4面を研ぎ面とする。	石質 凝灰岩 色調 黄灰褐色	

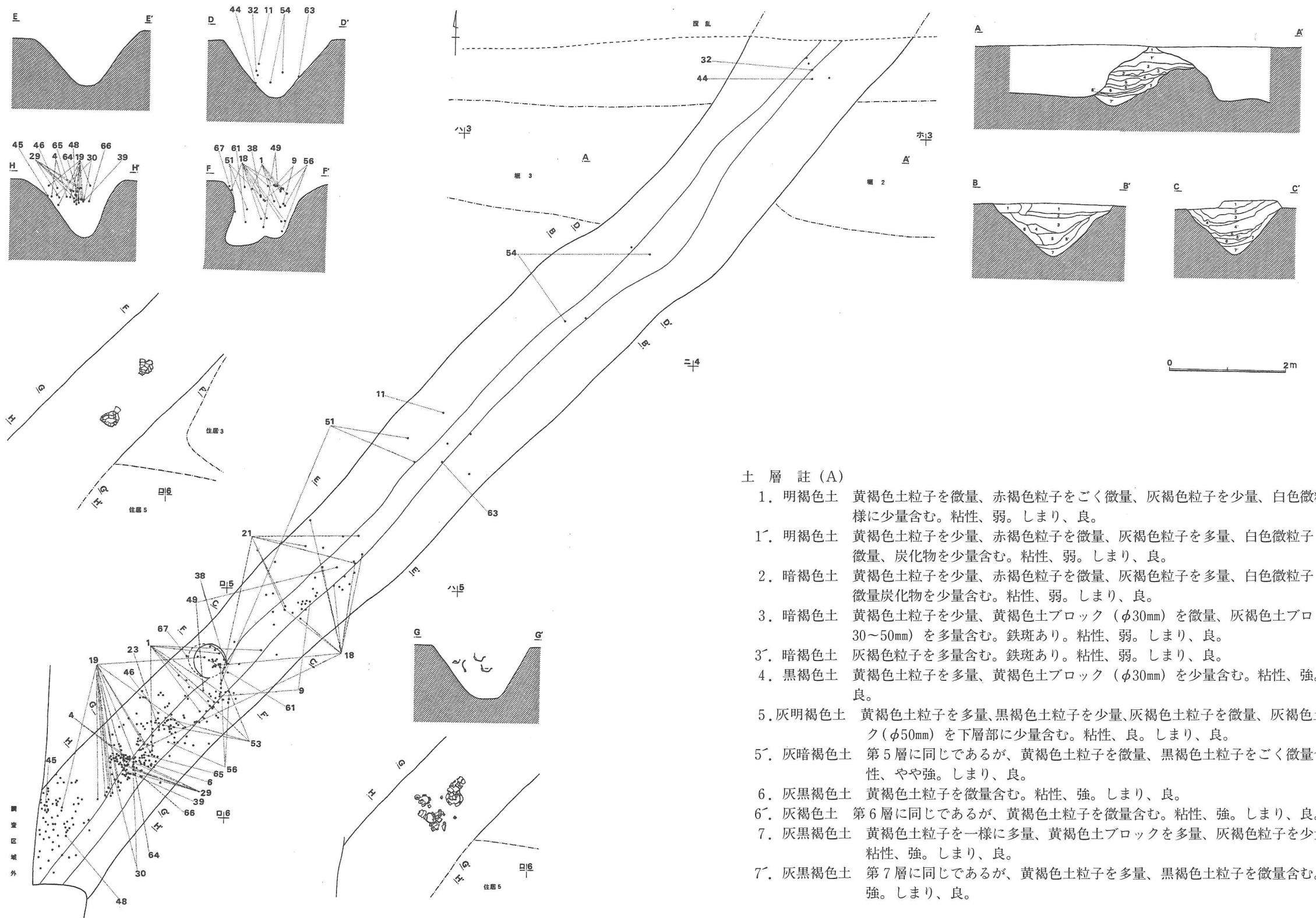
(2) 溝と出土遺物

第1号溝 (第31図)

調査区の西側イ～ニ-2～6グリッドに位置する。北側中央から南西隅に向けて直線的に構築されている。北側・南側の両端は、調査区域外に延びており、一部分を検出したような状況である。北側では、第1・2・3号堀の交わるところで各堀と切り合い、南西に向けて第1号住居跡、第3号住居跡、第5号住居跡とそれぞれ切り合っている。また、堀の北側においては、前建築物の攪乱で壊されている。新旧関係は、本跡が最も古く、各遺構断面の下に覆土が残されていた。形態は、ほぼ直線的で、断面はやや丸みを帯びるV字形を呈する。検出された部分の長さは約20.0m、上面の幅は1.6～2.2m、底面の幅は0.2m～0.4m、深さは88～100cmを測る。北側の方が僅かに広がるようであり、底面の傾斜は約12cm程である。軸偏差は、南北軸がS-45°-Wをとる。この遺構に関連した遺構は特にないが、ロー5グリッドの杭の南側においてピットが1カ所検出されている。ピットの直径は約60cm、深さ101cmを測る。遺物は、ロー5グリッドから南側に向かって集中的に、多量に出土している。遺物のほとんどが一括的に投棄されたものであることが窺われる。ただし、完全な形のまま出土したものはなく、いずれにおいても破片で、口縁部だけ、あるいは脚台部だけというように壊れた状態で出土しており、使用不能となったものを溝の中に投棄したものと理解できる。第31図において主な土器の出土状況を図示したが、平面図ではどれも離れたものが接合されており、断面図では第3層から第5層の中間の層において遺物が多く集中して出土している。検出された遺物については、ごく小破片を除いて出土地点を記録して取り上げを行っているが、総数にして356点を数えるものであった。主な遺物は、壺形土器 (No.1・4・18・19・21)、台付甕形土器 (No.49・51・53・54・56) などである。なお、椀形土器 (No.39) は、第8号住居跡に掲載のNo.3と同一遺物で出土品の整理中に接合できたものである。第1号溝からは体部が、第8号住居跡からは底部が出土している。

土層註 (B・C)

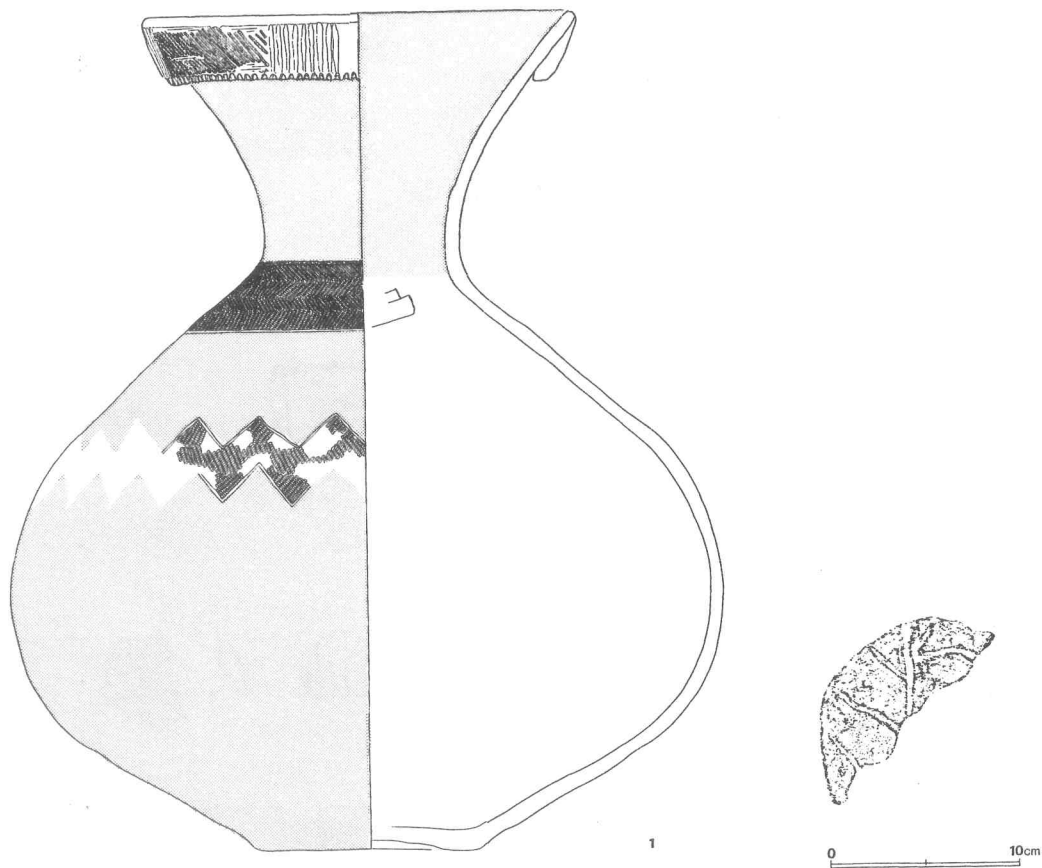
1. 暗褐色土 黄褐色土粒子を少量、粘性、良。しまり、良。
2. 暗褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色粘土ブロック ($\phi 10\sim 30\text{mm}$) を少量、焼土粒子を微量含む。粘性、良。しまり、良。
3. 明褐色土 黄褐色土粒子を多量、炭火物を少量含む。粘性、良。しまり、良。
4. 黒褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック ($\phi 30\text{mm}$) を少量含む。粘性、強。しまり、良。
- 4'. 黒褐色土 黄褐色土粒子や黄褐色粘土ブロック ($\phi 30\sim 50\text{mm}$) を多量、黒褐色土粒子を多量、焼土粒子を微量含む。粘性、強。しまり、良。
5. 黒褐色土 黄褐色土粒子や黄褐色粘土ブロック ($\phi 30\text{mm}$) を多量含む。粘性、強。しまり、良。
- 5'. 黒褐色土 第5層に同じであるが、黄褐色土ブロックが細かく ($\phi 5\sim 10\text{mm}$) を多量含む。粘性、強。しまり、良。
6. 暗褐色土 黄褐色土粒子を一様に多量含む。粘性、良。しまり、良。
7. 黒褐色土 黄褐色土粒子やブロック ($\phi 10\sim 50\text{mm}$) を多量含む。粘性、強。しまり、良。
- 7'. 黒褐色土 第7層に同じであるが、黄褐色土粒子が少なくなる。粘性、強。しまり、良。



第31図 第1号溝実測図及び遺物出土位置図

土層註(A)

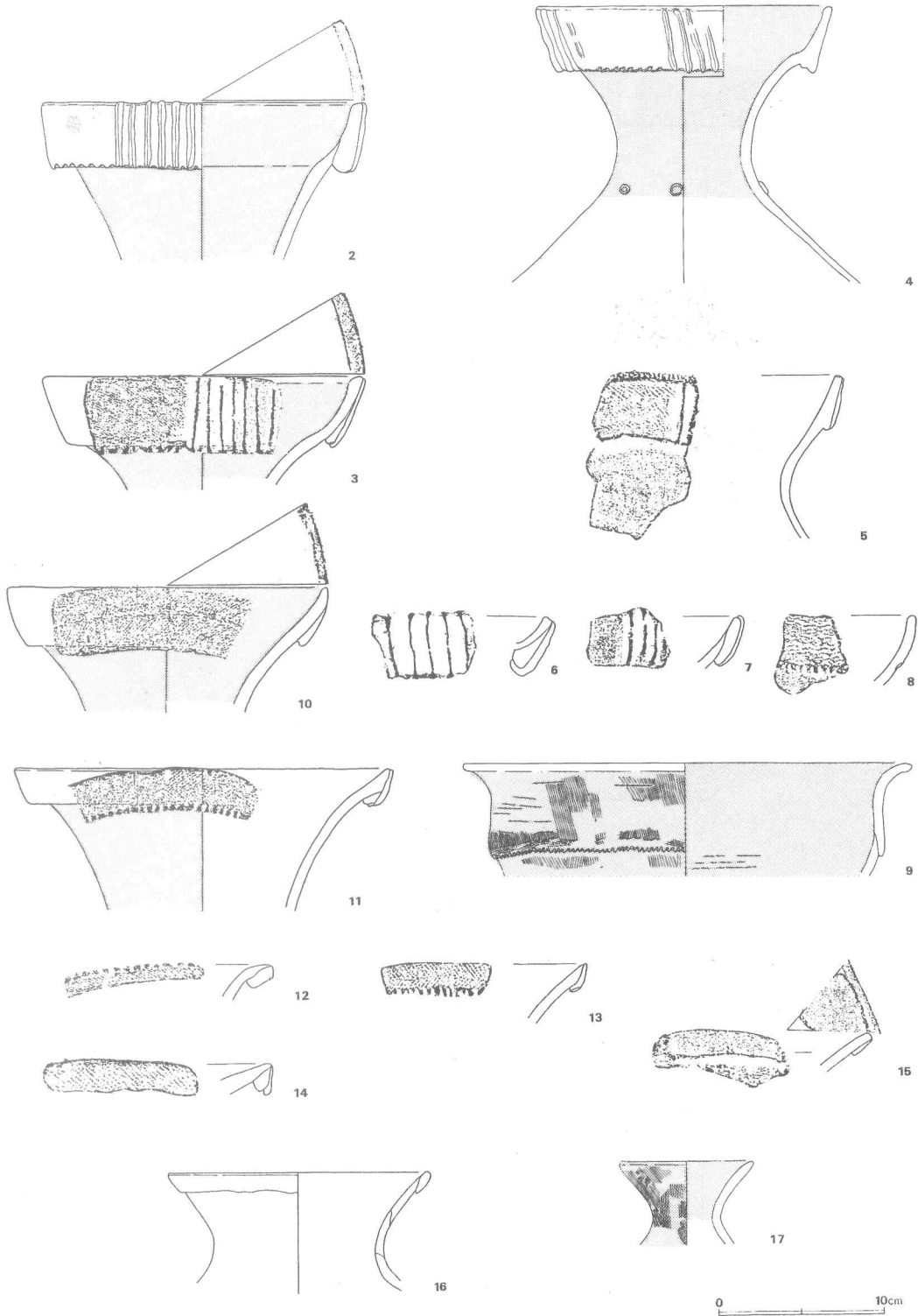
1. 明褐色土 黄褐色土粒子を微量、赤褐色粒子をごく微量、灰褐色粒子を少量、白色微粒子を一様に少量含む。粘性、弱。しまり、良。
- 1'. 明褐色土 黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を微量、灰褐色粒子を多量、白色微粒子を一様に微量、炭化物を少量含む。粘性、弱。しまり、良。
2. 暗褐色土 黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を微量、灰褐色粒子を多量、白色微粒子を一様に微量炭化物を少量含む。粘性、弱。しまり、良。
3. 暗褐色土 黄褐色土粒子を少量、黄褐色土ブロック(φ30mm)を微量、灰褐色土ブロック(φ30~50mm)を多量含む。鉄斑あり。粘性、弱。しまり、良。
- 3'. 暗褐色土 灰褐色粒子を多量含む。鉄斑あり。粘性、弱。しまり、良。
4. 黒褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック(φ30mm)を少量含む。粘性、強。しまり、良。
5. 灰明褐色土 黄褐色土粒子を多量、黒褐色土粒子を少量、灰褐色土粒子を微量、灰褐色土ブロック(φ50mm)を下層部に少量含む。粘性、良。しまり、良。
- 5'. 灰暗褐色土 第5層に同じであるが、黄褐色土粒子を微量、黒褐色土粒子をごく微量含む。粘性、やや強。しまり、良。
6. 灰黒褐色土 黄褐色土粒子を微量含む。粘性、強。しまり、良。
- 6'. 灰褐色土 第6層に同じであるが、黄褐色土粒子を微量含む。粘性、強。しまり、良。
7. 灰黒褐色土 黄褐色土粒子を一様に多量、黄褐色土ブロックを多量、灰褐色粒子を少量含む。粘性、強。しまり、良。
- 7'. 灰黒褐色土 第7層に同じであるが、黄褐色土粒子を多量、黒褐色土粒子を微量含む。粘性、強。しまり、良。



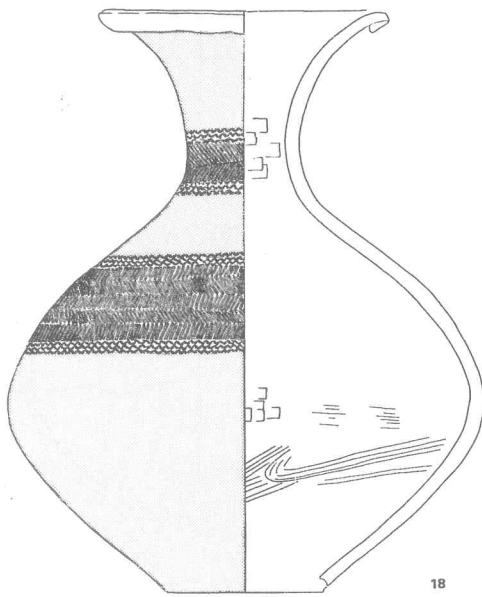
第32図 第1号溝出土遺物実測図 (1)

第12表 第1号溝出土遺物 (1) (第32図)

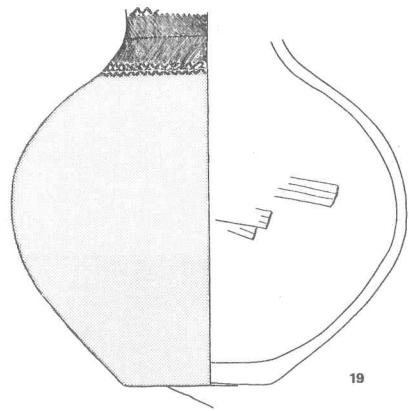
番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺	口径 (23.0) 胴部 (38.2) 底径 (11.6) 器高 (44.6)	複合口縁を呈する。胴下半部に最大径をもち、肩部の張りは弱く、頸部で細く収縮する。複合部は9本1単位の沈線文により6分割する。地文は、不明瞭であるが縄文を施文する。下端には刻み目を施す。外面の頸部は羽状縄文を施し沈線で区画する。肩部は羽状縄文を施し、沈線で鋸歯状に描き区画する。外面は文様帯を除き頸部は縦方向の、胴部は横方向のヘラミガキ調整が施される。内面の頸部は縦方向のヘラミガキ調整、胴部は丁寧なテ調整が施される。部分的にヘラナテ痕が残る。底面には、木葉痕を残す。内面の頸部及び外面の文様帯を除き赤彩。残存、60%。口縁部は90%。	胎土 D微 EH少 G多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	



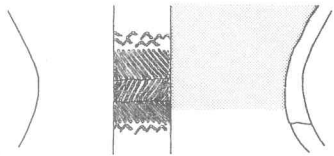
第33图 第1号溝出土遺物実測図 (2)



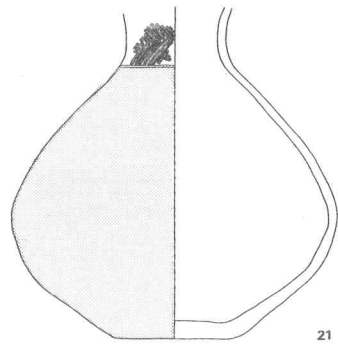
18



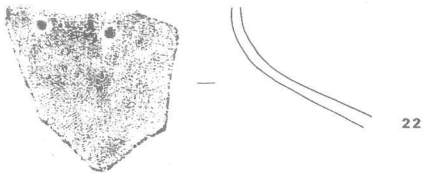
19



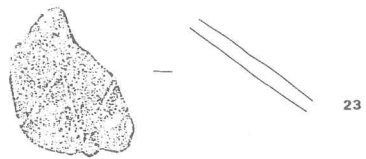
20



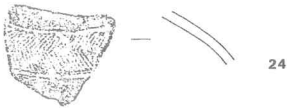
21



22



23



24



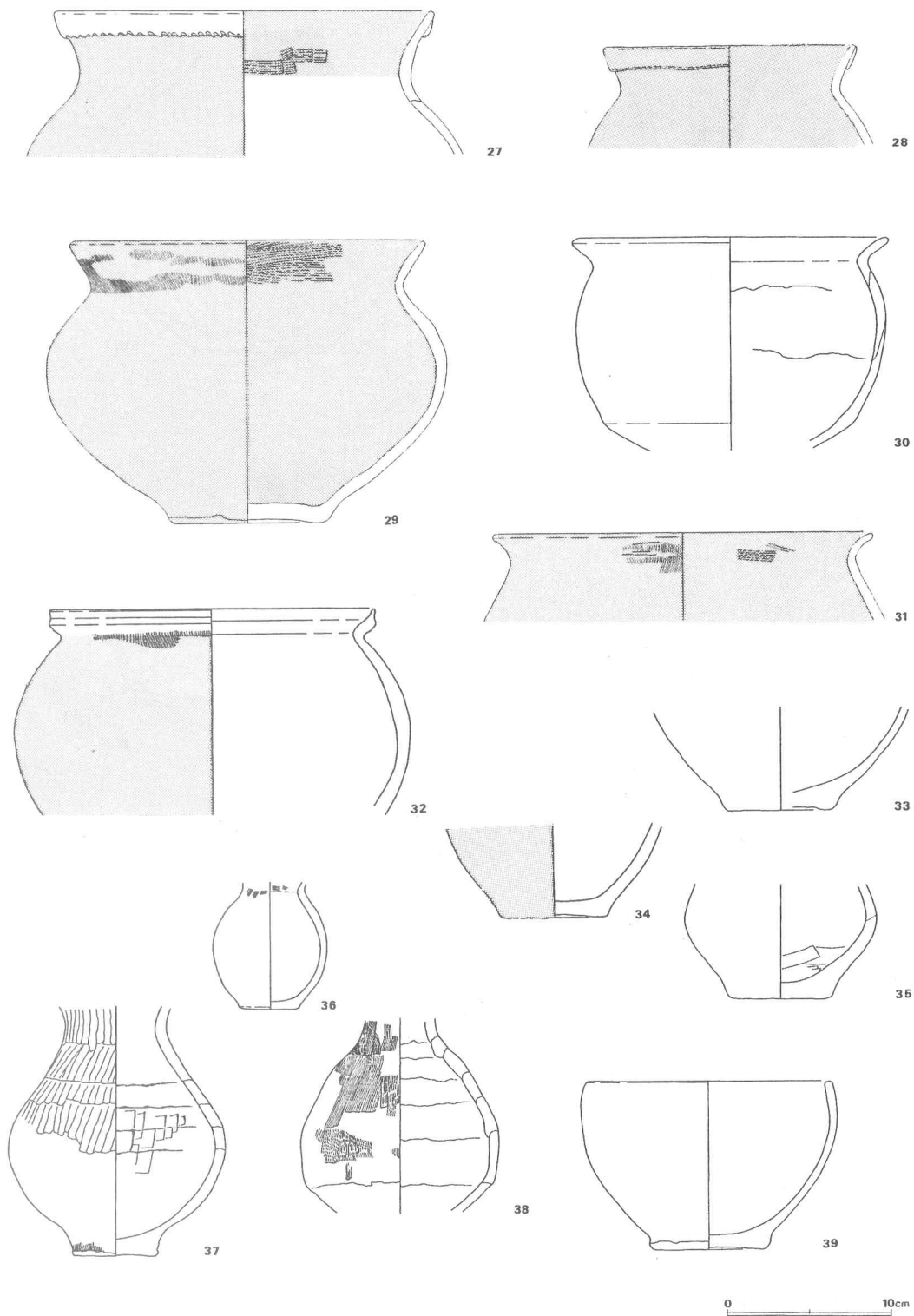
25



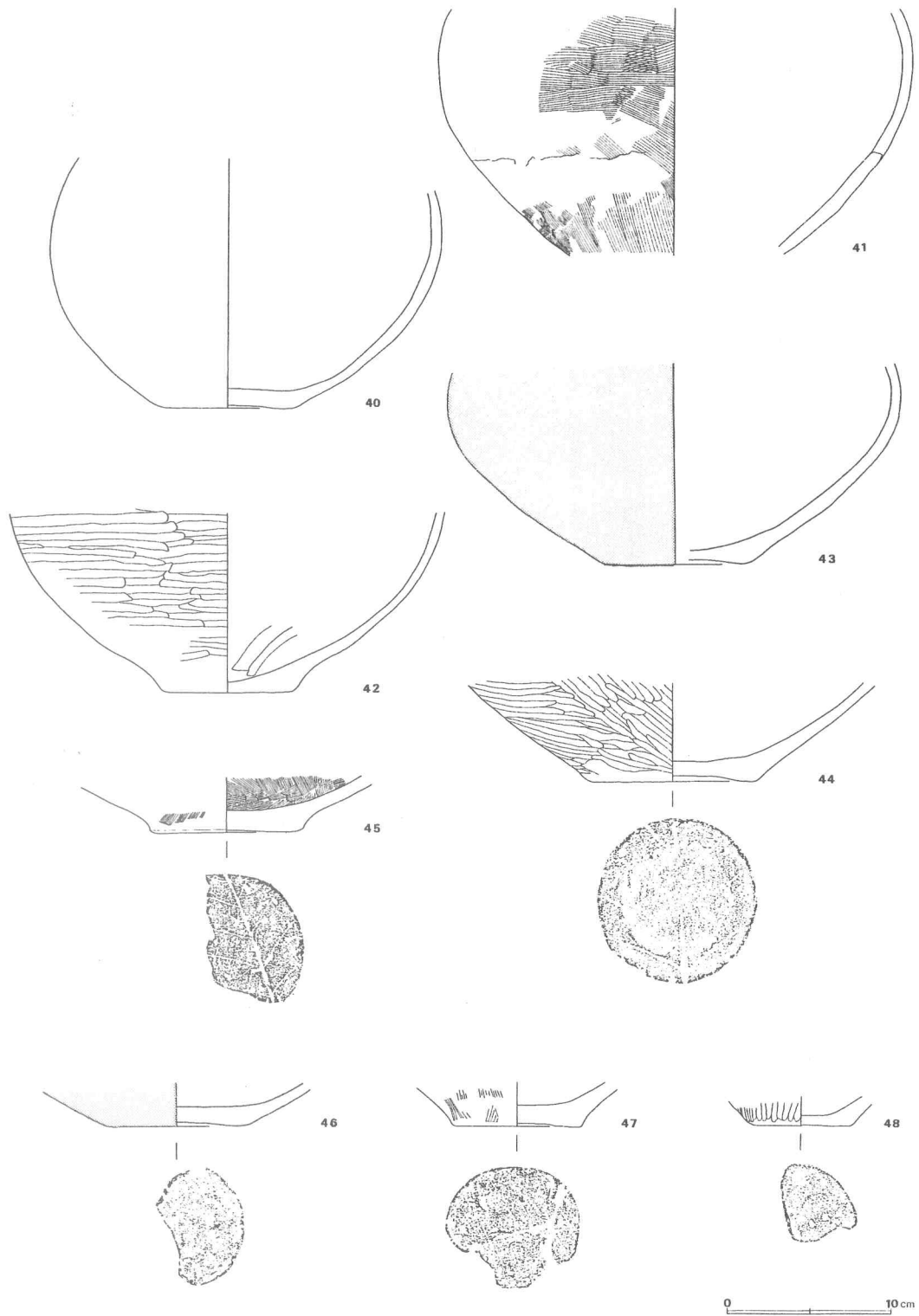
26

0 10 cm

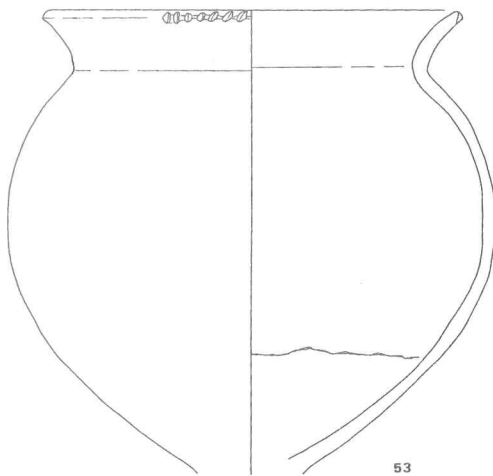
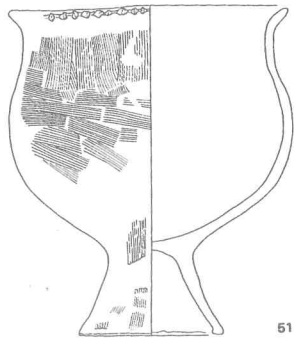
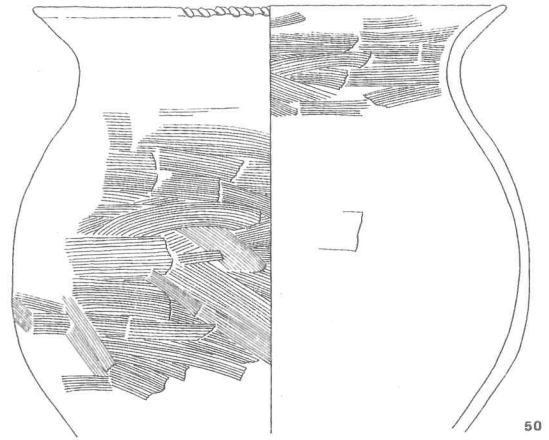
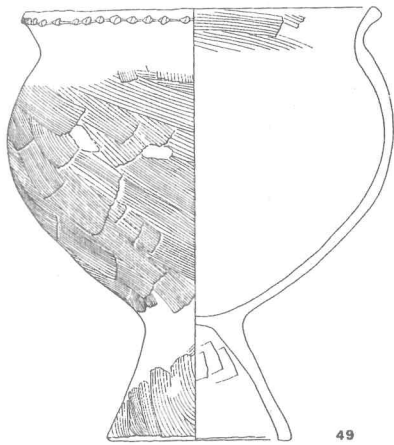
第34图 第1号沟出土遗物实测图 (3)



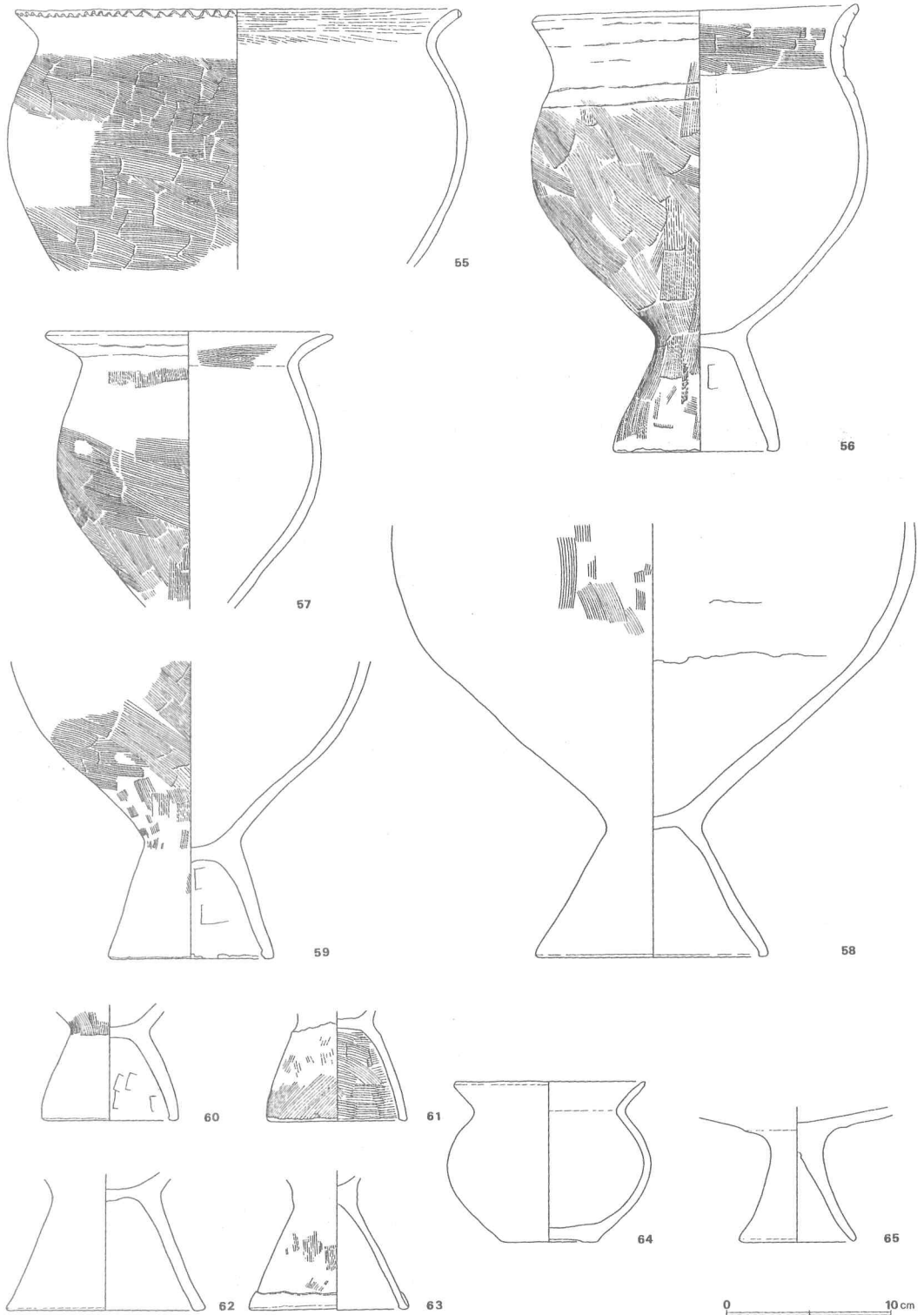
第35图 第1号沟出土遗迹实测图 (4)



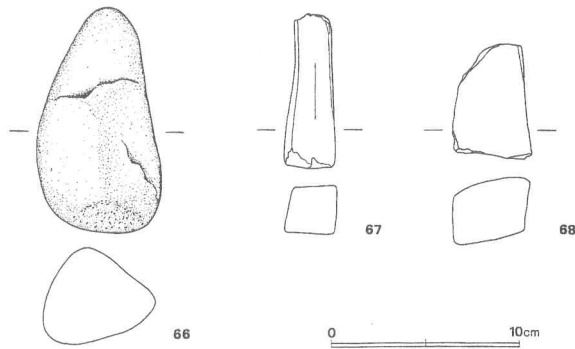
第36图 第1号沟出土遗物实测图 (5)



第37図 第1号溝出土遺物実測図 (6)



第38图 第1号溝出土遺物実測図 (7)



第39図 第1号溝出土遺物実測図 (8)

第13表 第1号溝出土遺物 (2) (第33~39図)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
2	壺	口径 (19.5)	複合口縁。複合部には6本を1単位とする断面三角形の棒状浮文を付す。地文には不明瞭であるが縄文を施文する。口唇部は縄文を施し、円形朱文を付ける。頸部及び内面はヘラミガキ調整後、赤彩する。残存、口縁部30%。	胎土 E H少 G多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
3	壺	口径 (19.6)	複合口縁。複合部には、7本を1単位とする棒状浮文を付す。地文は縄文が巡り、上下にS字状結節文が施文される。下端には刻み目を施す。口唇部は縄文を施す。複合部下は、縦方向のヘラミガキ調整が、内面は横方向のナデ調整が施され、後赤彩する。残存、口縁部30%。	胎土 E H少 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
4	壺	口径 (18.2)	複合口縁。複合部には、4本を1単位とする棒状浮文を付す。下端には刻み目を施す。肩部には、ボタン状の円形浮文を付す。下地には不明瞭であるが縄文を施文、S字状結節文で区画する。外面の頸部は縦方向の、内面は横方向のヘラミガキ調整が施され、後赤彩する。残存、口縁部40%。	胎土 F H少 E G多 焼成 不良 色調 淡橙褐色	
5	壺		複合口縁。複合部には、棒状浮文を付す。地文には縄文を施す。口唇部には、刻み目を施す。外面の頸部及び内面はナデ調整。外面の頸部のみ赤彩。残存、口縁部5%。	胎土 E F少 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
6	壺		複合口縁。複合部には、棒状浮文を付す。内外面ともに地文は見られず、丁寧なナデ調整。後、赤彩する。残存、口縁部3%。	胎土 A 微 F H少 G多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
7	壺		複合口縁。複合部には、棒状浮文を付す。地文には、羽状縄文を施文する。残存、口縁部5%。	胎土 A 微 F H少 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
8	壺		複合口縁。複合部には、不明瞭であるが縄文を施文し、下端には刻み目を施す。内面は丁寧なヘラミガキ調整。残存、口縁部3%。	胎土 E 微 A D少 焼成 良好 色調 淡橙灰褐色	
9	壺	口径 (27.4)	複合口縁。複合部は、緩やかな曲線を描き外傾する。下端には刻み目を施す。外面は縦方向の刷毛整形後、横方向のナデ調整を加える。内面は丁寧なナデ調整。内外面ともに赤彩。残存、口縁部30%。	胎土 H 少 F G多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	

第14表 第1号溝出土遺物 (3)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
10	壺	口径 (19,6)	複合口縁。複合部及び口唇部には、縄文を施文。複合部下及び内面は、丁寧な縦方向のヘラミガキ調整後、赤彩する。残存、口縁部40%。	胎土 EGH少 焼成 良好 色調 淡橙褐色	口唇部確認
11	壺	口径 (22,8)	幅の狭い複合口縁。複合部には、棒状浮文を付し、地文として羽状縄文を施文する。下端には刻み目を施す。外面の頸部及び内面を赤彩痕が残る。残存、口縁部30%。	胎土 FGH多 焼成 やや不良 色調 淡褐色	
12	壺	口径 (18,2)	幅の狭い複合口縁。口唇部には、縄文を施し刻み目を加える。内外面ともに赤彩。残存、口縁部25%。	胎土 AD微 GH多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
13	壺		幅の狭い複合口縁。複合部には縄文を施文し、下端には刻み目を施す。内外面ともに赤彩。残存、口縁部5%。	胎土 A微 EGH多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
14	壺	口径 (21,0)	大きな傾斜をもって開く幅の狭い複合口縁。複合部は粘土を二重に貼り付け、縄文を施文する。内面のみ赤彩。残存、口縁部25%。	胎土 DH少 F多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
15	壺		幅の狭い複合口縁。内面の口縁部に羽状縄文を、口唇部に縄文を施文する。残存、口縁部5%。	胎土 EFH少 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
16	壺	口径 (15,8)	幅の狭い複合口縁。外面の口縁部下及び内面は丁寧なヘラミガキ調整を施す。残存、口縁部5%。	胎土 E微 F少 G多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
17	壺	口径 (8,0)	単純口縁。外面の口縁部から頸部は細かい刷毛整形後、ナデ調整を加える。内面はナデ調整。外面及び内面の頸部を赤彩。残存、口縁部5%。	胎土 EFGH少 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
18	壺	口径 15.6 胴径 25.4 器高 (30,8)	幅の狭い複合口縁。胴部中位に最大径をもつ。肩部の張りは弱く、頸部は細く収縮する。口唇部は平坦面をつくり、不明瞭であるが縄文を施文する。外面の頸部と肩部は羽状縄文を施文し、3段のS字状結節文で区画する。文様帯を除きヘラミガキ調整を施す。内面はヘラ状工具による整形痕を残し、ナデ調整。外面の文様帯を除き、赤彩する。残存、口縁部60%。底部を欠損する。	胎土 AE微 H少 G多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	

第15表 第1号溝出土遺物 (4)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
19	壺	胴径 21.4 底径 8.8	胴部中位に最大径をもつ。肩部の張りは弱く、頸部にいたって細く収縮する。底部は平底。外面の頸部に羽状縄文を施文し、S字状結節文で区画する。胴部は、不明瞭であるが横方向のヘラミガキが施される。内面は丁寧なナテ調整を施すが、僅かに木口状工具による整形痕が残る。外面を赤彩。残存、70%。	胎土 A微 GH少 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
20	壺	頸部径 16.2	細く収縮した頸部。口縁部に向けて大きく開くようである。胎土が砂質で器表面の調整等は不明瞭である。外面は羽状縄文を施文し、上下をS字状結節文で区画する。内面はナテ調整を施す。内面に赤彩痕あり。残存、頸部30%。	胎土 ABDH少 G多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
21	壺	胴径 17.2 底径 6.2	胴部最大径を下半部にもつ。頸部は細く収縮する。外面の頸部には不明瞭であるが、羽状縄文が施文され沈線で区画する。内面は、丁寧なナテ調整を施す。外面の文様帯を除き赤彩。残存、胴部40%。底部は完存。	胎土 E少 FGH多 焼成 不良 色調 淡橙褐色	
22	壺		肩部破片。羽状縄文を施し、S字状結節文で区画する。後に円形浮文を付す。文様帯を除き、丁寧な刷毛整形。内面はナテ調整。外面の文様帯を除き赤彩。残存、肩部10%。	胎土 A微 H少 E多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
23	壺		肩部破片。羽状縄文を施し、沈線で鋸歯状に描き文様帯を区画する。残存、肩部5%。	胎土 EH少 G多 焼成 不良 色調 赤褐色	
24	壺		肩部破片。羽状縄文を施し、沈線で区画する。外面はヘラミガキ、内面はナテ調整を施す。外面の文様帯を除き、赤彩。残存、肩部5%。	胎土 E微 FH少 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
25	壺		頸部破片。縄文を施し、沈線で区画する。外面はヘラミガキ、内面はナテ調整を施す。内外面ともに、文様帯を除き赤彩。残存、頸部10%。	胎土 E微 H少 F多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
26	壺		肩部破片。幅約1.0の櫛描文を施す。内面は丁寧なナテ調整。残存、肩部5%。	胎土 H少 E多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
27	広口壺	口径 (23.4)	複合口縁。複合部の下端には刻み目を施す。外面はヘラミガキ、内面は刷毛整形の後ナテ調整を施す。内外面ともに複合部を除き、赤彩。残存、口縁部20%。	胎土 H少 EF多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	

第16表 第1号溝出土遺物 (5)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
28	広口壺	口径 (15.6)	複合口縁。複合部には不明瞭であるが、縄文を施文する。内外面ともに丁寧なナデ調整後、赤彩。残存、口縁部20%。	胎土 GH少 F多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
29	広口壺	口径 (11.6) 胴径 (24.6) 底径 9.4 器高 17.2	単純口縁。胴上半部に最大径をもつ。外面は不明瞭であるが、胴部はヘラミガキ、口縁部は刷毛整形の後ナデ調整を施す。内面はナデ調整を施す。口縁部は刷毛整形痕が残る。内外面ともに赤彩。残存、60%。底部は完存。	胎土 FG少 E多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
30	広口壺	口径 (19.6) 胴径 (19.2)	単純口縁。胴部は球形となり、頸部で屈曲、口縁部は短く開く。外面は剥落が著しく不明瞭であるが、横方向のヘラミガキ調整。内面は細かい刷毛整形後、ナデ調整を施す。輪積み痕を残す。残存、60%。底部を欠損。	胎土 GH少 EF多 焼成 やや不良 色調 淡赤褐色	
31	広口壺	口径 (23.6)	単純口縁。口縁部は短く外傾する。内外面ともに細かい刷毛整形後、丁寧なナデ調整。さらに赤彩。残存、口縁部5%。	胎土 DE微 F多 焼成 良好 色調 濃灰褐色	
32	広口壺	口径 (20.0) 胴径 (22.4)	S字状口縁。胴部は球形となる。内外面ともに剥落が著しく不明瞭であるが、頸部に刷毛目を残し、胴部はヘラミガキ調整を施す。内面は丁寧なナデ調整。外面の胴部に赤彩痕を残す。残存、20%。	胎土 FH少 E多 焼成 不良 色調 淡橙褐色	
33	壺	底径 (6.8)	小さな底部から傾斜をもって立ち上がる。内外面ともに丁寧なナデ調整。残存、底部30%。	胎土 EF微 G多 焼成 良好 色調 暗褐色	
34	壺	底径 6.6	小さな底部。内外面ともに丁寧なナデ調整。外面のみ赤彩。残存、底部90%。	胎土 E微 H少 F多 焼成 良好 色調 橙褐色	
35	小型壺	胴径 11.8 底径 6.4	小さな底部で、胴部の張りは弱い。外面は不明瞭であるが、ヘラミガキ痕を残す。内面は木口状工具による丁寧なナデ調整。残存、底部90%。	胎土 GH少 F多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
36	小型壺	胴径 7.0 底径 3.6	平底の底部で、微妙に中心付近が盛り上がり安定感を欠く。胴部の張りは弱い。内外面ともに不明瞭であるが、頸部に刷毛整形痕を残す。残存、70%。口縁部を欠損。	胎土 H微 EFG多 焼成 やや不良 色調 橙褐色	

第17表 第1号溝出土遺物 (6)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
37	小型壺	胴径 (13.2) 底径 5.2	小さな底部。胴下半部に最大径をもつ下膨れの壺である。内外面に輪積み痕を残す。外面の胴部上半から頸部にかけてへラミガキ調整。胴下半部はナデ調整を施す。底部付近に刷毛整形痕が残る。内面はナデ調整を施すが、木口状工具による整形痕が残る。残存、60%。口縁部を欠損。	胎土 E微 H少 G多 焼成 やや不良 色調 淡褐色	
38	小型壺	胴径 (12.2)	胴下半部に最大径をもつ下膨れの壺。肩の張りは弱く、頸部にいたる。外面は刷毛整形が施され、部分的にナデを加える。内面はナデ調整。輪積み痕を残す。残存、40%。口縁部及び底部を欠損。	胎土 FH少 EG多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
39	椀	口径 (15.2) 底径 7.2	小さな上げ底の底部から大きく立ち上がる。口唇部には平坦面をつくる。内外面ともに丁寧なナデ調整。残存、60%。底部は完存。	胎土 EH少 FG多 焼成 良好 色調 赤褐色	第8号住と 接合
40	壺	底径 8.4 胴径 24.1	平底の底部から大きく開く胴部。内外面ともに剥落が著しく不明瞭であるが、へラミガキ調整を施すようである。外面には微妙に赤彩痕が残る。残存、底部から胴部60%。底部は完存。	胎土 EH少 G多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
41	壺	胴径 29.2	胴下半部。外面は刷毛整形が施されるが、輪積み痕を残す。内面は調整等不明。残存、胴部30%。口縁部、底部を欠損する。	胎土 F微 H少 EG多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
42	壺	底径 7.8	小さな底部から球形に開く胴下半部。外面は横方向のへラミガキ調整。内面はナデ調整。へラ状工具による整形痕を残す。外面に微妙に赤彩痕あり。残存、20%。	胎土 A微 H少 EG多 焼成 良好 色調 淡褐色	
43	壺	胴径 (27.8) 底径 (8.6)	小さな底部から大きく開く胴下半部。内外面ともに不明瞭であるが、丁寧なへラミガキ調整が施される。外面を赤彩。残存、30%。	胎土 EGH少 F多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
44	壺	底径 (10.2)	上げ底状を呈する底部。木葉痕を周囲に残す。胴部は丁寧なへラミガキ調整。内面はナデ調整を施す。残存、底部70%。	胎土 GH少 E多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
45	壺	底径 (9.4)	小さな底部から大きく開く。木葉痕を残す。外面は丁寧なへラミガキ調整。細かい刷毛整形痕を残す。内面は入念な細かい刷毛整形を施す。残存、底部40%。	胎土 F少 GH多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	

第18表 第1号溝出土遺物 (7)

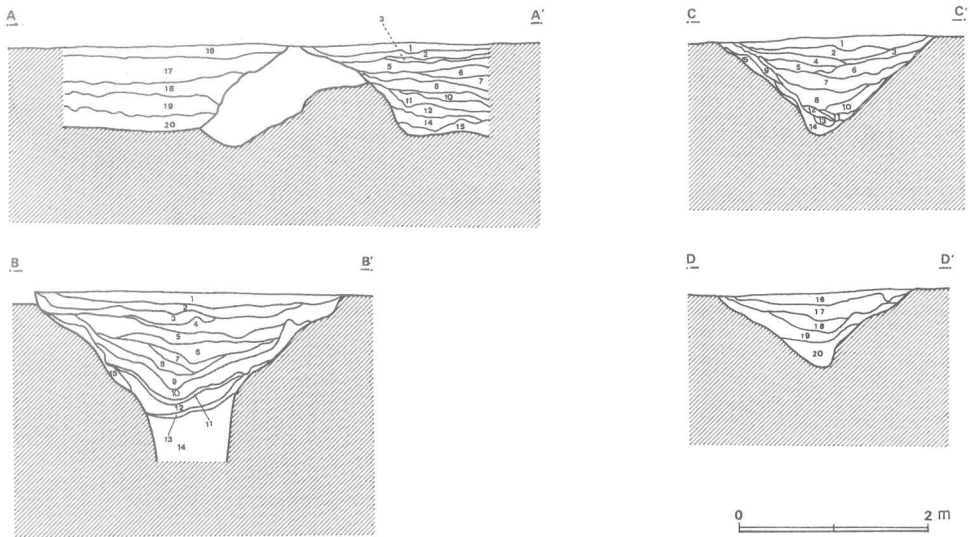
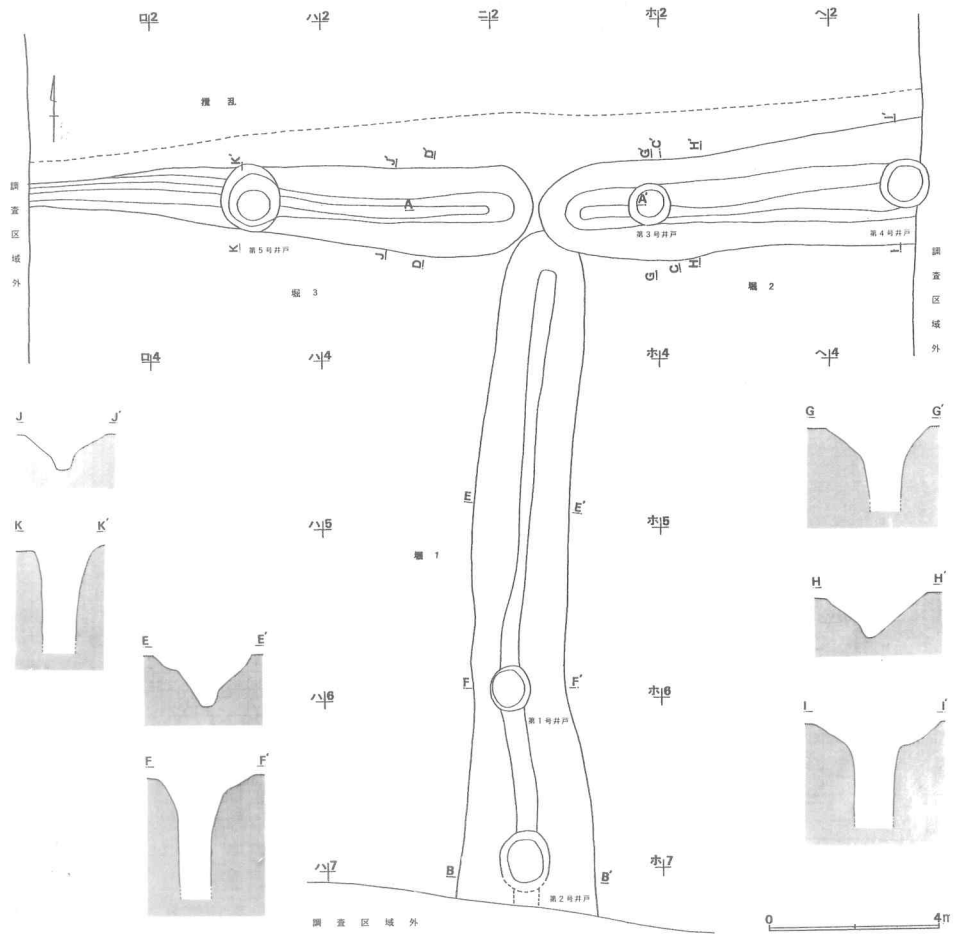
番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
46	壺	底径 (8,8)	小さな底部から大きく開く。底面に「×」の線刻を残す。外面は不明瞭であるが、斜方向のヘラミガキ調整痕が残る。内面は丁寧なナデ調整を施す。外面を赤彩。残存、底部30%。	胎土 A微 EFGH少 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
47	壺	底径 (7,8)	底部破片。底面を削り調整する。外面は刷毛整形の後、ナデ調整。内面は丁寧なナデ調整。残存、底部80%。	胎土 H少 FG多 焼成 良好 色調 淡褐色	
48	壺	底径 (6,2)	底部破片。底面には靱殻の圧痕が残る。外面は縦方向のヘラミガキ調整。内面はナデ調整。外面を赤彩する。残存、底部30%。	胎土 F微 EH少 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
49	台付甕	口径 19,2 胴径 20,7 脚径 9,8 器高 22,8	頸部が緩やかに屈曲し、口縁部は短く外傾する。胴部は球形となる。口唇部には平坦面をつくり出し、端部には刻み目を施す。外面は丁寧な刷毛整形、口縁部にはナデを加える。内面は胴部はナデ調整、口縁部は横方向の刷毛整形痕を残す。脚台部の内面には木口状工具による整形痕が残る。外面の胴部上半に煤が付着する。残存、80%。	胎土 EF少 GH多 焼成 良好 色調 暗橙褐色	
50	台付甕	口径 (25,4) 胴部 (27,8)	頸部が緩やかに屈曲し、口縁部は外反する。端部には刻み目を付す。外面は横方向の刷毛整形を施し、口縁部はナデ調整を加える。内面の口縁部は刷毛整形を施し、端部はナデ調整を加える。胴部は丁寧なナデ調整、僅かにヘラ状工具の整形痕を残す。残存、30%。	胎土 EH少 G多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
51	台付甕	口径 14,9 胴径 15,0 脚径 7,8 器高 17,2	小型の台付甕。頸部が緩やかに屈曲し、口縁部は短く外傾する。端部には刻み目を付す。胴部は中位に最大径をもち、球形を呈する。外面は刷毛整形を施し、口縁部及下半部はナデ調整を加える。内面は丁寧なナデ調整を施す。残存、40%。	胎土 E少 GH多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
52	台付甕	口径 (27,6) 胴径 (33,8)	頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は僅かに外傾する。端部には刻み目を付す。胴部最大径を下半部にもち、偏球状を呈する。外面は不明瞭であるが、刷毛整形痕が残り、口縁部はナデ調整を加える。内面はナデ調整を施す。胴部にはヘラ状工具による整形痕を残す。残存、30%。	胎土 H微 EF少 G多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	

第19表 第1号溝出土遺物 (8)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
53	台付甕	口径 (22.4) 胴径 (26.2)	頸部は「く」に屈曲し、口縁部は外傾する。端部は平坦面をつくり、刻み目を付す。胴部の最大径を上半にもち、強く張る。内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。残存、40%。脚台部を欠損。	胎土 FGH多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
54	台付甕	口径 19.4 胴径 21.4	頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は外傾する。端部には刻み目を付す。胴部の最大径を上半にもつ。外面は刷毛整形を施し、胴下半部はナデ調整を加える。内面の口縁部は刷毛整形、胴部はナデ調整を施す。内面の胴部下半部には煤が付着する。残存、60%。脚台部を欠損。	胎土 EF多 H少 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
55	台付甕	口径 (27.2) 胴径 (28.2)	頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は短く外傾する。端部には刻み目を付す。外面は刷毛整形、口縁部はナデ調整を加える。内面の口縁部は刷毛整形の後ナデ調整。胴部はナデ調整。残存、口縁部から胴部30%。	胎土 H微 EG少 F多 焼成 良好 色調 淡褐色	
56	台付甕	口径 20.1 胴径 20.7 脚径 10.3 器高 21.5	頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は僅かに外傾する。胴部上半に最大径をもつ。脚台部は接合部から直線的に開くが、端部において微妙に内傾する。外面の頸部から口縁部にはかけては押圧を加えるが、輪積み痕を顕著に残す。胴部は刷毛整形を施す。内面の口縁部は刷毛整形。胴部は丁寧なナデ調整。胴部中に煤が付着する。残存、70%。脚台部は完存。	胎土 EF少 GH多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
57	台付甕	口径 (17.6) 胴径 (16.2)	頸部は「く」屈曲し、口縁部は外反する。胴部の張りは弱い。口縁部の外面には輪積み痕を微妙に残す。外面は刷毛整形を施し、肩部にナデ調整を加える。内面は丁寧なナデ調整。頸部に刷毛整形痕を残す。残存、60%。脚台部を欠損。	胎土 EH少 FG多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
58	台付甕	胴径 (32.2) 脚径 (14.6)	やや大型の台付甕。胴部下半から脚台部。外面は不明瞭であるが、僅かに刷毛整形痕を残す。内面は丁寧なナデ調整。残存、30%。	胎土 H少 EFG多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
59	台付甕	脚径 10.2	胴部下半から脚台部。外面は不明瞭であるが、刷毛整形を施す。内面はナデ調整。脚台部の内面はヘラ状工具によるナデ調整痕を残す。残存、胴部下半から脚台部60%。	胎土 F少 EGH多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
60	台付甕	脚径 8.4	脚台部。接合部から直線的に開き、裾部で内湾する。外面の接合部に刷毛整形痕を残し、ナデ調整を加える。内面はナデ調整。ヘラ状工具による調整痕を残す。脚台部のみ完存。	胎土 H少 G多 焼成 良好 色調 橙褐色	

第20表 第1号溝出土遺物 (9)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
61	台付甕	脚径 8.7	小さな接合部から微妙に内湾しながら開く。端部を平坦にする。接合部は器表面が剥落している。外面の下半は斜方向の刷毛整形を残す。内面は入念な刷毛整形を施す。脚台部のみ完存。	胎土 H少 EG多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
62	台付甕	脚径 12.3	接合部から直線的に開く大型の脚台部。内外面ともに調整等は不明。残存、脚台部80%。	胎土 H少 EG多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
63	高 坏	脚径 10.8	接合部から直線的に開く脚部。裾部は幅約1.0の薄い折り返しをもつ。外面はナデ調整。僅かに刷毛目が残る。内面は丁寧なナデ調整。外面のみ赤彩。残存、脚部60%。	胎土 E微 AH少 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
64	椀	口径 (11.6) 胴径 12.6 底径 5.6 器高 9.8	頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は短く開く。底部は上げ底状となる。外面は図示できないが、縦方向のヘラミガキを施し、入念なナデ調整を重ねる。内面はナデ調整。内外面ともに赤彩。残存、70%。	胎土 A微 EG少 H多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
65	高 坏	脚径 (7.0)	坏部の下半で段をもつ。接合部は小さく収縮し、外反気味に開く。内外面ともにナデ調整を施し、赤彩。残存、30%。	胎土 FH多 焼成 良好 色調 暗橙褐色	
66	敲き石	長さ 11.9 幅 6.7 厚さ 5.2 重さ 458g	下端部に敲打痕あり。自然石を利用する。	石質 砂岩 色調 暗灰褐色	
67	砥 石	長さ (8.1) 幅 2.7 厚さ 2.5 重さ 84g	表と裏面、側面、さらに下端を研ぎ面とする。	石質 砂岩 色調 濃灰褐色	
68	砥 石	長さ (6.0) 幅 4.2 厚さ 3.1 重さ 116g	表と裏面を研ぎ面とする。下端を欠損する。	石質 凝灰岩 色調 淡灰褐色	



第40图 第1·2·3号掘实测图

土 層 註

(第1号堀)

1. 明褐色土 黄褐色土粒子を微量、黒褐色粒子をまばらに微量、灰白色粒子を一様に少量含む。粘性、弱。しまり、良。
2. 明褐色土 黄褐色土粒子を微量、黒褐色粒子を少量、灰白色粒子を少量含む。粘性、弱。しまり、良。
3. 明褐色土 黄褐色土粒子をごく微量含む。粘性、良。しまり、良。
4. 黒褐色土 黄褐色土粒子を少量、黒褐色土ブロック (φ20~30mm) を少量、灰白色土ブロック (φ20~30mm) をまばらに微量、粘性、弱。しまり、良。
5. 明灰褐色土 黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を微量、粘性、弱。しまり、良。
6. 明褐色土 黄褐色土粒子を多量、赤褐色粒子をごく微量含む。粘性、良。しまり、良。
7. 暗褐色土 黄褐色土粒子をごく微量、赤褐色粒子をごく微量、黒褐色粒子をまばらに微量含む。粘性、良。しまり、良。
7. 暗褐色土 第7層と同じであるが、黄褐色土粒子を少量含む。赤褐色粒子と黒褐色粒子は含まない。粘性、良。しまり、良。
8. 明灰褐色土 黄褐色土粒子をまばらに多量、灰白色土ブロックを少量、黒褐色土ブロックを少量含む。鉄斑あり。粘性、強。しまり、良。
9. 明灰褐色土 黄褐色土粒子を微量、灰白色粒子をごく微量。鉄斑あり。粘性、強。しまり、良。
10. 明灰褐色土 黄褐色土粒子を多量、黒白色土ブロック (φ30mm) を少量。鉄斑をまばらに多量。粘性、強。しまり、良。
11. 青灰褐色土 黄褐色土粒子を多量含む。鉄斑をまばらに多量。粘性、強。しまり、強。
11. 青灰褐色土 第11層と同じであるが、黄褐色土ブロックを多量含む。鉄斑を含まない。粘性、強。しまり、強。
12. 青灰褐色土 含有物等は含まないが、植物の炭化物を下部に検出。粘性、強。しまり、強。
13. 黄褐色土 地山。粘土質土層。粘性、強。しまり、強。掘り過ぎの部分。

(第2・3号堀)

1. 明褐色土 黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を少量、黒褐色粒子を少量、白色微粒子を多量含む。粘性、弱。しまり、良。
2. 暗褐色土 黄褐色土粒子を微量、白色微粒子を多量、炭化物をごく微量含む。粘性、弱。しまり、良。
3. 暗褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック (φ10~30mm) 赤褐色粒子をごく微量含む。粘性、弱。しまり、良。
4. 明褐色土 黄褐色土粒子を微量、白色微粒子を微量含む。粘性、弱。しまり、良。
5. 明灰褐色土 黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を微量含む。粘性、良。しまり、良。
6. 明灰褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック (φ30~50mm) を多量。黒白色土ブロック (φ10~30mm) を一様に多量。粘性、良。しまり、良。
7. 明灰褐色土 黄褐色土粒子を多量、灰白色土ブロックを多量含む。粘性、良。しまり、良。
8. 黒褐色土 黄褐色土粒子を微量、赤褐色粒子を微量含む。粘性、弱。しまり、良。
9. 黒褐色土 黄褐色土粒子を多量、赤褐色粒子をごく微量、黒褐色粒子を微量含む。粘性、良。しまり、良。
10. 暗灰褐色土 黄褐色土粒子を多量、赤褐色粒子をごく微量含む。粘性、良。しまり、良。
11. 暗灰褐色土 黄褐色土粒子を多量、黒褐色粒子を微量含む。粘性、良。しまり、良。
12. 暗灰褐色土 黄褐色土粒子を少量、黒褐色粒子を少量含む。粘性、弱。しまり、良。
13. 暗灰褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロックを少量。黒褐色粒子を少量。粘性、良。しまり、良。
14. 灰黒褐色土 黄褐色土粒子を多量、灰白色土ブロック (φ5~30mm) を多量含む。粘性、強。しまり、良。
15. 黄褐色土 地山。粘土質土層。粘性、強。しまり、強。掘り過ぎの部分。
16. 明褐色土 黄褐色土粒子を下部に少量、赤褐色粒子を微量、灰白色粒子を少量含む。黒褐色粒子を少量含む。粘性、弱 (さらさら)。しまり、良。
17. 暗褐色土 黄褐色土粒子を多量、赤褐色粒子をごく微量、灰白色粒子を少量含む。粘性、弱。しまり、良。
18. 暗褐色土 黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子をごく微量、灰白色粒子を少量含む。粘性、良。しまり、良。
19. 暗褐色土 黄褐色土粒子を一様に多量、赤褐色粒子をごく微量、灰白色粒子を少量含む。粘性、良。しまり、良。
20. 黒褐色土 黄褐色土粒子を一様に多量、黄褐色土ブロック (φ10~30mm) を多量、赤褐色粒子を微量含む。粘性、強。しまり、良。

(3) 堀と出土遺物

この調査区から堀が3本検出されている。各堀の配置については、第40図に記したとおりであるが、第2・3号堀が一線上にあり、第1号堀がそれと直行するように構築されている。交差部分の切り合い関係については、断面図SPA-A'のようであり、第2号堀と第3号堀は直前で下場から斜めに立ち上がり、第1号堀も同じようになって断面図の位置までは達していない。このようなことから、各堀が独立しているものと考えられる。また、検出された遺物の時期から同時期に併存していたとも考えられる検出状況である。

この検出された各堀とも井戸状の掘り込みを中心部分にもっていた。堀と井戸の関係については、堀の遺構確認面である上面には井戸の存在を想起させるような掘り方はされておらず、第1号堀の南側の井戸において辛うじて断面による観察ができるような状況であった。しかし、堀を掘り進める過程において井戸の覆土と見られるような堆積状況はなく、井戸状遺構が埋没してから堀が埋まって行ったようである。なお、井戸状遺構を完掘した翌日は、堀の底面から1/3程の深さまで水が沸き出しているような状況で、水位から井戸状遺構は見えなくなっていた。

第1号堀 (第40図)

調査区の中央ニ〜ヘー2〜3グリッドに位置し、調査区の北から南に向けて直線的に掘られている。北側では、第1号溝と北端で切り合い、第2・3号堀と上場において切り合うかのように構築されている。南側は調査区域外となる。形態は、ほぼ直線的で、断面は底面が平坦になるV字形を呈する。箱薬研堀である。検出された長さは約16.0m、幅は上場において2.0〜3.3m、下場においては0.2〜0.5m、深さは北側が浅く101〜159cmを測る。軸偏差は、南北軸がN-3°-Wをとる。遺物は、グリッドごとに区分して一括して取り上げた。図示できたものは、古瀬戸の盤 (No.1) や常滑系の甕 (No.2・3・4)、播鉢 (No.5) が出土している。なお、この堀から2カ所において井戸状遺構が検出されている。いずれも堀の上場の内側から検出されている。北側を第1号、南側を第2号として、以下に記す。井戸と井戸の間の長さは、約4.0mである。

「第1号井戸状遺構」

堀の中央やや南よりに位置し、堀の中心線上に掘り込まれている。平面形態は円形で、断面形態は漏斗状となる。ただし、断面形態の上半分は堀の傾斜部分となる。規模は、長径1.12m、短径0.92m、遺構確認面からの深さ2.65mである。

「第2号井戸状遺構」

堀の南よりに位置し、この遺構についても堀の中心線上に掘り込まれている。平面形態は円形で、断面形態は漏斗状である。規模は、長径1.40m、短径1.92m、遺構確認面からの深さ2.04mである。

第2号堀 (第40図)

調査区の北東側ハ～ニー3～7グリッドに位置し、調査区の東側で東西方向に直線的に掘られている。西側では第1号溝と切り合い、東側では調査区域外となる。第2号堀との関係については、上場において一線上に繋がるかのように、第1号堀とは直行するかのようにかのように構築されている。形態は、ほぼ直線的で、断面は底面がやや丸くなるV字形を呈する。薬研堀である。検出された長さは約9.2m、幅は上場において2.0～3.0m、下場においては0.2～0.6m、深さは東側が浅く89～96cmを測る。東側の方が西側よりも広く、浅くなっている。軸偏差は、東西軸がE-3°-Sをとる。遺物は、グリッドごとに区分して一括して取り上げた。図示できたものは、常滑系や瀬戸美濃系の甕 (No.13・14・15) や播鉢 (No.9・10・11) 等である。なお、この堀から2カ所において井戸状遺構が検出されている。いずれも堀の上場の内側から検出されている。西側を第3号、東側を第4号として、以下に記す。井戸と井戸の間の長さは、約6.0mである。

「第3号井戸状遺構」

検出された堀の中央やや西側に位置し、堀の中心線上に掘り込まれている。平面形態は円形で、断面形態は漏斗状となる。ただし、断面形態の上半分は堀の傾斜部分となる。規模は、長径1.04m、短径1.04m、遺構確認面からの深さ1.66mである。

「第4号井戸状遺構」

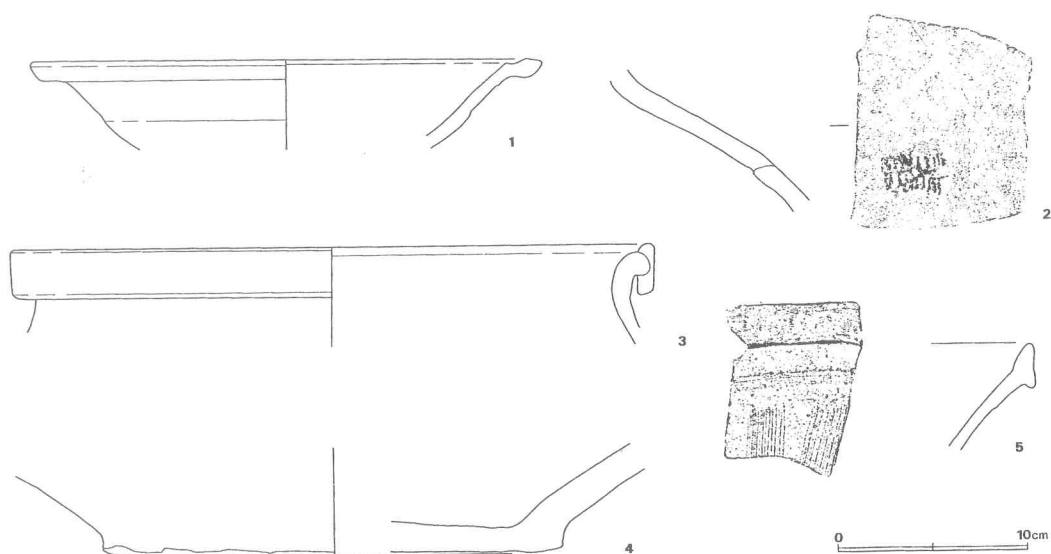
堀の東に位置し、この遺構についても堀の中心線上に掘り込まれている。平面形態は円形で、断面形態は漏斗状である。規模は、長径1.20m、短径1.12m、遺構確認面からの深さ1.35mである。

第3号堀 (第40図)

調査区の北西側ニ～ヘー2～3グリッドに位置し、調査区の西側で東西方向に直線的に掘られている。東側では第1号溝と切り合い、西側では調査区域外となる。西側においては、徐々に細く浅くなり、調査区から出た部分で立ち上がってしまうような状況を示していた。形態は、ほぼ直線的で、断面は底面が平坦となるV字形を呈する。箱薬研堀である。検出された長さは約11.88m、幅は上場において0.6～2.1m、下場においては0.1～0.2m、深さは西側が浅く42～90cmを測る。西側の方が東側よりも細く、浅くなっている。軸偏差は、東西軸がE-3°-Sをとる。遺物は、グリッドごとに区分して一括して取り上げた。図示できたものは、内耳土器 (No.1) 等である。なお、この堀からは1カ所において井戸状遺構が検出されている。第5号井戸状遺構とする。

「第5号井戸状遺構」

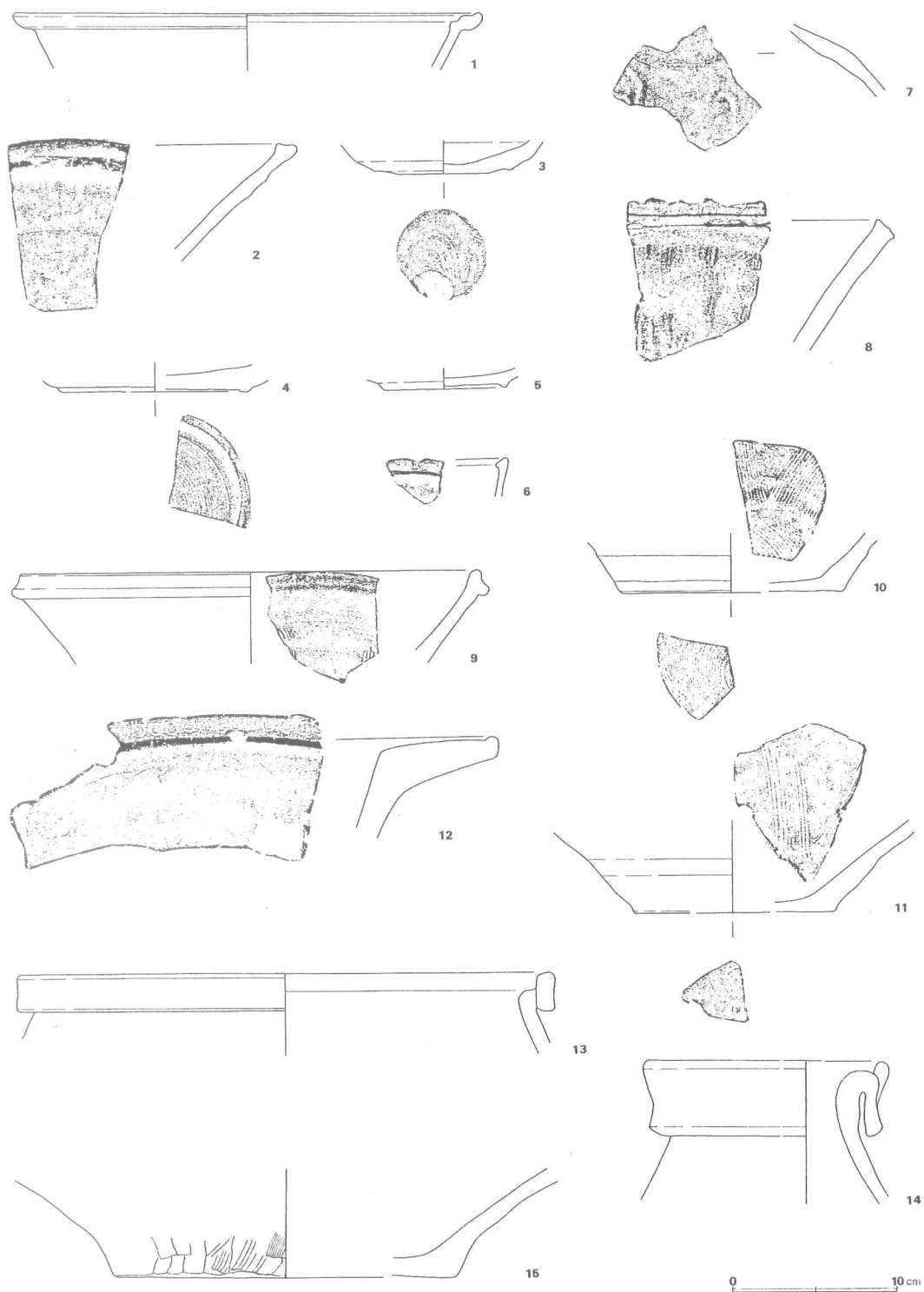
検出された堀の中央付近に位置し、堀の中心線上に掘り込まれている。平面形態は円形で、断面形態は筒状となる。規模は、長径1.64m、短径1.40m、遺構確認面からの深さ2.27mである。



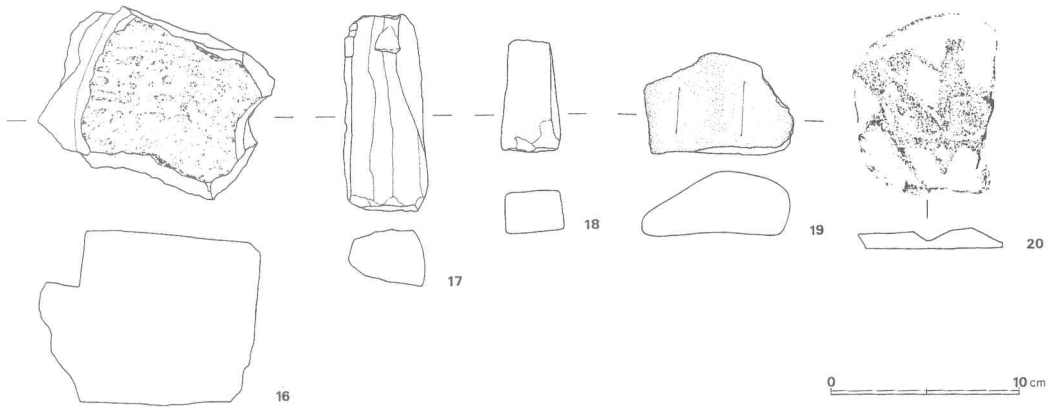
第41図 第1号堀出土遺物実測図

第21表 第1号堀出土遺物 (第41図)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	盤	口径 (27.4)	古瀬戸。口縁部の破片。内外面に灰釉を施す。口縁部を外に突出させる。残存、口縁部10%。	胎土 FG少 焼成 良好 色調 淡灰褐色	
2	甕		常滑系。甕の胴肩部片。格子状の押印があり、自然釉がかかる。残存、胴肩部5%。	胎土 F少 H多 焼成 堅緻 色調 淡灰褐色	
3	甕	口径 (34.4)	常滑系。甕の口縁部片。頸部に密着するように幅約2.6cmの緑帯を付す。残存、口縁部5%。	胎土 A少 FH多 焼成 堅緻 色調 濃灰褐色	
4	甕	底径 24.8	常滑系。甕の底部片。内外面ともに丁寧な調整である。残存、底部30%。	胎土 E微 FH多 焼成 堅緻 色調 淡灰褐色	
5	搦鉢		常滑系。搦鉢の口縁部片。櫛目は7本単位とする。残存、口縁部10%。	胎土 A微 FH多 焼成 良好 色調 暗橙褐色	



第42图 第2号堀出土遺物実測図 (1)



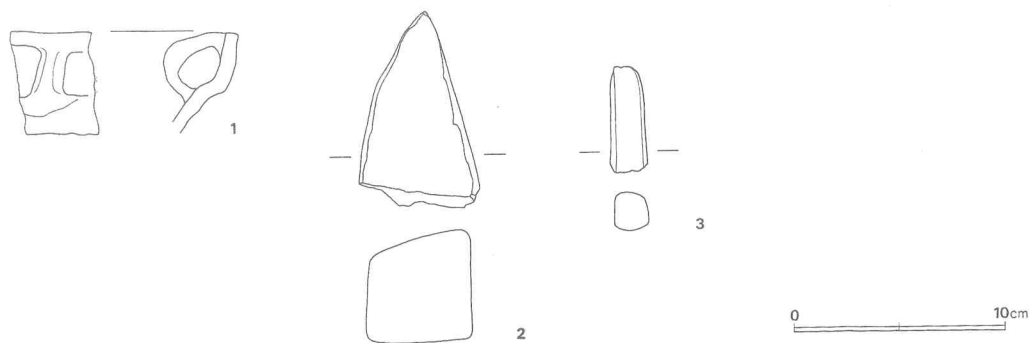
第43図 第2号堀出土遺物実測図 (2)

第22表 第2号堀出土遺物 (1) (第42・43図)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	盤	口径 (29.0)	古瀬戸。口縁部の破片。灰釉を施す。口縁部を外に突出させる。残存、口縁部5%。	胎土 F多 焼成 良好 色調 淡灰褐色	
2	盤	口径 (33.0)	古瀬戸。口縁部の破片。口縁部直下に突起をつくり出す。内外面ともに口唇部から中位まで灰釉を施す。残存、口縁部5%。	胎土 H少 F微 焼成 良好 色調 淡灰褐色	
3	皿	底径 (5.6)	古瀬戸。丸みをもった底部。底面には、糸切り離し痕を残し、「×」を線刻する。ごく微量であるが灰釉が付着する。残存、底部60%。	胎土 F微 焼成 良好 色調 淡灰褐色	
4	壺	高台径(11.4)	底部の破片。底面に高台を付す。糸切り離し痕を残す。外面に自然釉が付着する。残存、底部20%。	胎土 H少 F多 焼成 堅緻 色調 灰褐色	
5	皿	高台径(7.4)	瀬戸美濃系。底部の破片。削り出し高台。胎土目を残す。残存、底部40%。	胎土 E微 F少 焼成 良好 色調 淡橙灰褐色	
6	香炉		古瀬戸。口縁部の破片。口縁部直下に突起をつくり出す。灰釉を施す。残存、口縁部5%。	胎土 F多 焼成 良好 色調 淡灰褐色	
7	瓶子		古瀬戸。肩部の破片。外面には「印花文」を施文し、灰釉を施す。残存、肩部10%。	胎土 F多 焼成 良好 色調 淡灰褐色	
8	片口鉢		常滑系。口縁部の破片。端部は平坦に調整され、中程に微妙な稜をもっている。残存、口縁部5%。	胎土 FH多 焼成 堅緻 色調 濃茶褐色	
9	播鉢	口径 (28.4)	常滑系。口縁部の破片。外面を突出させる。内面に楯目あり。内外面に鉄釉を施す。	胎土 F多 焼成 堅緻 色調 茶褐色	

第23表 第2号堀出土遺物 (2)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
10	播鉢	底径 (13,4)	瀬戸美濃系。底部の破片。轆轤整形で内外面に鉄釉を施す。櫛目は7本単位とする。底部に糸切り離し痕を残す。残存、底部30%。	胎土 A微 焼成 堅緻 色調 淡茶褐色	
11	播鉢	底径 (12,2)	瀬戸美濃系。底部の破片。轆轤整形で内外面に鉄釉を施す。櫛目は10本単位とする。底部に糸切り離し痕を残す。残存、底部10%。	胎土 EH少 F多 焼成 良好 色調 淡褐色	
12	火鉢	口径 (63,4)	口縁部の破片。端部に円形の押型を施す。残存、口縁部10%。	胎土 FG少 E多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
13	甕	口径 (33,0)	常滑系。口縁部の破片。口縁部に幅2,3cmの緑帯を付す。残存、口縁部5%。	胎土 AF多 焼成 堅緻 色調 濃灰褐色	
14	甕	口径 (61,8)	常滑系。口縁部の破片。口縁部を折り返し、頸部に密着させ、幅4,1cmの緑帯をつくり出す。残存、口縁部5%。	胎土 FH多 焼成 堅緻 色調 暗褐色	
15	甕	底径 (20,8)	常滑系。底部の破片。外面にヘラケズリ調整痕を残す。内面は丁寧なナデ調整。残存、底部20%。	胎土 FH多 焼成 良好 色調 濃灰褐色	
16	石白	直径 (31,6) 厚さ 9.1 芯径 (4,4)	石白の壊れたもの。中心から外側に斜め方向の溝が彫られている。全面に火熱を受けて、黒く煤けている。	石質 安山岩 色調 灰褐色	
17	砥石	長さ 10.4 幅 4.3 厚さ 3.0 重さ 204g	短冊状の砥石。表と裏を同じような研ぎ面としている。研ぎ面は片側3面に分けられ、2条の微妙な稜線が出ている。	石質 凝灰岩 色調 淡灰褐色	
18	砥石	長さ 6.0 幅 3.2 厚さ 2.1 重さ 64g	小型の砥石。表と裏、側面の4面を研ぎ面としている。	石質 凝灰岩 色調 淡橙褐色	
19	砥石	長さ (5,1) 幅 (8,1) 厚さ (3,2) 重さ 148g	表と裏の2面を研ぎ面とする。	石質 砂岩 色調 暗褐色	
20	板石塔婆	厚さ (3,2) 重さ 124g	板石塔婆の破片。現存部分は主尊の部分であろうか。判読が難しいが、キリークの下半部と連座の一部と見られる。	石質 緑泥片岩 色調 濃緑色	



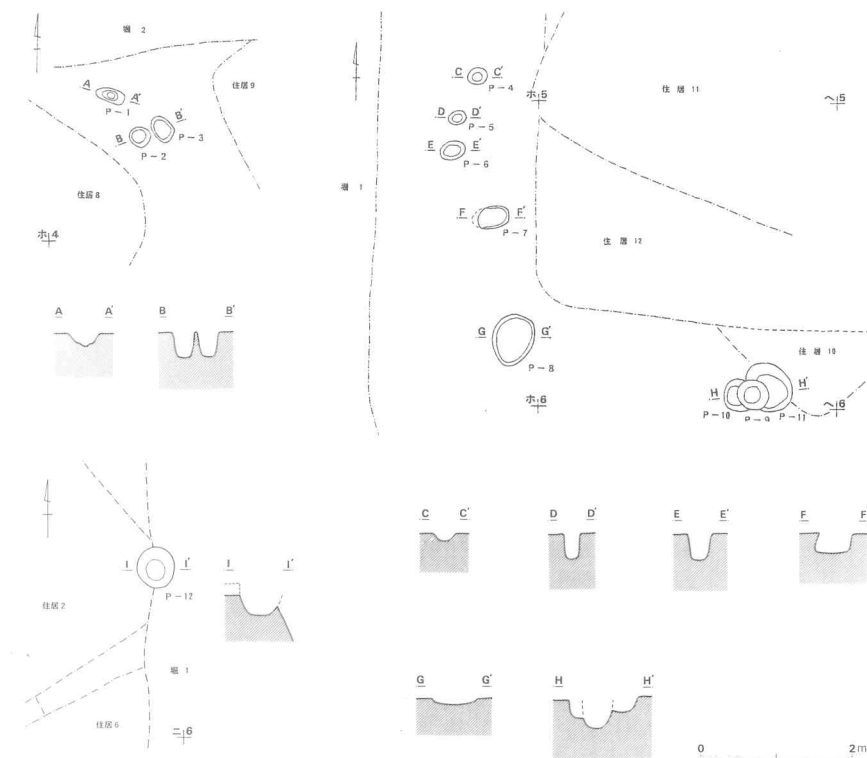
第44図 第3号堀出土遺物実測図

第24表 第3号堀出土遺物 (第44図)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	内耳土器		把手部分。口縁部から付けられ、側部に接着する。残存、把手部分のみ。	胎土 G少 DF多 焼成 やや不良 色調 黒褐色	
2	砥石	長さ 9.2 幅 5.7 厚さ 5.3 重さ 342g	砥石の破損したもの。再利用を行っており、表と裏、側面の4面を研ぎ面としている。	石質 砂岩 色調 灰褐色	
3	砥石	幅 1.8 厚さ 1.8 重さ 10g	小型の砥石。表と側面の3面を研ぎ面としている。火熱を受けている。	石質 凝灰岩 色調 淡橙褐色	

(4) その他の遺構と出土遺物

調査区の西側ニ～ホー4～5の位置に遺構に伴わずピットが検出されている。各ピットの関連性について配置や規模、深度など一連性に欠けるため無理に遺構としては取り上げなかった。なお、ピットに伴う遺物等は検出されていない。



第45図 ピット実測図

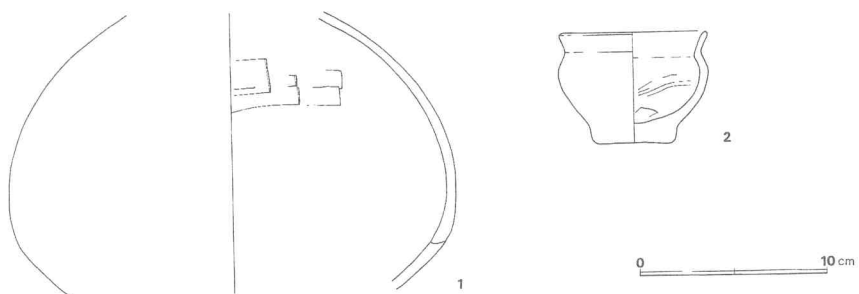
第25表 ピット一覧表 (第45図)

単位 cm

番号	グリッド	形態	長軸	短軸	深さ	底面径	備考
1	エ・オー2	不整円形	44	40	40	凹状	柱痕あり
2	カー2	不整円形	82	72	17	フラット	
3	カ・キー2	楕円形	64	48	8	フラット	
4	カー2	楕円形	32	28	18	凹状	柱痕あり
5	カー2	不整円形	48	40	6	フラット	
6	カー2	不整楕円形	66	46	15	フラット	
7	カー2	円形	24	22	24	凹状	柱痕あり
8	オ・カー3	不整方形	70	48	13	フラット	
9	オー3	不整円形	52	40	22	フラット	
10	キー2	不整楕円形	74	60	69	フラット	

(5) グリッド出土の遺物

遺構に伴わない遺物としてグリッド単位で取り上げを行ったものである。いずれも、基本土層中の第4層である黒褐色土層から出土したものである。



第46図 グリッド出土の遺物実測図

第26表 グリッド出土の遺物 (第46図)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺	胴径 (23.8)	胴部の破片。胴部最大径を下半にもつ。外面は丁寧なナデ調整。内面は横方向のナデ調整。ヘラ状工具による整形痕を残す。外面を赤彩。残存、胴部20%。	胎土 EFH少 G多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
2	小型壺	口径 (7.8) 胴径 (7.8) 底径 (4.0) 器高 5.9	平底の手捏ね土器。外面はナデ調整。内面はヘラ状工具によるナデ調整。後、ナデ調整。内外面ともに赤彩。完存。	胎土 H少 FG多 焼成 やや不良 色調 淡赤褐色	

6 ま と め

今回の第2次調査によって検出された遺構をまとめると、弥生時代後期後半から古墳時代前期前半に位置づけられる溝が1本と住居跡が13軒、さらに時代が下って中世の14世紀後半から15世紀と比定される井戸状の遺構を伴って検出された堀が3本である。ここでは、主な遺構についてまとめておきたい

まず、溝についてであるが鍛冶谷・新田口遺跡等が立地する周辺地域の集落にあっては、初見のものである。それは、想定される集落の範囲の中心部を、西側を位置する上戸田川に向けて斜方向に流れ込むように掘られている。断面を見るとV字形を呈しており、底面の高低差はそれほどない。また、出土遺物の状況は中層からの一括出土で、第1次的な覆土の堆積があった後に投棄されているような状況である。遺構の形態や遺物の出土の仕方について一見すると、本来ならば集落の周辺部に築かれることが予想される環壕と同じような検出状況であった。自然堤防という水の影響を受けやすい当地域にあっては水路的施設として掘られたのであろうか。集落の形態と位置関係あるいは溝の機能など疑問を残すものであり、同時に出土遺物の廃棄の仕方など今後の検討課題を残すものである。

住居跡については、弥生時代後期後半の前野町期から古墳時代前期の五領期のものである。比較的短い期間において建て替え、あるいは立て直しが行われたようである。この時期の集落については、同じ自然堤防上に位置し、多量で広範囲な墓域を構築する集落としての鍛冶谷・新田口遺跡がある。方形周溝墓については上戸田本村遺跡の第1次調査においては2基検出されているだけである。この違いについて、居住環境を制限される自然堤防という立地条件下における集落の形成の在り方を、鍛冶谷・新田口遺跡との対比をしながら、位置関係を考慮に入れて見つめて行く必要があるようだ。

最後に中世に構築された3本の堀についてであるが、年代的には遺物の製作年代からすると14世紀後半から15世紀に位置付けられる。中世の時期については具体的な、あるいは確実なことはわからないが、近世に編纂された『新編武蔵風土記稿』には中世を開基とする寺院や、桃井氏の記述が見られ、また縁起など伝承的にも残されている。実際、この遺跡の東へ約200mの場所に多福院があり、当寺は、風土記稿に記されている亀宝山能満寺と号す真言宗の寺院である。今回の発掘調査により、検出された遺構や遺物をどう位置づけるか考慮すべきことは多く残されているものと考え。中世の寺院跡あるいは居館跡の存在について、今後の調査の成果と南原遺跡の成果を待ちたい。

[参考文献]

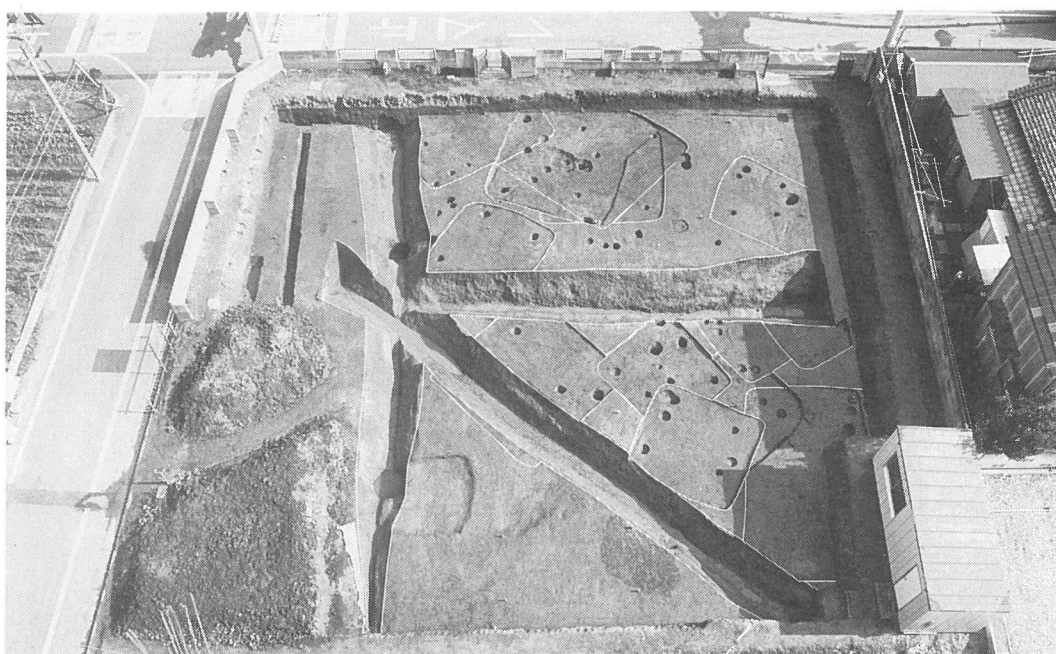
「戸田市史 資料編」戸田市 1981

西口正純 「鍛冶谷・新田口遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第62集

(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団1986



(1) 上戸田本村遺跡Ⅱの位置



(2) 調査区域全景

図版 2



(1) 第1号住居跡 (南から)



(2) 第2号住居跡 (南から)



(1) 第3号住居跡（南から）

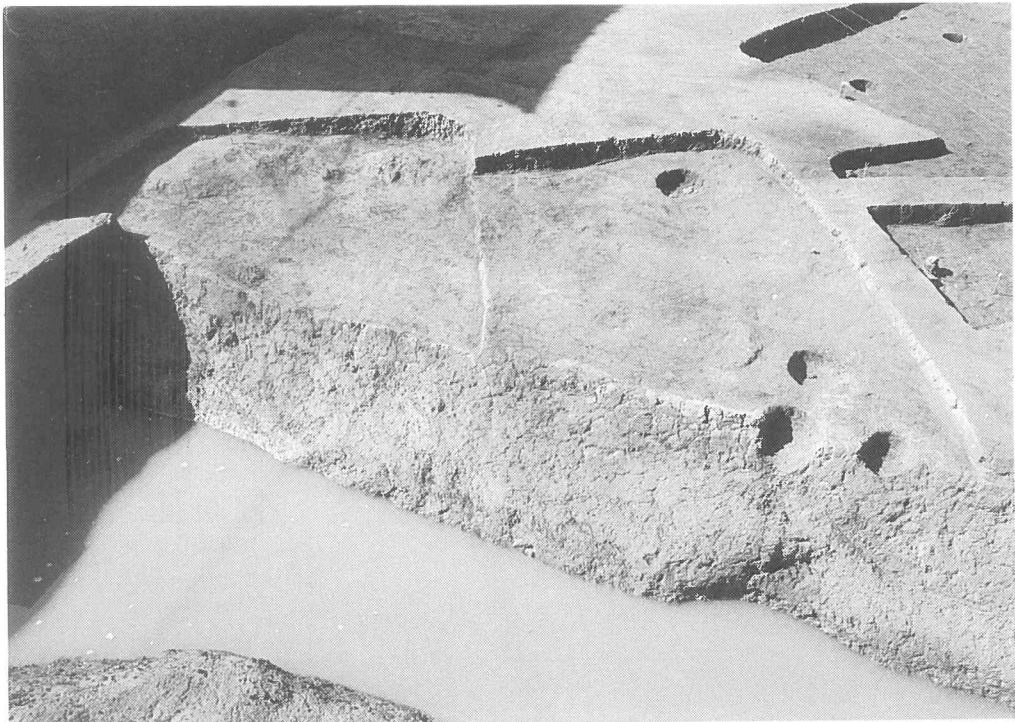


(2) 第3号住居跡調査風景

図版 4



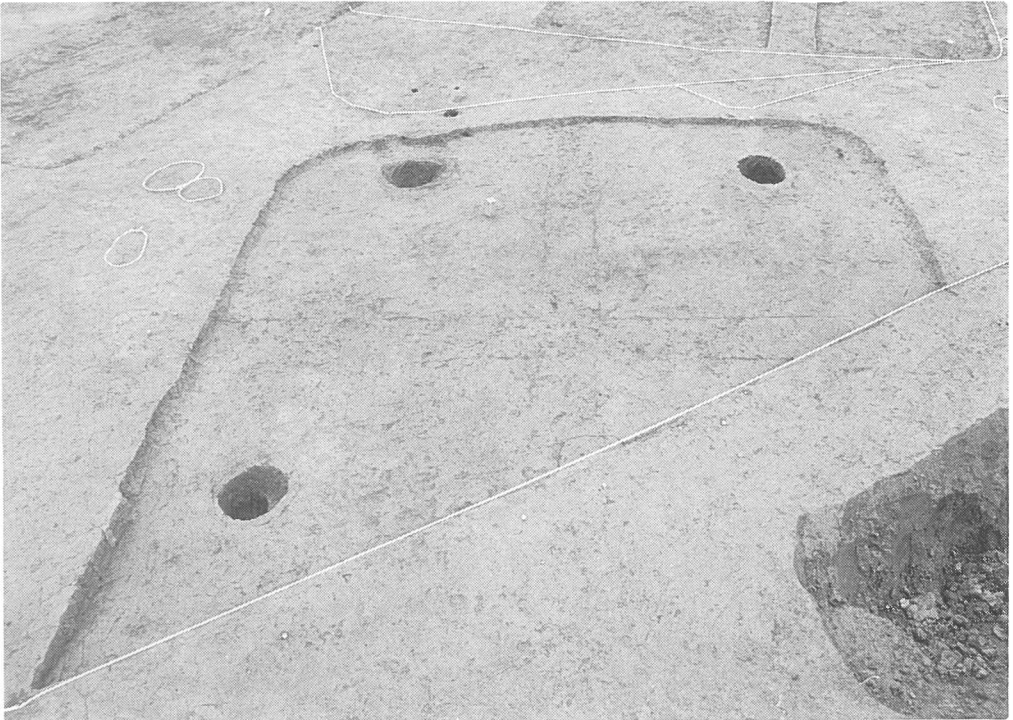
(1) 第4号住居跡 (南から)



(2) 第6・7号住居跡 (東から)

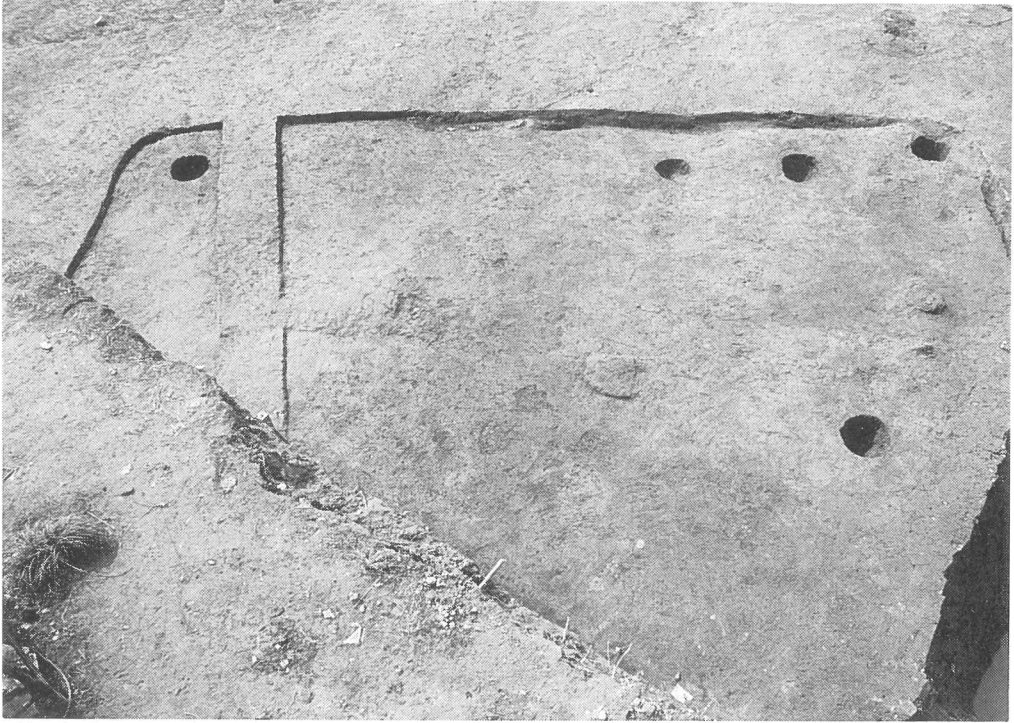


(1) 第1～5号住居跡切り合い状態

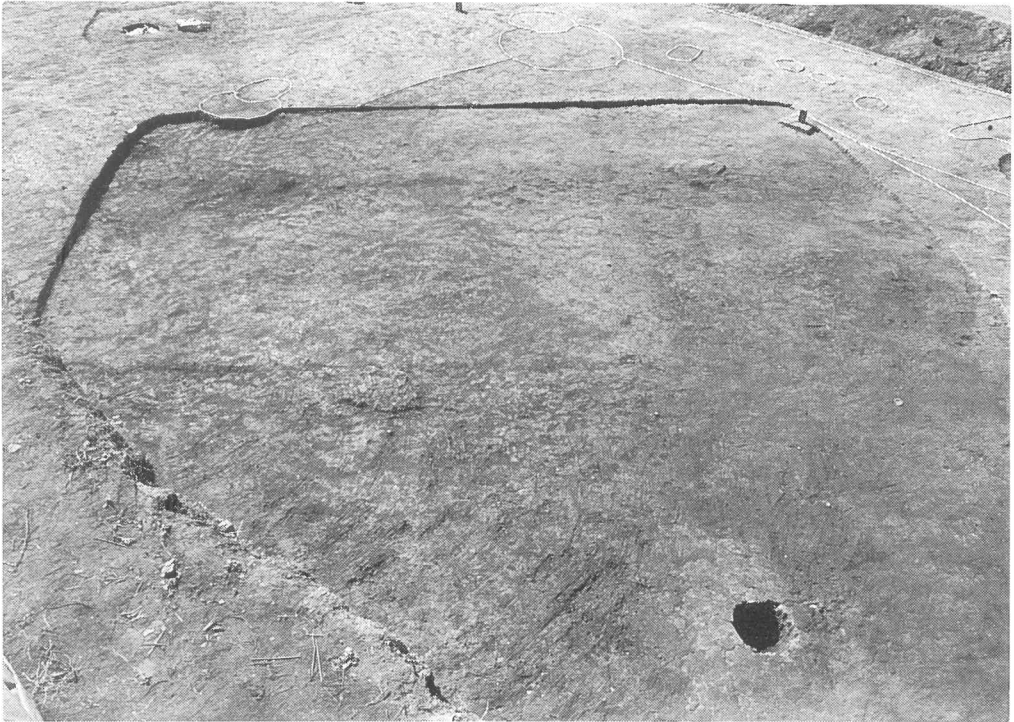


(2) 第8号住居跡（西から）

図版 6



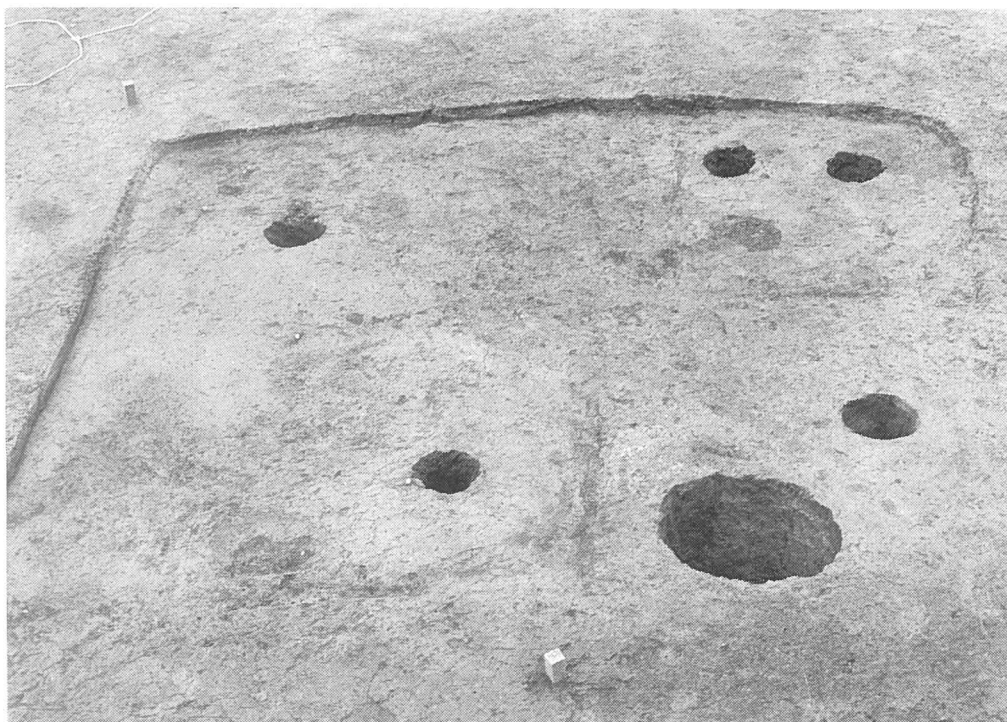
(1) 第9号住居跡 (東から)



(2) 第10号住居跡 (北から)

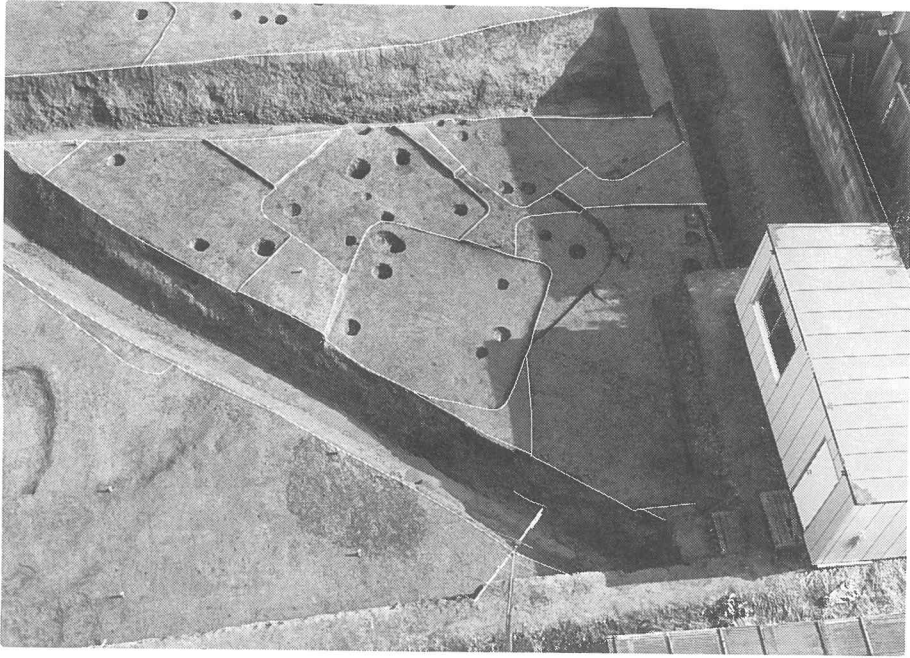


(1) 第11号住居跡（東から）



(2) 第13号住居跡（南から）

図版 8



(1) 第1号溝 (斜方面の溝)



(2) 土器集中地点 (北から)



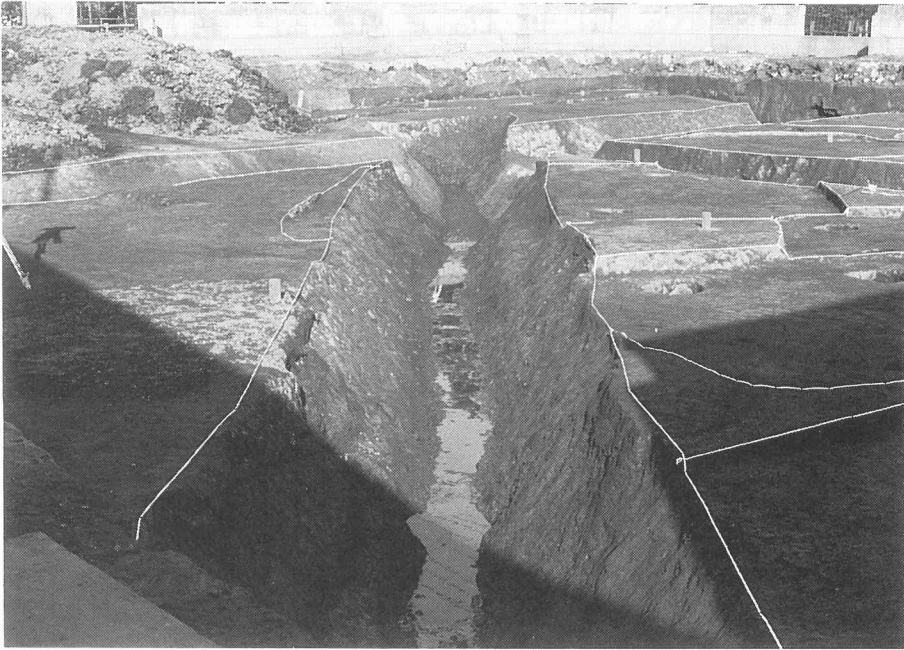
(3) 土器集中地点 (上から)



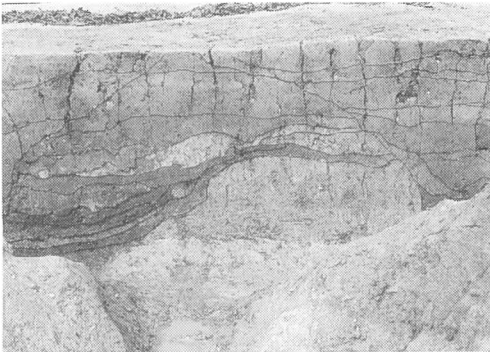
(4) 土器集中地点 (東から)



(5) 第1号溝調査風景



(1) 第1号溝 (南から)



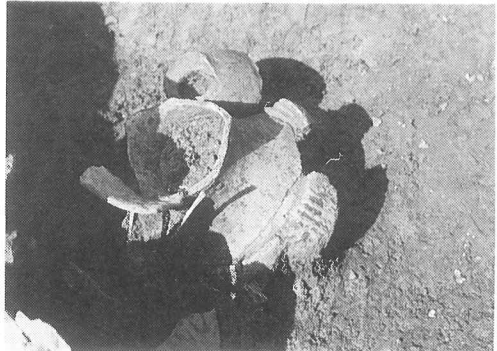
(2) 遺溝断面 (SPA-A')



(3) 遺溝断面 (SPB-B')



(4) 土器出土状況 (第32図-1)



(5) 土器出土状況 (第33図-4)

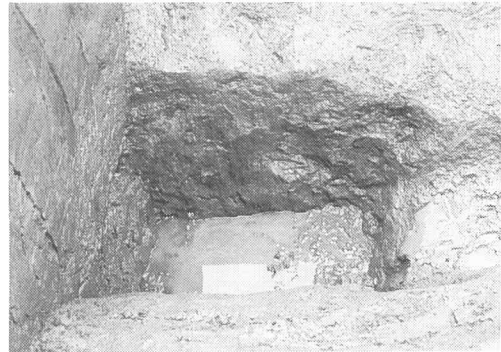
図版10



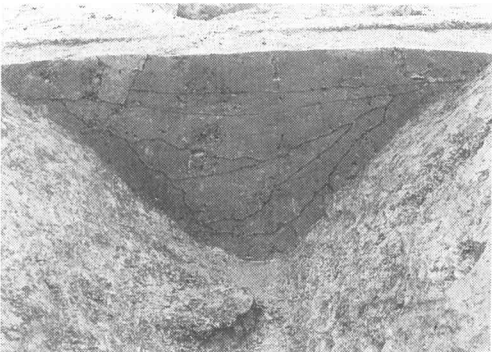
(1) 第1号堀 (南から)



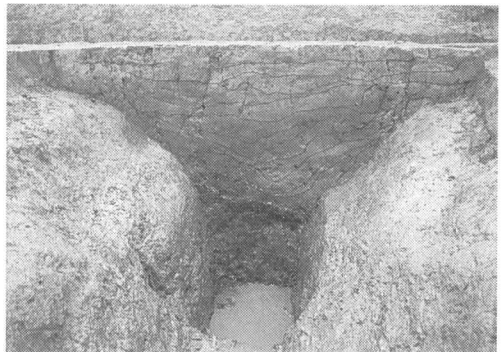
(2) 第1号堀の第1号井戸状遺構



(3) 第1号堀の第2号井戸状遺構



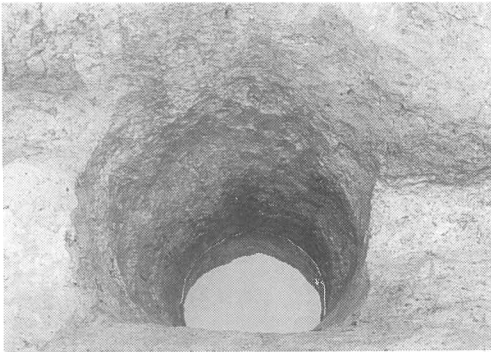
(4) 第1号堀断面 (SPB-B')



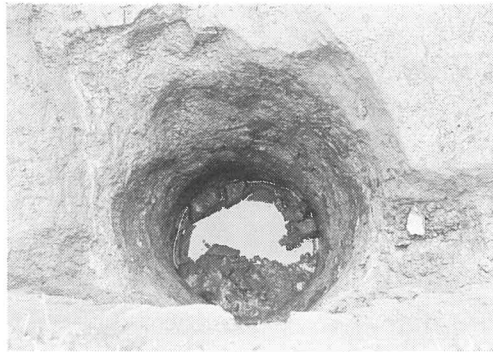
(5) 第1号堀断面 (SPC-C')



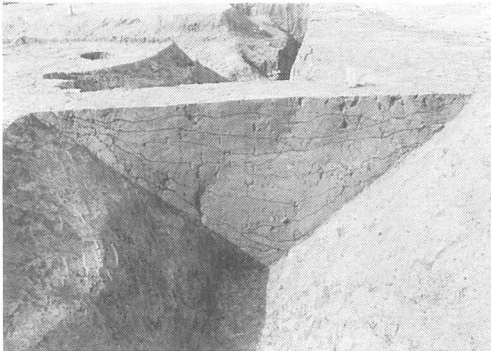
(1) 第2・3号堀 (西から)



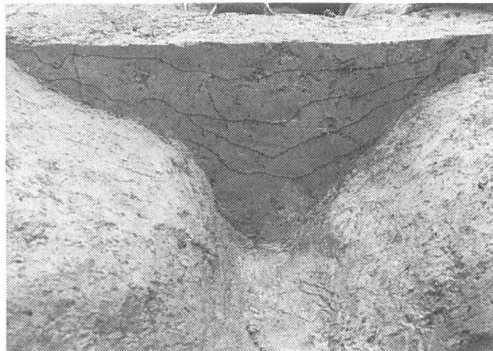
(2) 第2号堀の第3号井戸状遺構



(3) 第3号堀の第5号井戸状遺構

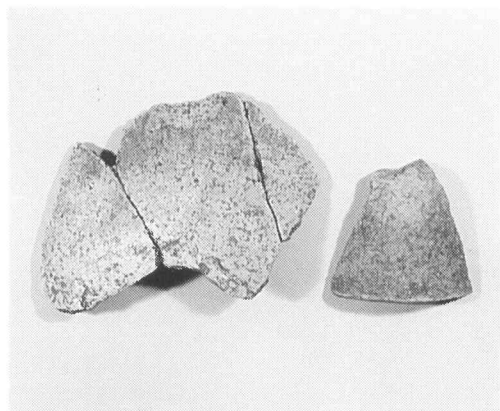


(4) 第2号堀断面 (SPD-D¹)

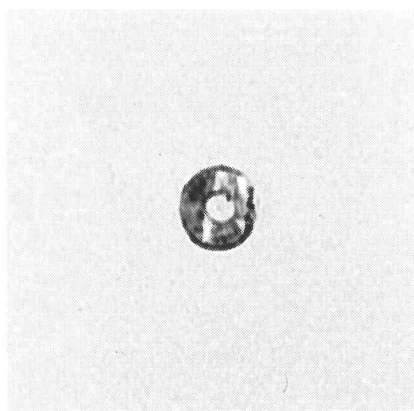


(5) 第1～3号堀・第1号溝断面 (SPE-E¹)

图版12



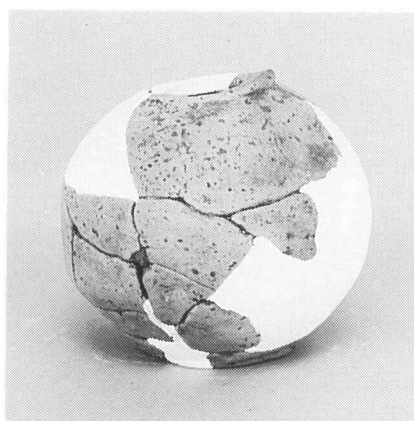
(1) 第1号住居跡出土遺物 (第7図-1・2)



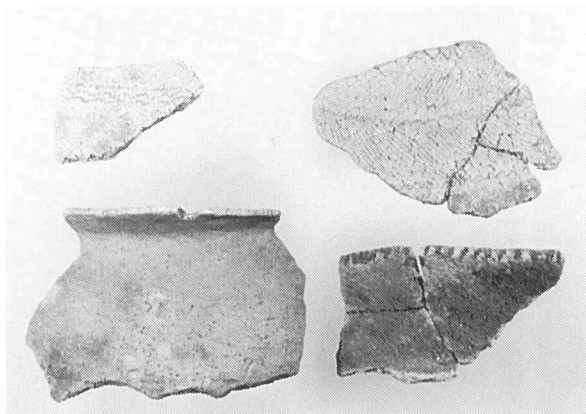
(2) 第3号住居跡出土滑石製小玉 (第10図-1)



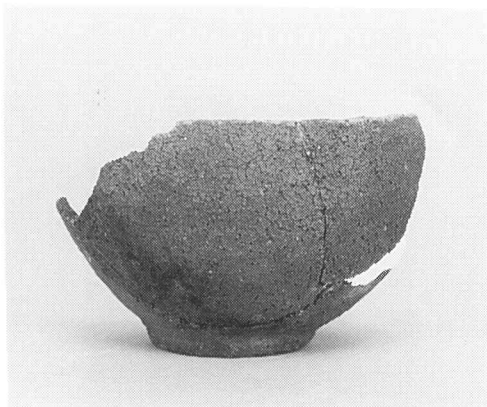
(3) 第3号住居跡出土遺物 (第13図-7)



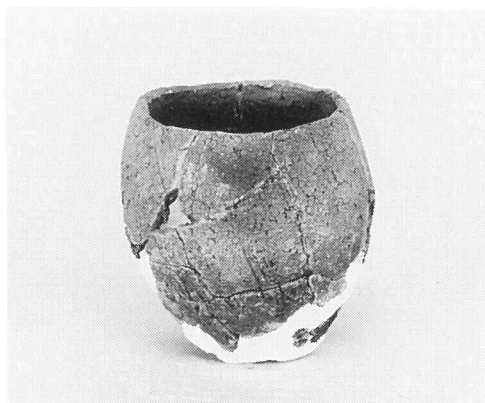
(4) 第5号住居跡出土遺物 (第16図-2)



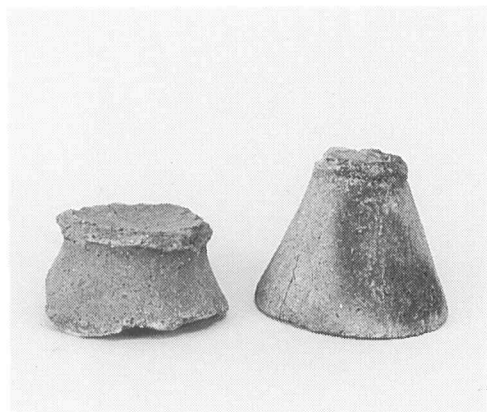
(5) 第5・6・10号住居跡出土遺物 (第16図-1・第18図-1・第23図-1・3)



(1) 第8号住居跡・第1号溝出土遺物
(第20図-3・第35図-39)



(2) 第10号住居跡出土遺物 (第23図-2)



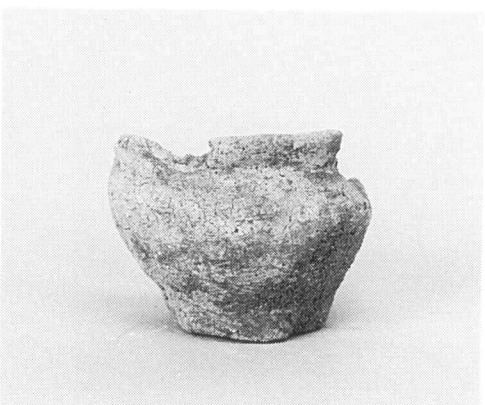
(3) 第10号住居跡出土遺物 (第23図-4・5)



(4) 第11号住居跡出土遺物 (第26図-2)



(5) 第12号住居跡出土遺物 (第28図-1)



(6) グリッド出土の遺物 (第45図-2)

图版14



(1) 第1号溝出土遺物 (第32図-1)



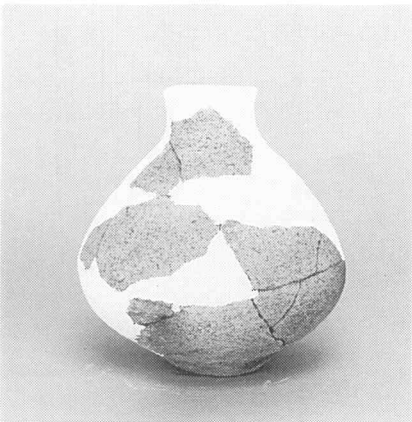
(2) 第1号溝出土遺物 (第33図-4)



(3) 第1号溝出土遺物 (第34図-18)



(4) 第1号溝出土遺物 (第34図-19)



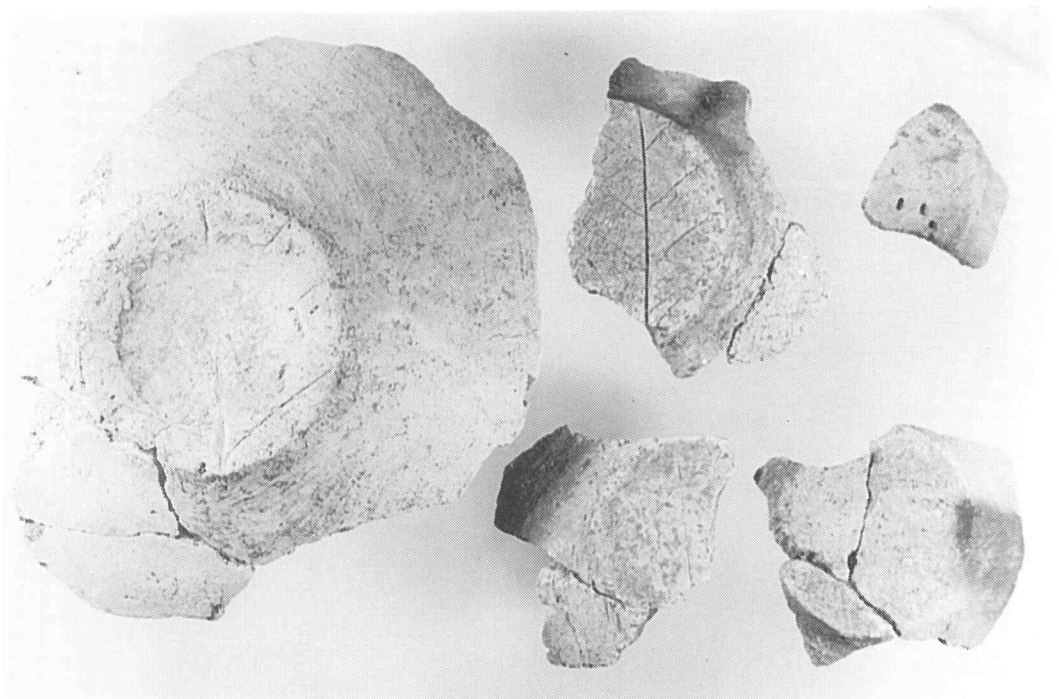
(5) 第1号溝出土遺物 (第34図-21)



(6) 第1号溝出土遺物 (第34図-20)

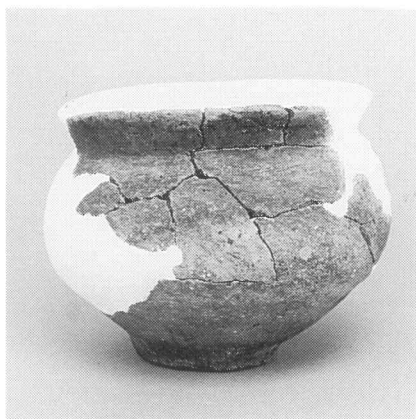


(1) 第1号溝出土遺物（壺形土器の口縁部）（第33図）



(2) 第1号溝出土遺物（壺形土器の底部）（第36図）

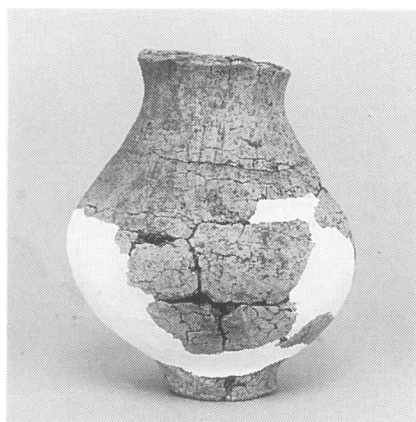
图版16



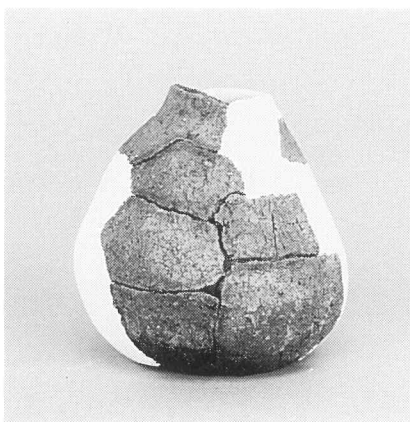
(1) 第1号溝出土遺物 (第35図-29)



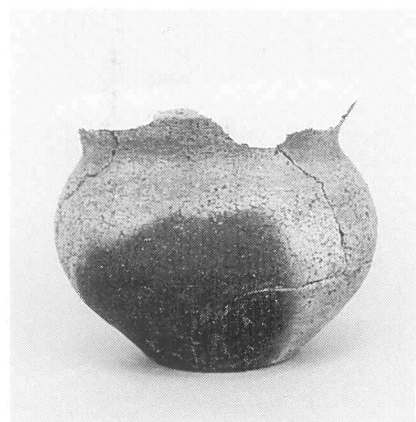
(2) 第1号溝出土遺物 (第35図-36)



(3) 第1号溝出土遺物 (第35図-37)



(4) 第1号溝出土遺物 (第35図-38)



(5) 第1号溝出土遺物 (第38図-64)



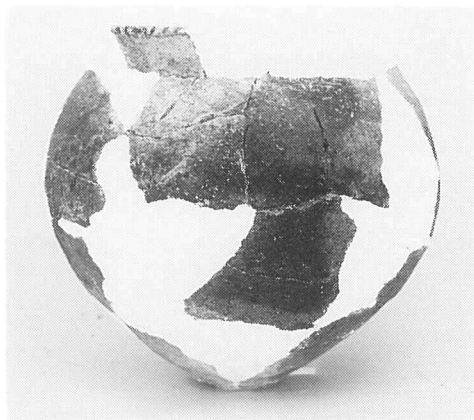
(6) 第1号溝出土遺物 (第38図-65)



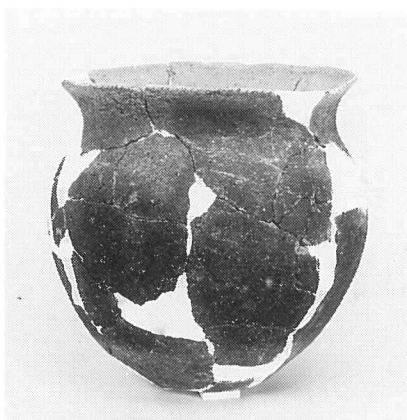
(1) 第1号溝出土遺物 (第37図-49)



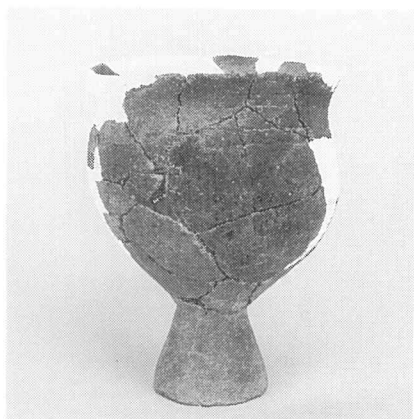
(2) 第1号溝出土遺物 (第37図-51)



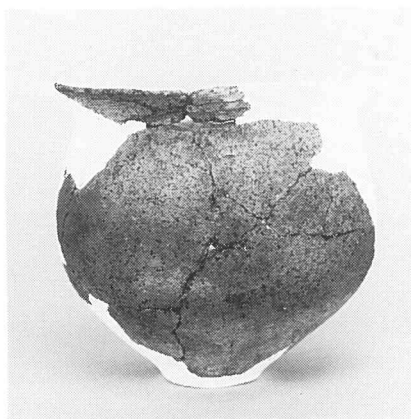
(3) 第1号溝出土遺物 (第37図-53)



(4) 第1号溝出土遺物 (第37図-54)



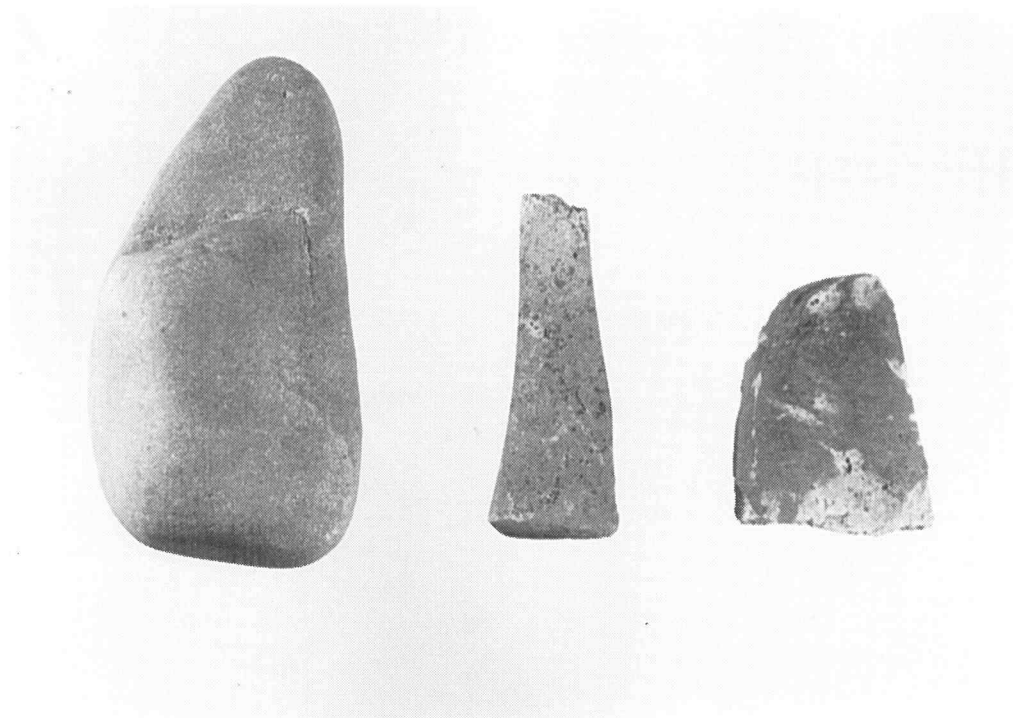
(5) 第1号溝出土遺物 (第38図-56)



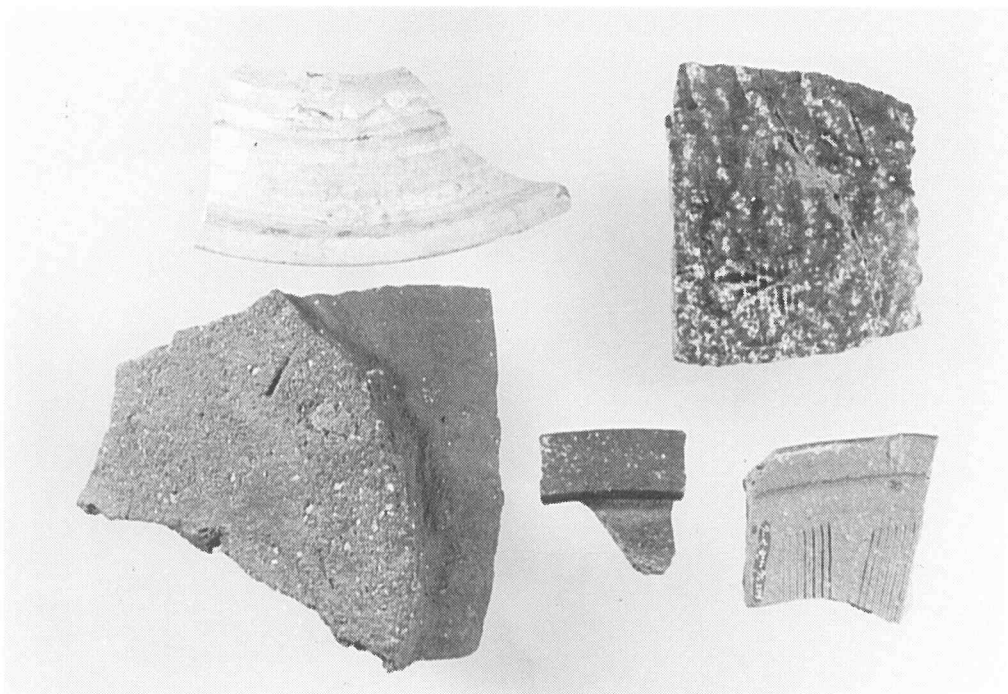
(6) 第1号溝出土遺物 (第38図-57)



(1) 第1号溝出土遺物 (台付甕形土器の脚台部) (第38図)



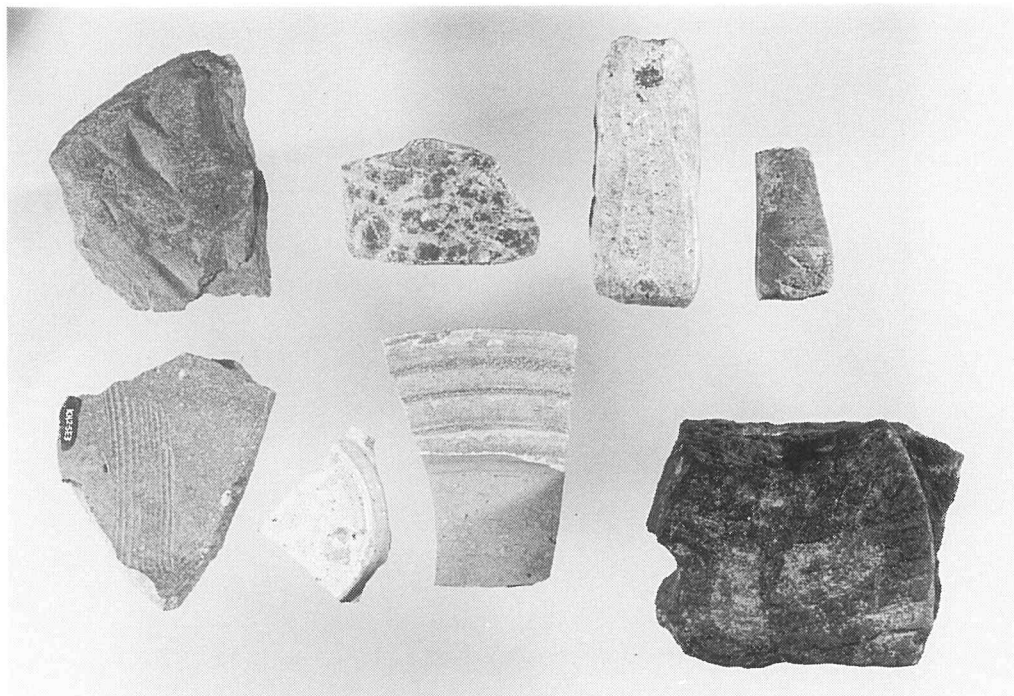
(2) 第1号溝出土遺物 (第39図-66~68)



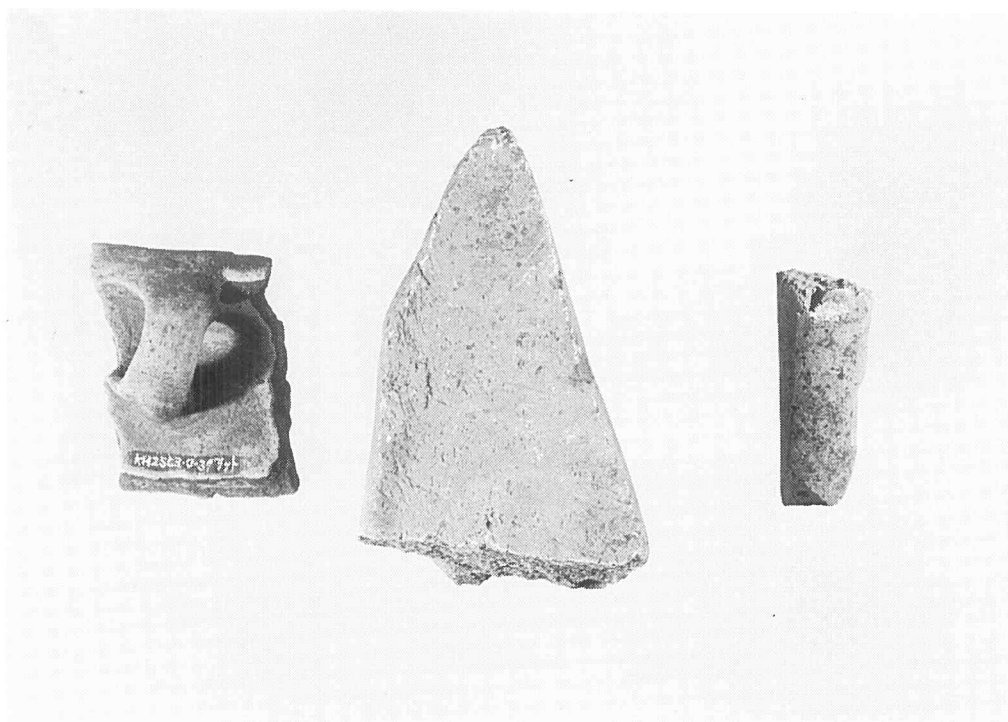
(1) 第1号堀出土遺物 (第41図)



(2) 第2号堀出土遺物 (第42・43図)



(1) 第2号堀出土遺物 (第42・43図)



(2) 第3号堀出土遺物 (第44図)

報 告 書 抄 録

フリガナ	カミトダホンムライセキ							
書 名	上戸田本村遺跡 II (第2次)							
副 書 名					巻 次			
シ リ ー ズ	戸田市遺跡調査会報告書				巻 次	第6集		
編 著 者	小島 清一							
編 集 機 関	戸田市遺跡調査会							
所 在 地	〒335 戸田市上戸田1-18-1 ☎048-441-1800							
発 行 日	1996 (平成8年) 3月28日							
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コ ー ド 市町村	コ ー ド 遺跡	北 緯 (° ' ")	東 経 (° ' ")	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
カミトダホンムラ 上戸田本村 遺 跡 (第2次)	トダホンチョウ 戸田市本町 3丁目6番4号	11224	006	35°48'12"	139°40'30"	平成5年 9月20日 ↓ 平成5年 11月20日	648.35	共同住宅建設
所収遺跡	種別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
上戸田本村 遺 跡 (第2次)	集落	弥生～古墳 時代	住居跡 溝	13軒 1本	土器・石器 土器・石器		断面がV字形であり、 土器が集中して多量に 出土している。	
		中世	堀	3本	陶器		それぞれの堀から内側 に井戸跡が伴って検出 されている。	
		時代不祥	ピット	12				

上戸田本村遺跡Ⅱ

埼玉県戸田市遺跡調査会報告書 第6集

発行日 平成8年3月28日

発行 戸田市遺跡調査会
戸田市上戸田1-18-1
戸田市教育委員会内

印刷 (有)石井印刷所
蕨市錦町2-6-1